

餘生偶錄

二

昭和十四年八月中浣起筆

特別  
14  
1919  
500



176765

餘生偶記

昭和十四年八月病中記

○山東一師(直隸)の初年、早稲田の家塾を用き、その後、  
 教授したる、早稲田の書は、今井上和雄の書也、三見見を後  
 人初め、早稲田の事を知ることを得た。山東の家塾と、早稲田の流  
 二年三月、塾名を北門社、流塾とよむ。塾名、早稲田の流  
 本塾、早稲田が、早稲田の規則書、早稲田、早稲田の塾長を主と  
 し、早稲田の塾長を主と、早稲田の塾長を主と、早稲田の塾長を主と  
 師とす、又牧牛や蔬菜花木を栽培して、早稲田の塾長を主と  
 の流とす、早稲田の塾長を主と、早稲田の塾長を主と、早稲田の塾長を主と

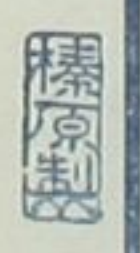
長興山人寫



小室翠雲筆 激湍  
(白閃社展賛助出品)

35-9286

雅依り報すもを擧ぐし、在るまゝ三十四名とあり、此の額金も其後、  
ある山東の人、柳屋為吉と號名とあり、其人を詳分りし  
り、亦は明治四年、銀行の元、社利金千匹月  
所利金二百月俸金二万一千とあり、亦は都立の支店、其の  
私利が十六ヶ所あり、と山東の額、才六位とあり、とある、  
生の額、分り、自分、こんど、早稲田の大隈邸内、多々、大隈、海軍の  
ある、あり、と思ふ、とあり、とあり、とあり、とあり、又、尺、新、ハ  
も、早稲田、英、子、額、を、つ、い、れ、と、ふ、が、こ、り、首、後、陸、三、分、尺  
に、此、と、ふ、人、れ、と、ふ、か、ら、い、つ、か、す、へ、れ、こ、と、も、あ、る、が、今、の、大、隈、公、使  
の、生、も、柳、屋、為、吉、の、下、に、な、り、し、其、部、に、あ、つ、れ、と、夢、へ、て、あ、る、  
山東の柳屋為吉、柳屋の額、を、建、築、し、た、ら、う、と、大、隈、海、軍、を、  
建、築、す、る、に、出、た、か、ら、あ、つ、の、栗、林、を、あ、つ、れ、と、あ、る、の、こ、



それは山東の額の女とあり、生、の、か、と、自、合、専、ハ、考、く、こ、の、額、  
の、り、る、こ、の、合、の、こ、の、。

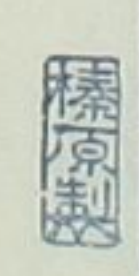
山東の人、柳屋為吉、初め、早稲田の、柳屋、の、つ、て、之、を、和、名、と、し、た、後、  
難、得、な、と、河、内、海、軍、に、な、り、大、隈、の、柳、屋、為、吉、林、山、五、麻、の、  
共、に、ま、つ、た、柳、屋、為、吉、と、な、り、後、北、海、道、に、移、り、と、出、版、の、石、版、を、  
あ、つ、た、柳、屋、大、隈、の、名、を、得、た、十、年、の、後、又、陸、奥、家、元、の、謀、に  
共、に、出、版、と、呼、ぶ、た、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、  
六年六月の、日、に、な、り、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、  
と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、  
と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、と、あり、

一 牧牛の説 綿羊を牧するの説 小幡高次郎  
一 利学正字 陸奥家元

一 北門急務 北門急務 國本監製著  
 一 格物入の和解  
 著

○江戸時代の名詞で後世亦一重なりしもの深山あるが左の国を  
 ニ関するものも挙げしえんと

一 地本と云ふ言ふもの、えん錦繪を指し、此よみ  
 傍々の向屋を地本所とも云ふ、地本と云ふのは其土地の  
 知恵と云ふので、地酒れとか地ぬれとか地口と云ふこと  
 同様に、えん錦の(地)本は、地本と云ふか、漢文を以て版  
 一と云ふを地本と云ふこと、主として錦繪の版  
 の類にあらんか、洋理を俗歌のやや其の書



世ふが、地本屋の取扱の傍と云ふ

一 錦繪の種々の彩色を施す故に、えん錦繪を「幾重の墨  
 繪」云ふ、紅紙や法繪の如く、えん錦繪は、えん錦繪といふ  
 繪の具を用ひ、このこと、えん錦繪は、一版があつて、五  
 色摺り、えん錦繪の五版を重なり、錦繪といふ、えんを重なり、の  
 に、見當を誤ると、えん錦繪の所、繪の具、つくり、の、色摺  
 の、えん錦繪、えん錦繪、えん錦繪、えん錦繪、えん錦繪、えん錦繪、  
 屋、えん錦繪、えん錦繪、えん錦繪、えん錦繪、えん錦繪、えん錦繪、  
 吉石、えん錦繪、えん錦繪、えん錦繪、えん錦繪、えん錦繪、えん錦繪、  
 であつた。

一 版権の法令の無つた時代、出版屋同士の申合せ、校株と云ふよ  
 か、あつた、えん錦繪の、えん錦繪の、えん錦繪の、えん錦繪の、えん錦繪の、  
 裁判、えん錦繪の、えん錦繪の、えん錦繪の、えん錦繪の、えん錦繪の、

そういふれが、さういふわけの複製の新刊が無くとも、その發行も  
 のういふのが、殊に親刻とん比、上方の西鶴抄か江戸の數  
 刻とん比のも、其の一例である。書籍の持株、其の出版が  
 の終尾、その代的と書名を列記すること、通例であつた。其  
 書店が地圖と出たものと、以上の複製、東條せいで  
 くらふと、あつた、餘圖の版を買取、これであつた、こと  
 であつた。

一 施本は無代價本か、施典する本が、云ひ、今の宣傳本は、寺  
 官から傳起、數の、その施本とて、頒布せんが、今、その刊利  
 の意味を離れて、凡數の、其の、家長の、意向とする、やうな  
 ことを、おぼしめたのも、少くも、あつた、と、批、おぼしめ、家  
 長と、授、し、て、さういふ、心、ま、ち、は、市井、盛、ん、す、行、ひ、ん、じ  
 書、を、授、し、て、さういふ、心、ま、ち、は、市井、盛、ん、す、行、ひ、ん、じ

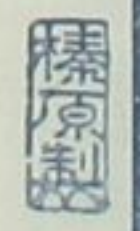


さういふ、講、中、から、種、々、の、ものを、取、り、て、併、つ、て、さ、ういふ、書、に、使、用、さ、し、  
 銘、も、ま、ま、へ、ま、つ、つ、て、柱、の、張、り、つ、け、直、き、胡、夕、え、て、服、當、と、  
 せ、し、其、と、い、ふ、ま、ん、ま、の、傳、を、刻、し、印、施、の、字、が、刻、せ、て、な、り、  
 この、施、本、た、る、こ、と、が、知、れ、た、人、を、尊、ぶ、を、集、め、て、又、な、り、こ、と  
 がある、が、甚、近、の、こ、と、で、な、つ、て、さういふ、人、を、感、化、す、る、や  
 う、な、つ、つ、と、の、れ、に、ま、ま、あ、つ、た、な、り、

一 次、に、「早、見、」と、い、ふ、書、名、の、ある、一、枚、摺、が、流、し、行、な、つ、た。こ、ん、の、油、法  
 と、ま、ま、と、い、ふ、の、り、り、の、紙、が、毎、一、紙、に、誰、か、の、飛、か、す、の、の、り、  
 と、一、寸、陸、寸、と、て、是、を、ん、ん、の、用、が、并、ず、と、ま、枚、も、ま、ま、と、一、枚、摺  
 (或、は、南、面、摺)と、し、折、疊、し、て、懐、中、に、お、も、つ、て、ま、ま、と、い、ふ、の、り、  
 にも、流、布、し、た、傳、り、二、三、の、ま、ま、と、い、ふ、の、り、を、感、應、す、り、行、な、つ、た。此、の、  
 づ、か、ら、も、此、一、枚、摺、の、大、い、う、行、な、つ、た。其、の、後、合、さ、し、て、其、の、合、さ、し、

概概が一役招きうそ流布しん大改をうの市井をさむり抄紙  
かゝんたくりしといつた改の人が直ちに在て紙を抄くといふ  
と後比にこそあるが、まんか二百数十枚の多きといふかあつて日  
用はなれはなれのことか皆々こり一枚招きうつておりのよある  
うに比にこそある。滑りて都合助の紙のともあふべきといふは流り  
物より他分味向のともあふ一枚招きうつて、例へば名刺の  
銘あるし、書画の流刺入るまゝ、名工の肖像、茶席の名  
書、同さし、類かましく紙を日よる作らん、あつても  
あつてもいふことなれ

一 春書と枕草紙とよふは浮世俗の極致に比んるなれしとれ。  
浮世俗が外國の珍重せられるもの字に春書外はなれある。枕草紙  
は一枚招き何枚かといふ冊子のよもあつたが、風紀上は彦頭公

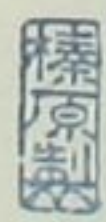


然双巻しなうつたといふへ、まの流布の盛んをいふ、柳屋と  
入り、諸大名も玩んだ。浮世俗の大家が懸ひる千紙の競争をし  
りも定り、此給ひあつた。他分は遠名にさうく花をまくり、これ  
とあつたといふつた。世帯とこの四も、此浮かむる達といふ。ど  
いも此程の俗り遠く思へて書いた紙があるが、日本てい遠く思へ  
らうと物一杯と力をあつた。給紙も懸而うと、重板をんたから  
俗もあつたといふことなれ

今がハアトリーとモデルとを裸体としてを描き、その形を土佐  
の流流が人形を画し、その體を類まうけた俗か多く、俗に  
彼等も春書を作つたが、浮世俗のこころをうたふとい行かなう  
と、男世交指の肢体、複雑の線が、まんが、二角、三角、五角、六角  
つたのり春書をかくことか、得た紙を覆ひ、おんを真面目

画家の肉體に春意を書かぬらうらうら子もそこらあえ夜  
本をたへ人間を裸体として物本を修ふ、そんな衣類を着せ  
文藝中の男女の面影や陰毛をそのかゝるかゝる陰毛を  
の髭や口の世傳河日ありや、画家の物本の肉の陰毛を  
生しそのか性々あるはも亦も偶れひき。淫世伝と卑  
俗のよりして長く軒茂れば何んを同らん人間のせい画  
ハ此をから起つてきれば人間本能も姿が若し淫世傳の春  
意が興つれば、ドンナに幼穉に不釣合のおわらうらひあ  
つてらう。

○江比銀ハ斯くも和音を説いてゐて打南支那の國民を動かしてゐるが  
日本と打合があるかといふは、さういふあはれを交司合を友と分るればこ  
この所々も出てゐるが、又ハ五月申、齊ハ日本をやつて来ては約テ



月禮清在して注般の打合を遂げても六月申初旬、信濃ハ此と  
云ふのいふやうである。

蘇聯軍との回境に、毎日死傷相ひ日本が勝利を得て居るが、  
市定下ハ此ハモノハんに推して、初旬ハ日本軍ハ全滅の敗  
と取つても、事ハ此で三聯軍が皆初死ハ日本流ハ全滅して  
谷ハ此の利と敵の銳利の大砲をやらえて退却も出来ず、全軍  
現況ハ此の如く、痛ハ素々も、寒兵ハ我つて不利もあるが、  
こんなも、是が駐屯の或る兵力を割つて、派する方だとい  
ふ。

英政府軍略と執を淫海軍、是ハ八兆離して目ハゴクハして  
か、侍甲ハ志きりも全力を奉けて、侍甲と侍甲する、この主張  
であるが、海軍ハ本國を敵として、難ふことと、その向表がある

てあること、今初めその主張は、六月初旬の新政案の協定の  
なるべくその主張である。而して海軍の斯く主張を包含しての口  
本の主張、獨の口を主張する、むしろ陸軍の志きり、自  
説を主張してゐる。今も法をいふ、實に政海大體  
に參加すること、獨の利用さすべからず、従つて日本も参する所か  
らぬか、海軍の主張も無き理か、ぬこと、斯くは、海軍が認  
るべからず、後、何等かの歩み、等して海軍折衝のいふこと。

此の陸海軍の主張も、四部、一、二、三、四、を或る勇氣の陸軍特設の近衛公  
を、獨の主張も、陸軍の意見か、通らぬ、陸軍を、新議を  
ぬこと、迫つたと、又海軍の、山本、次官、支権を、握るゝる、  
其の主張も、亦、強硬であること、首、長、の、扱、り、か、六月十  
二、決、議、の、決、定、も、長、り、陸、軍、の、こ、こ、の、勢、力、を、い、は、す、と、い、ふ、外、交、的、



獨をして我儘の聽従せしめ、いかに力あるべきである。僅ま、  
ぬ、七、部、の、主張、も、亦、強、硬、である、今、の、協、定、も、亦、強、硬、である、マ、カ、カ、を、  
い、は、す、行、く、ま、の、外、交、も、亦、強、硬、である、人、か、い、ま、と、思、は、れ、  
新、議、の、決、定、も、亦、強、硬、である、所、也、八月十日、  
口、川、柳、と、い、ふ、二、三、を、採、録、す、

永、念、で、見、る、氣、の、深、く、排、ち、り、ぬ、  
情、を、い、は、す、海、軍、も、亦、強、硬、である、井、元、の、新、  
へ、強、く、り、を、予、の、雷、に、つ、か、せ、ん、と、  
穴、を、出、て、穴、を、入、り、ま、は、穴、の、世、法、  
傾、城、の、誠、を、い、は、す、(逆、の、ま、き)、  
と、惚、を、止、め、ぬ、か、外、に、惚、れ、人、を、  
釣、針、の、や、り、ま、と、い、ふ、人、を、つ、り、



のれつれめいずと餌が果をうり

空腹入りのいささうぬ蚊を食らる

らんもまれ漢く這入の上草履 近世良

えんこうい庭の花見て暮らさるん

人の武士も傾城れいやかえ

吉神の動けか動く心なる 道也良

防色華山の秋芳さつりの錦一名傾城息子侍授と云ふ是も

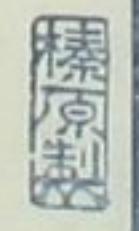
紙出たる方がある、華山の夏名信の岸亭茶戸也良もを用ひ

あり、あの楠向の内誰也良と注し、わが華山の心と秋芳、ぬめしある

○三伏の暑熱、遠く雲もくも中り、候入しをみる、あはれ大層

の地、おま

吹上の瀧こころ目のか、やません、あはれあつてんや



けり、お

ときのもん、祝のあ、か、け、けり、あ、つ、さ、の、一、と

けた、あ、ま

重あはれ、早のおとどき、こあ、あ、つ、て、こ、日、の、あ、ま、さ、ん、

か、れ、も、い、ん

○横濱の一、名、お、原、宿、を、り、七、段、一、也、ん、ん、早、福、の、出、身、は、凡、心、を

解、れ、ん、故、ん、か、任、を、一、に、三、道、園、を、見、て、七、段、ん、か、趣、味、の、一、端、を、ん、る、

是、る、故、ん、ハ、画、界、の、若、手、を、任、護、し、る、多、く、の、美、術、品、を、喜、ぶ、と、言、は、れ、

り、夫、子、自、身、相、南、身、南、畫、を、必、い、は、り、一、也、情、い、い、る、故、年、

学、業、の、不、況、を、沈、冷、し、れ、凡、界、横、濱、の、必、き、家、は、珍、く、い、存、在、い、

あ、り、れ、

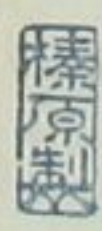
○善、ら、者、き、は、ん、を、る、ま、子、の、誘、り、の、あ、る、り、願、多、い、武、名、の、多、摩、



意を強らるゝ。

八月十七日録

口口英法ハ法平問題ハ解決を俟たず英四側ハ  
 遷引又遷引ハ利度決裂ニ終向する如くうるときは、當初  
 一般原則ヲ就テ我外おとクレイギーの談判が、あつた、行  
 つたの、まゝ、さうもあつた、人から思ふと、糖を長びてあつた、春  
 至則法を、元か、英四側ハ、早く、進道を進めて、あつた、  
 こと、今、分つた、え、お、換、り、公文、と、日本、文、ハ、全部、英四側  
 へ、飛、流、した、の、ん、思、く、ふ、英、四、文、と、換、り、承認、ニ、二、ワ、の、字、が  
 仕、分、け、せ、ら、れ、る、ふ、ん、ハ、レ、ク、ナ、イ、ツ、と、せ、る、へ、き、所、も、原則  
 の、首、部、ハ、レ、ク、ナ、イ、ツ、の、字、を、用、つ、て、る、が、他の、部、分、ハ、動、し、て、ハ  
 ノ、ー、ト、の、字、が、用、ひ、と、あ、る、ノ、ー、ト、は、氣、を、留、め、る、と、い、ふ、が、難、い  
 意味、は、あ、る、え、ん、だ、か、く、英、首、お、ハ、英、四、の、方針、ハ、其、も、し、變、じ、ぬ



# 政治界

時の間にかする／＼と元の態勢に歸つて  
 来る、金力なり色々の潜勢力で何時の間  
 にか舊態に復して、結局においてこつち  
 が押されるといふことになつて来るので  
 ないかといふのが、所謂老獪英外交の  
 眞髓であらう、かういふやうに考へるな。  
 當時老獪英外交と言つてわい／＼騒い  
 だけれども、寧ろ警戒すべきことは、向  
 うがどういふ手を打つて来るかといふこ  
 とよりも、その後に対する向うの動きで  
 す。さういふ點にも狙ひがあつたやうに  
 感じて居るんだな。

**G** 大體會談を始める前から、一般原則問  
 題が討議されるといふことは、クレイギ  
 ー自身も十分承知したところだと思ふ。  
 だから十五日に始まつて第一次會談をや  
 り、十九日に第二次會談をやつて、二十  
 一日に第三次會談をやつた。そして二十  
 二日の晩遅く第四次會談の結果有田クレ  
 ーギー協定が成立したのだから、僅か一  
 週間ぐらゐでこれだけ大きな問題が片付  
 いたといふことは、事前に相當英國側にも  
 これに應諾すべき用意があつたと思ふ  
 んだ。

## 英國の眞意如何

**F** そこでだね、さうすると大體東京會談  
 が出来るまで、さうして一般原則に關す  
 る有田・クレイギー會談といふものがど  
 うして外交的に出て来たかといふことの  
 話は、大體終つたと思ふんだけど、そ  
 こで今度は有田・クレイギー協定が出来  
 て、これが世間に發表された時に、一部  
 では非常に意外だ、英國がこゝまで讓  
 るとは思はなかつたといふことを考へた  
 人が、これは相當政界の上層なんかにも  
 あつたやうに僕等聽いて居るがな。そこ  
 でどうして英國がさう意外と思ふ程讓歩  
 したか、これは普通一般には英國の讓歩  
 と言つて居るが、よく考へて見ると讓歩  
 でも何でもないんだな。これは唯極く當  
 り前のことだと思ふ。一體有田・クレイ  
 ギー協定といふものは、支那における日  
 支交戦の状態を認識して、さうして支那  
 を援け日本を害するやうなことをやらな  
 い、さういふ趣旨を在支英國官憲並に英  
 國國民に徹底せしめる、それだけのこと  
 なんだ、それは極めて普通のことなんだ

**D** あの翌晩だつたか、吾々がクレイギー  
 に會つた時に、クレイギーが、これは決し  
 て英國が極東政策を轉換したのではない  
 英國は既定方針でやつて居るのだといふ  
 ことを盛んに強調して居たね。私がこれ  
 を度々強調して居るけれども、一部の日  
 本人はさう思はない、英國が敗けたと言  
 つて居るが、さうぢやない英國は敗けた  
 んぢやないといふことをはつきり言つて

居つたが、その陰には、今度の日英會談によつて協定を作つたが、結局は英國の大きな政策を變へるのでなくして、手先の方法を變へるのだといふことを意識して言つて居たやうに僕等には思へたがね。

C あの時にクレイギーが僕等に言つたことは、二つの點があるんだ。一つはあの原則が決して北支だけに適用されるものぢやないこと、少くとも日本軍の占領したところは何處までも適用されること、それをあの覺書について註釋した譯なんだ。だからその時に質問した者は、北支だけに限ると思つて居つたのが、日本軍の占領した全支に適用されるといふので非常に意外に思つたんだ。ところが一方英國政府は未だ曾て他國の要求によつてその政策を變へたことがないと言ふんだ。今度の問題についても決して英國は政策を變へたといつて居ない、英國の極東政策は昔から今度の日英會談を通じて全然同じものだ。然らば何を今度の覺書で決めたかといふと、詰り支那における現地機關だね、このことをマミナリといつて居つたがね。この現地機關が

非常に古いといふんだね。古い爲に新しい事態に適應しなかつたといふんだ。だからその機關を新しい事態に適應するやうに直すやうに工風する。そのことについて豫て英國は日本と相談するチャンスを持つて居た。偶々そのチャンスが來たから大いに喜んで、胸襟を開いて日本と話したといふんだ。そこはまあ非常に老獪なんだね。

#### 英國覺書と「認識」の意味

D 今C君の言つたことは全くさうで、後で議會で度々チェンバレンやハリファックスが言つて居ることだし、一部の日本人が英國が非常に讓歩したと言つて得意になつて居つたところへ、今度後になつて經濟問題に入つてから非常に英國が強硬な態度を示したといふことによつて、非常に意外な感を以て周章で、居るやうに見られる人が随分多いが、これはもう英國の初からの方針で、そこで英國が初めて眞意を現はして來たのでないかね。僕等さう思ふね。

C 非常に細かいことだと思つただけ

ども、H君の言つた、最初有田とクレイギーの會つた時に、有田がクレイギーに要求したが、クレイギーは、自分が意外だと思ふくらゐに日本の要求は寛大だといふやうなことを言つたといふけれども僕は英國の發表した覺書を見ると、日本の譯文といふものが非常に不完全だと思ふんだ。それは英語の原文を見ると、最初は、支那において大規模な戦闘が行はれて居ることを認識す——レコグナイズといふ言葉を使つて居るのだけれども、その後の書流しになつたところでは、日本軍の占領して居る地域内における治安とか、日本軍の安全の保持とか、日本軍を害し、敵を利するやうな行動及び原因を排除する必要がある、さういふことを認識す——こゝでも日本の譯文では認めるといふのだが、原文ではノートとある。ノートといふのは心に留める、留意するといふことである。それが譯文の書流しで讀むと、それを積極的に英國が認識して、日本に協力して害我利敵の行動原因を排除する必要がある、さう英國政府が認めたといふやうに解釋出来るのだけれ



# 日英會談經過

英蘭領の會談申込以來日英會談の  
決定状態に陥つたまでの經過をた  
どつて見ると大要左の如くである  
六月廿六日 クレーギー大使は有  
田外相を訪問、天津の事柄解決  
のため東京において日英會談を  
開始したと自ら申入る  
廿七日 有田外相は平沼首相、板  
垣陸相と協議、英蘭の申入れを  
應答するに決す  
廿八日 チェンバレン首相、英蘭  
議院下院において日英會談開始  
決定を發表す  
七月二日 北支派遣軍當局聲明發  
表▲ハーパー領事、英艦デコ  
イ號で福濱入港▲加藤公使、田  
中領事入京▲陸軍省情報部長談  
を發表、英の敵性排除、現地當  
局支持を宣明す  
四日 有田外相、クレーギー大使  
會見▲杉山最高指揮官、天津租  
界の實情視察、記者團と會見決  
立す  
五日 有田外相、わが主張貫徹せ  
ざるは會談決裂も辭せずと語る  
七日 現地軍代表武藤少將、河本  
大佐、大田中佐、大田少佐入京  
十三日 日英交渉要綱大綱願書で  
決定▲外相兼山岡用邸に河本委  
曲會上  
十五日 有田、クレーギー會談開  
始さる、明頭わが原則的要求を  
提出、英大使本館へ請訓▲南支  
派遣軍當局談表  
十七日 英蘭側訓未着を理由に  
第二次會談遅延▲英首相、下院  
で極東政策不變更を演説  
十九日 有田、クレーギー第二次  
會談、英國面目問題を論ず  
廿一日 有田、クレーギー第三次  
會談、英大使遂に聽従、わが原  
則要求の根本觀念を認  
廿二日 有田、クレーギー第四次  
會談、露書に署名、原則諒解成  
立す  
廿四日 局地會談開始さる▲午後  
第二次局地會談▲日英共同聲明  
公表  
廿五日 治安警察小委員會開く  
廿六日 第三次局地會談、英租界  
の工部局債權問題で意見對立▲  
中支軍當局報道部長談表▲米  
蘭政府突如として日米通商航海  
條約廢棄を通告し來る  
廿七日 加藤、武藤、クレーギー  
私的會談▲第四次局地會談で治  
安問題諒解成立、次いで經濟問  
題の四要求を提出したところ忽  
ち意見對立す▲治安警察小委員  
會も開閉  
廿八日 第五次局地會談、則回法  
幣問題で暗礁に乘上げたためこ  
れを迂回して現銀引渡し問題に  
入る  
廿九日 日英各代表個別折衝  
卅一日 第六次局地會談、治安問  
題進捗、經濟問題では全く意見  
對立▲チェンバレン首相外交演  
説で經濟問題に關し米佛との交  
渉を明言す  
八月一日 治安問題小委員會で報  
告書作成▲經濟問題小委員會租  
界内現銀の歴史的事實を検討▲  
クレーギー大使、加藤大使を訪  
問、英運動の取締につき原則  
的申入れをなす▲ドウマン米國  
代理大使、吉澤アメリカ局長に  
支那における白人排斥の申入れ  
をなす  
二日 大田憲兵少佐、デニス警察  
署長會見▲加藤、クレーギー私  
的會談、回訓未着を弁解す  
三日 ハリアアックス英外相聲明  
發表、日英通商條約廢棄に言及  
脅迫的態度に出づ  
四日 加藤、クレーギー私的會談  
で局地會談延期を申出づ▲田  
中、ハーパー私的會談で治安  
問題協定を成文化  
七日 デニス署長聽任  
八日 加藤、クレーギー私的會談で  
會談遅延を陳弁  
九日 加藤公使はクレーギー大使  
を招致して會談督促を申入れた  
ところ排英運動の鎮壓が先決條  
件であるが如き逆戻の態度に出  
た▲在天津軍當局談表、英の  
遅延策につき疑念を促す  
十日 クレーギー大使に對しわが  
現地軍代表引揚げを通告す  
十一日 加藤、クレーギー私的會  
談▲英國政府、天津テロ犯人の  
引渡しを囑請して公表す▲在京  
英國大使館發表として故意遅延  
の弁解をなす  
十二日 加藤公使、英大使に強硬  
督促  
十四日 現地軍代表團手引揚げ、  
武藤少將強硬意向を聲明す▲加  
藤、クレーギー私的會談▲北支  
軍當局談表  
十五日 香港において英佛合同金  
融會議開催、法幣對策を協議▲  
ハリアアックス外相、經濟問題  
について第三國と協議中にして  
回訓發送未だしと説明す  
十七日 加藤、クレーギー私的會  
談會談猶豫を乞ふ▲杉山最高指  
揮官對英會談方針を聲明▲英の  
回訓發送せらる  
十八日 加藤、クレーギー私的會  
談▲紳士協約を放棄して英政府  
現銀、法幣問題は局地問題にあ  
らず且つ第三國を介入せしめざ  
る限り日英兩國のみで討議し得  
ざる旨を發表▲會談遂に決裂に  
直向す  
十九日 加藤、クレーギー私的會  
談、英大使の背信を問責す▲會  
談は事實上決裂同様の状態に陥

日英會談の果して否上の決裂と云ふは、初めより終るまで一  
とせざる可く、暗く期して不てあつたが果してさうであつた。此会法は英國  
の提議と何れに謝れども、英が其の決裂に決裂と  
するの故、英の果ての英蘭の在りし中、すまひも、今迄の初  
めから我提ち中、任的向致のあつたこと、故善の味  
びあつた後、到り、英を答として、英が他の國の權益と  
關係がある、と云ふを、英の國條内を、引張出して米  
佛二國を誘ひ、遂てこれより提案して、今迄を決裂と臨ん  
だるは、沙汰を、英の、英の初め外相の、今迄を決裂と原  
則と、是れ認め、英の、英の、英の、英の、英の、英の、  
提議の事實がある、英の、英の、英の、英の、英の、英の、  
今も三十日計り、英の、英の、英の、英の、英の、英の、

藤原

今頃と我邦と於て何も得る所か否か唯一つ得れしもの英の  
厚顔不徳と我國民の前で遺憾なく示し出したること  
見る由り我國民に及英の敵愾心を鼓舞ししことひる  
恐恐痛とすや或る階級は其の教訓を照つたことん  
か今頃と得れば結果と云ふてよし、どうせ英との衝突を免  
かんらん。ナシナ事な遊易し東政の爲と主たることか  
よるぞ、英の今頃の外交不信が我邦を及擯ししことんから  
今更も遠慮もせしきんナリ、日本の方略を一轉して英劍  
を英に上向ふこととす。吾は遂にこのことがホーン七最早  
を記す。叩きつゝへきてある。(八月廿二日記)  
○連日の雨は樹木を冷涼に濕氣をせしむる、我が未だの病体  
に新柳のあはるく、筆を執る氣力とす、横山とす、とす

ふ、無聊と曰き、やせん、いろいろのものを讀んで、  
い出ることも、一二月も過ぎぬ。此の政權は初め、  
ふ、と世界の注視せしめ、又ニ午には、  
工の生誕地であること思ひ出され、  
萱浦橋の靈溝橋をあらわす、  
靈と云ふ名の里のこと意味する、  
違ふが今、萱の字の通りである、  
木を治むる、  
北が、  
す、  
仕、  
こ、  
何片が催

淫靡であること、肉欲の事、支那の誘惑、何片飲みを娘の  
女房に「い」と言ふと「一瞬を費した。時々友人の子供の入  
りとするも、頻々とある、軽て去征するの、前様は、名譽の  
去征であるといふ、親の心、遊ぶに痛苦の日付、培く、心ある。  
長期戦の五、人の洞、早坂を勧めた、議論が漸やく現れ、来  
た。天候の程、白河の、汽澄し、此の日本の租界、如  
田んぼ、支那の出入、日本や、早く引かぬ、一旦出入す  
ると全部減水と云ふ、二、三、月、め、か、こと、白合の天  
津と云ふ、こと、二、三、回、あ、世、下、隔、絶、の、う、か、行、ん、出、し、て、か  
く、往、訪、の、西、時、も、追、憶、し、行、け、り、こと、思、ひ、済、む、お  
を、心、ん、ん、事、と、缺、き、じん、の、事、を、忘、れ、れ、文、人、か、あ、り、ん、れ、淵、  
望、真、白、と、云、ふ、画、家、か、離、別、し、れ、先、妻、か、押、れ、居、る、を、出、し

こゝろ、所、へ、出、し、け、り、先、妻、か、あ、り、ん、れ、こと、思、ひ、済、む、つ、う、と、船、を、一、し  
ら、う、つ、て、ま、せ、ん、れ、と、云、ふ、え、き、を、あ、ま、し、後、か、あ、り、ん、れ、一、笑、し、れ。  
紙の缺きが、紙の、厚、紙、か、大、い、な、價、も、高、め、い、つ、と、ら  
く、一、日、一、日、と、い、う、程、の、い、ろ、か、五、日、の、價、か、引、取、ら、れ、今  
は、葉、紙、利、せ、い、最、悪、の、紙、ボ、ん、と、紙、屋、を、つ、け、て、ま、せ、り、葉、紙、か、利、  
途、に、は、月、々、と、い、ふ、と、云、ふ、所、へ、船、を、川、柳、を、渡、り、か、釣、針、の、い、ろ、  
と、と、い、ひ、人、を、つ、け、ら、れ、衣、履、か、足、も、い、ろ、の、汗、を、排、ち、り、い、ろ、と、  
と、と、讀、ん、て、頭、を、解、い、れ、英、國、の、三、つ、の、様、か、あ、り、一、の、二、三、の、  
の、政、令、二、つ、の、元、行、機、の、考、査、三、つ、の、殖、民、地、の、構、造、地、の、三、つ、  
ハ、英、國、を、表、す、と、道、す、と、い、ふ、は、他、國、の、元、行、機、か、よ、う、念、す、か、ら  
英、國、の、島、地、か、特、色、か、無、く、う、う、と、仕、舞、の、に、獨、り、が、身、二、國、の、世界  
を、多、く、と、越、え、ん、と、い、ひ、時、れ、カイ、ザ、ル、の、好、々、を、新、報、を、い、ろ、  
第一回 敵を越す





前獨帝慈愛の姿

【大阪報】皇月旅行の途中昨日本を訪れた前獨帝の御儀ルイ・フエルチナンド公天聖の中に生れた赤ちゃんがもうこんなに大きくなりました。名前は曾祖父に當る前獨帝の名を頂戴しフリードリッヒ・ウィルヘルムさん今年八十一歳を迎へた前獨帝もこの初の曾孫を迎へて大喜び。十九日本社高石會長のもとへ届いたフェルチナンド公からのたよりによると赤ん坊も現在十七ポンドの目方で見事な發育を續けています。五、六週間妻（キナナ）と一緒には曾祖父は最初の曾孫を見てとても大喜びで見守りました。と今はすっかり白髪を戴いて優しいおじいさんになった前獨帝が曾孫を抱へて愛撫してゐる珍しい眞實一枚を送つて来たがフェルチナンド公夫妻にとつて日本訪問の思ひ出は今も懐しいらしく。妻はお國の思ひ出が懐しくてたまらぬと切實な言葉を新國の切實な言葉で返して私達の樂しき旅の行進の樂しさを新國のお目にも出でた。内大將がお出でした。と喜んでゐます。眞は曾孫を抱く前獨帝は（寫真）大獨製

ふの二具  
さうざうと  
いふ  
九月卯の始  
人公論に出  
てゐる、木

きやうと女流の自叙傳が面白かつた。此婦人の初世女主人の校長とつゝ前印の人のあり、現在も校長の志村の人の校長とある、此婦人の後崎橋志を祖として宮内と父としてある。けけの節多かつた所があるが女主人の恥を以て、相方の無力もあり、良人の木内底に對して其の父前獨帝とていふ人木内底

標高製

古くある自分の実情、交りかあつたけ、此婦人の傳記をおもしく讀んだ。実情の始終の好まぬ山の櫻子の下、昔を埋めると命のけ、或る部分と命の如く、残りの自分も食ひて仕舞ひと面白くあり、仄座申邊が他人の遺骨を悉く喰つたという話があるが、これに現代もある事として一説をを引く。

この本の提擧は正さう大塚は、英佛ハソを味方として獨伊の當人として、破んた、ポラードの胸背を敵とすこと、この事、英回ハ者はお、ドを接けんとす、口被令接けんとす、二階ハ、目録の類ハ、英佛ハ唯一の標、果たは計り、英の出す所と、ソはえ来、獨伊の敵回ハ、えと、握りし、えと、標ハ

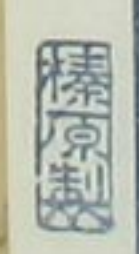
替へんが故にあらず。ソは何故に朽と擬乎す。えむつれか、  
或り偽のポーランドの或る地點をソス對其を約しれども  
らふ、コーラウてるるとポーランドの軍人等、朽の當り  
在り、ソは漁父の利を得んとするに在りや。或る心、或は英佛  
の政略出んを欲する。朽伊の支那を彼よりし、  
得ず知んぬ。ソは政略欲を、冬加するも東方の力を  
おらんせんと欲する。此と想像に難く。此の提議は日本  
に大なる影響を與ふる。あはれ、ソ聯のこれとせむ。  
日本は力を用ひて、斯あるて見ると、伊朽との防共  
協定の入るる及故とらん。感がある、朽のソとの提議は、伊  
も懐疑して居る。ソは日本に一片の協議をなさけず。此の變化  
より甚大の歴力と感ず。此印對政業七熟考と云ふ

櫻痴

す。こと、うりた。日本は朽伊に對して如何なる日對策を案じ  
んとす。朽伊も秋の足らぬが、後著の利用と云ふも、老  
ハ朽自朽行の計るる可也。  
(八月廿三日)



北支那を視て、口々心を固めてある。併し支那の窮乏の深  
 瀕了の大規模を生産するに足るる社会をなすは、社会の  
 實の東北大規模を打つる日本に大なる見地を  
 する。其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を  
 ハるる。其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を  
 行験するに計りがある。何れをかくと、其の東北大規模を  
 其をかくと、其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を  
 一國のやうに東三四と相争ふる。其の東北大規模を打つる  
 其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を  
 其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を  
 其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を  
 其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を  
 其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を



其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を  
 其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を  
 其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を  
 其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を  
 其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を

一 振古未嘗の大戦

- 一 既二三年前を以て、其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を
- 一 亦予々支那に其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を
- 一 支那の四方物も、其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を
- 一 北支那の各州に、其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を
- 一 日本、其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を
- 一 軍費を以て、其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を
- 一 其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を
- 一 国民の財力が、其の東北大規模を打つる日本に大なる見地を

- ・ 輸入を減じて金の流出を禁ず
- ・ 輸出を力づけし金を取り入れんが如し
- ・ 勤儉の奨励外四品の節制
- ・ 代用品の工夫
- ・ 長期債の爲める生産の振興大策と爲す
- ・ 此の爲めは巨額の投資を要す
- ・ 國家紙幣の發行を始む
- ・ 税制の改革を以て行はば
- ・ 回税の増加と共に整理
- ・ 厚生運動と産兒奨励
- ・ 金坑を國庫に集めて
- ・ 親政府人選の扶助

庚午年

一 偽造軍人の執業

の弊を治せしむし得るかむかひは元末より。どらしをも物をも  
早くぬめる様ゆかぬかかむか

○九月一日 此日の種々の意味を記して永く紀念すべき日である。  
即ち公定せんれ奥亞奉公の日のことである。聖諭の目的を  
達して奥亞の覇をせん爲め、國民の奉公を促す公定日。此  
日、國民は自衛自戒し、強海を以て持たざる奉公の祈り、強敵の  
野士も通牒の誠を致すの事此日である。此日毎月の初端と深  
遠なる第一回である。此日の偈々十六年前我輩の志すべき大  
害災の起り、帝都が焦土となりたる志す可き事大厄日は  
、奥亞の奉公の日を以てする目的を達せしむ自衛自戒を



けしめらる。吾等邦の政海敵多し。是かす。義理も因縁もよい。  
我等の漁海軍への聖戰を成る為の其の全力を集中せしむる  
べく、蔣政権の背後をたる英國と東洋を力に致す能力があるに  
あらず。或は其の権益を擁護する為の日本と和すを得ずると  
す。日本をえを交して、其の目的を達すも不  
可し。是し然らずとも、日本は香港を陥れ、ここがホーン  
を占領するも可なり。其の依るす。蔣の政格は頗る甚愼に  
臨み、ソ聯と支那を援へ、一回はもあらず。政海敵多し。是かす。  
強かすとも、其の全力を東方に集中し、得るはあらず。其と  
し、今日の及の敵回あり。支那は在りて、其の提撥が出来る  
思はん。亦ソは支那と善す、よむあつて、蔣政権も其  
其善を思へる。此時に當りて、重慶の股日、其の汪兆銘は、此回

陳炳

氏を組織し、日本と和して、防共を行はんとし、ソ聯を  
攻撃す。● 核も亦此秋のあり、吾等が政海大敵と善すの  
も此故也。日本は、其の閉じ、彼人、世界の強國に皆く同  
一の目論み、論んとす。亦一快なり。九月四日  
○以上述べた夜帝國の政海大敵に入て、其の支那を善す、其の  
進進すの回を、其の中、其の宣明也。其の米國は、其の  
も此の。株式界の運、其の好況を望む。其の政海大敵と  
其の輸入を仰ぐ。又、其の輸入を望む。其の政海大敵と  
輸入税、其の輸入を望む。其の輸入を望む。其の政海大敵と  
一概に、其の輸入を望む。其の輸入を望む。其の政海大敵と  
其の輸入を望む。其の輸入を望む。其の政海大敵と  
其の輸入を望む。其の輸入を望む。其の政海大敵と  
其の輸入を望む。其の輸入を望む。其の政海大敵と

ろうに、吹雪の降る伊の態度が不可能である。格伊の提議  
 からすれば格伊の起つたことにはつて一般の情勢を重んじて格  
 暗昧の地位に在り一旦格伊を棄つたかえり不承の終つた  
 は可成り進行の或る格伊を再格伊の言ふところ  
 云ふところも格伊の言ふところも伊の現下の態度が中主の言ふところ  
 かく英佛が連軍を方り路を伊國を取柄る言ふところ  
 が言ふところを以て格伊の義理を言ふところを言ふところ  
 免角英佛が格伊と格伊の言ふところ中主國を犯す言ふところ  
 大迂回を爲義言ふところかある國の抱かひあるところ  
 凡そある格伊の戦略の先づ力をポーランドに取柄る言ふところ  
 して而して格伊の言ふところを言ふところを言ふところを言ふところ  
 格伊の言ふところを言ふところを言ふところを言ふところを言ふところ

隔るを言ふ人が、北回激戦を言ふり、想像を難くする、格伊の言  
 の要する言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ  
 抜き難い言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ  
 の終る言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ言ふ

### 援蔣ルート杜絶

蔣の『九月攻勢』霧消

**【天津本社特電四日】** 歐洲各國からの武器購入はいつ  
 日抗戦力に致命的な打撃を與へた  
 四日天津に達した確實な情報によ  
 れば歐洲各國の勃發と同時に援蔣  
 各ルートはびたりと活動を中止し  
 ビルマ及び佛領印度、香港等に集  
 積の武器輸送は突如中止を命  
 ぜられ、また外蒙經由蘭州に武器  
 供給を續けてゐた西北赤色ルート  
 も最近は全く休業状態にあり、更

### 兩軍悩む 一要塞線

宣戰報告をしたのち未だに英、佛  
 側が獨に對し積極的に大がかりな  
 攻撃を開始出来ない最も大きな障  
 壁はドイツの西部國境の要塞ジ  
 グフリード・ラインである、これ  
 はフランスのマジノ・ラインと共  
 に絶對突破不能の要塞線であり、  
 英佛側にする獨側にしてこれに對  
 して真正面からの攻撃は絶對不  
 可能である、しかば英、佛側と  
 しては獨に進攻する道としてはベ  
 ルギー通過よりほかはないがベル  
 ギーに對しては英、佛と獨とが双  
 方からかたい保障をしてをりベル  
 ギーは速早く絶對中立を宣言した

### 英佛の三進撃路

即ち一はドイツの北海沿岸への敵  
 前上陸、二は地中海を迂回墨海か  
 らルーミアア通過、三はイタリ  
 亞によるイタリ領土通過であ  
 るが前二者とも戰術的に多大の障







# 東京日日新聞

報新事時

金代部新 一 月金部新 貳拾陸  
 郵費大別金部新 貳拾陸  
 同上外別金部新 貳拾陸  
 科告廣 十五字部 一行金部新 七拾陸  
 指定科 一行金部新 六拾陸  
 雜報採送 一行金部新 六拾陸  
 九の四(三三) 一 代表部新 上  
 編輯兼印刷發行 人 相馬 基

金融 利率、貯蓄有利  
 銀 彌生無盡  
 (營業案内欄見)  
 東京銀座西七丁目五番地  
 電話(總機) 代表五六一

## 英佛 獨の戦争新形態

### 本格的戦闘未開の謎

#### 掛け聲の裏に政略の手

軍事専門家の観測

英國の對露宣戦布告によつて歐洲の天地は急轉たつた。各國間の死活的な大戦争の火蓋が切られるものと豫想されてゐたが宣戦布告後すでに數日意外にも未だ大がかりな或ひは徹底的な戦闘の氣配は見えない。戦前互にあれほど軍備の充實を宣傳し、一戰辭せずの強硬な氣構へを見せた

の強硬な宣傳はしたもののいざとなつて見て最も大切な軍備が必ずしも互に絶對的自信まで行つておらずぬのではあるまいか、とする観方である。ドイツは英佛に對しては飽くまでも守勢にあり、英佛が敢然攻撃に出なければ大きな戦闘は起らぬわけであるが英佛にしてみれば陸軍にしろ現有全力を

集中すべき攻めくちを持たず結局陸軍の決戦が行はなければ空軍の猛烈により一應準備を済ませることが當然考へられるのに、それも思ひ切つた空襲は一度も敢行されてゐない。その理由の一つは空軍の組織であり、英佛ともに大編隊をもつて空軍基地に乗り込めしただけの組織とならざるべしつかり

した組織をもつてゐないといふことだ。その二は人的の問題である。勇氣と投量において斷然突つ込んで敵に勝ち得る自信のない。その三は器材の問題である。徹底的に敵地空襲をするための器材を揃へ得ぬことである。更に考へられる大きな原因は先づ空軍において絶對優勢の偏側に對

して英佛側としては劣勢といふひげ目から思ひ切つて立上れないといふことである。既に戦はさる理由の

**第一** は双方とも本腰を入

れて戦ふ意志なしとする観方である。ドイツはヒットラーのこれまでの政策の行き懸かりから思はぬポーランドへの實力行使となり更に英佛との衝突となり、英佛側はポーランドへの保護協定から遂にドイツに對して立つたがしかも本心は厭ひたくないものであつて、何か外交の手を打てたら打ちたいと

その機をねらひつつあるのである。これに對してはイタリーの觀戰的態度が大分異いとされる。つまりドイツがポーランドを完全に降参し獨裁政權を確立するまで待つとしてゐて、いざその時に英佛側との中に入つて大きな外交の手

**第三** はこの機に及んでな

は双方共先に手を出した愚者になるのを恐れてゐるといふのである。獨の米に對する空襲の氣がねも益じつめればそれで輿論の強い且つ感情的な米國民を刺激して益々英佛に接近せしめ、第一次歐洲大戦の轍をふみたくないといふに

運せしめしむるこゝろに七折の過も氷凍せしむる一折の日のぬめ  
 の此点と運せしむるこゝろに七折の過も氷凍せしむる一折の日のぬめ  
 怒り英佛の甘んじてゐるべし仰の油傳七折のぬめぬめぬめ  
 七折(九月七日)の東京日日新聞の記者を収めしむる冬場のぬめ  
 めなす均すぬめ

東京



電光石火的にポーランドを粉砕しその間イタリーを戦争の境外に逐

等であるが、かうした事案を綜合してヒットラー總統は次のやう

起り得るかも知れないが今のところその英傑は見られない

標準製

# 獨、科學兵器を驅使

## 英佛、獨の戰機熟せず

### 週間戰況

三日、英佛兩國の戰況報告によつて歐洲の天地は再び大戦にまき込まれるやに見えたが過ぐる一週間の英佛戰況は正に降りみ降らすみの五月雨模様であつて英佛の猛烈な官報に拘らずこの三大國間に於ける戰況はなほ決して熱してゐるとは云へない、唯ドイツのポーランド攻撃はドイツが誇るその優秀な機械化部隊の進軍によつて八日夕方には早くもドイツ先遣部隊がワルソーに突入し、ポーラ

占據した然し今次のポーランド突撃作戦の獨軍主力はポーランド西方國境地方に集中され、から獨軍が怒濤の如くワルソーを目指して快速進軍をつづけたものであつて、九日ワルソーに突入した先遣部隊は同主力部隊の一部で同日、ロツツから一氣に百キロ(二十五里)を進み、ウイスマラ河畔ポーランド軍最後の抵抗線を突破しワルソーまで一日の中にとついたのであつた、北方よりする獨軍も目下ワルソーを距る三十キロの地點に迫つてゐる、南北よりする獨軍のワルソー進軍によつてポーゼン地方に

在るポーランド軍四師団は退路を遮断され獨軍の捕虜となる可能性が多い、ワルソーのポーランド軍は早くもプレストリトヴィスクへ退却を開始した模様であつて今この方面に對し積極的態度に出るまい

英佛も亦對獨軍事行動は極めて不活潑で、空戦について見てもイギリスはウィルヘルムスハーフェン軍港の爆撃には十二機、ハンブルグ空襲には僅か四機しか飛ばしてゐないのである

英佛艦隊の各艦隊主力は現在天々の根據地に集結して待機の状態であるがドイツは艦隊戦と同時にポーランドの軍港たるグチニア及びヘラの二港を襲撃しポーランド潜水艦四隻、驅逐艦二隻を撃沈し、駆逐艦一隻を大破した(この結果ポーランドの海軍勢力は潜水艦一隻、驅逐艦三隻、水雷艇五隻、敷設艦其の他五十二隻となつた)

また獨軍はベリ郊外ブルジエ海軍基地に臨むルアールを空襲したに過ぎないのは英佛艦隊の戦艦がまだ動かない點も左もならう

### 海上

なほドイツ側はオルンダー、インズ、二商船が大西洋上でイギリス巡洋艦に撃沈されボモナ艦が西印度洋でイギリス驅逐艦の手に拿捕された、イギリス側はアセニヤ號、ボスニヤ號、マナール號、ローヤル・セブタ、ブカスタム號、レーゼン、ト・タイガー號の六隻の商船が大西洋上で獨潜水艦のため撃沈された

英佛艦隊がいよいよ決定的な大作戦にひきまきりこまれて行けばドイツの潜水艦は再び先の世界大戦に於けると同様洋上を遊し始めるだらう、現在ドイツは潜水艦四十三隻(内、二五〇トン以上二十五隻、五〇〇トン以上十三隻、七五〇トン以上五隻)を有し本年末までに六十五隻の買入れとなる豫定である

院長 醫學博士 篠原 百

内科

東京市芝區白

市電四ツ橋下車

# 舊獨領を回復す

## ヒトラー大統領言明

【ベルリン特電九日發】ドイツ政府スポークスマンは九日「ヒトラー總統はドイツ東部國境を一九一四年の狀態に回復した」と述べた。右スポークスマンは外人記者團との會見でヒトラー總統はかかる地境をドイツに併合する意圖なることを示したが、これによりドイツは二萬七千八百平方哩の土地と二百八十五萬四千名の住民を増加することになると云ふ。

○相違のナリを考へざるに改都を命じられたは、いせとも、智慮の敵の  
る、猶波蘭等の親戚に波が勝つやある。猶舊領を回復  
し、其目的を達し、北に英佛と戰ふ是固に、猶乙  
ハの内心をぬぐふのであらう。伊太利の動かざる譯も、猶が  
波を征服し、に機會の油俵をさるとする、は、在りて、  
ハ、猶も、是を、さす、こゝろ、の、心、も、あ、ら、う、が、ハ、の、英、佛、ハ、

唐傳教の同言する、き形勢を、英佛と敵に戦ふこと  
を欲する意ある、は、お、も、た、ま、は、波を見殺しして、伊の油俵  
に、及、び、譯、し、行、く、ま、い、且、つ、猶の野心達成を是思ふこと  
は、ハ、猶の野心、は、更、く、莫、く、相、違、う、こゝろ、前、途、を、見、透  
して、猶と英佛の決意を固め、其の無視する、ぬ、ま、ら、う、と、  
さて、伊ハ前傳しても成る、こゝろ、伊ハ猶と助けを乞ふ、  
こと、う、る、波、敵、も、あ、ら、う、ま、あ、て、お、も、た、ま、や、伊ハ猶と助けは、  
ハ、英佛の敵を、あ、ら、う、譯、め、先、ハ、志、を、お、り、伊ハ中土を  
補助する、ハ、伊ハ敵を、伊を、助け、る、お、も、た、ま、猶、師、の、  
四、の、回、境、を、此、前、の、大、戦、を、鑑、み、て、扱、く、可、う、堅、守、を、出、来、て、  
ハ、こゝろ、英、佛、と、相、争、う、猶ハ西部を、轉、戦、する、と、ま、る、要、塞  
地、ハ、英、佛、が、先、つ、猶、を、あ、ら、う、が、こゝろ、の、諸、帝、の、大、戦、を、鑑、み、て、



民の皆人するところあり。彼令病窮を制すること目的あり  
とし、戦て祖國の危急迫つたところ、百萬の生靈が  
死を甘んずる所あり。一平

戦に形行機の後交と其故を誇つてゐるが、未だせんを使  
用して目とどういふ奉動を現はさういふ何れもあつたらば、恐  
ろく、また其の後交を誇着るべきいかにあつたらう。又富塞  
の政弊する所を科率的の新法を極く故のからんせき  
動の強、弱の想像を許さざらう。

獨ハ喫スリヤを伴セテエト合ハセ今又ホーラトナリ  
舊録をそと入れにかゝる西積の英佛兩國の本土  
を併せれば、大さく、其人口七萬人と三倍する。その  
獨ハ廿五萬の時程を非で敗ん、滅びたる國ニシテ

標原

昔於五万を對して、多し、懲りて、今ハ獨ハ其の倍せざるに似たり  
て一億英圓の小友と買物したと云ふてゐる。英佛も於  
てその糧食の買物、海を盛んで、其より三ヶ月を待つが量  
があるところあり。

獨ハ例ハ、政府階級と報してゐるが、高は極力弱つてゐると  
その情報も昔と定かあるところ、いふは、後都の利益を支  
難く、故の獨ハ、彼を棄てず、その時程の困難をあらう、  
今ハ政府の報の宣傳や、為め、その所あらう、  
一概に信し難い。

報國の國情を、とんちや、その兵兵と使ひ出さるが、  
の富の、電氣が、自衛的の、射す、概文、銃と、戦車、  
注目するところ、歩兵、車、の、運ぶ、  
注目するところ、歩兵、車、の、運ぶ、



是れも我が有名無名を以て、何れも戦車も、何れも其の用事、  
明く敵軍の事。

無味色の其の武を即ち宣傳戦術と云ふも、今交通の盛  
んに行つて、リリーフレットを飛行機が何十名も搬して、  
か、そのいふ事をも、ラジエーター、核能、宣傳する、或る機、  
相人の巧み、且つ核能、放送すること、其の能と云ふ、  
ハ、其の佛、回、信、こ、う、傳、う、且つ宣傳、材、質、と、多、く、有  
一、と、云、ふ、と、云、ふ、也。

我々は、本國一、故、と、云、ふ、事、も、何、れ、も、困、る、事、果、然、然、か、國、民  
の、交、つ、て、あ、る、こ、と、は、核、能、が、エ、キ、ヤ、人、を、回、外、に、放、散、し、た、り、傳、れ、  
か、ま、へ、傳、せ、る、も、エ、キ、ヤ、人、が、浮、山、の、あ、る、こ、と、を、合、格、に、  
改、進、さ、る、敵、軍、心、と、お、つ、て、あ、る、こ、と、を、改、進、さ、る、こ、と、を、利

用と云ふも、此の事

### 機械化の伊陸軍

## 精神力の横溢

(下)

### 驚嘆すべき最新式兵器

高射砲は多くの種類を組み合わせ、一個所の測量主部の機械上に、  
せた立體測量器を有する測量機が、自動的且つ綜合的に圖示され、  
その伊太利特官連は「大變な新發明  
の電筒指揮によつて活潑してゐる圖示されたものによつて、飛行  
だ！」を連發して重火器の進歩に  
た、この立體測量器は、真開な機  
の立體的航空距離を捕へて、  
我が各國で見つたもの、内最も複雑々高射砲手の耳へ電話される仕掛  
精巧なもの、この印象を受けた敵機  
けのものであつた其他各種大砲  
の高度、速度、方向等が、敵軍の  
戰車砲等も精巧な照準装置を有つ  
觀測隊により測量され各組の測量  
最新式のもので、我等と同行した  
の結果が觀測隊の機軸につれ、他獨逸D.N.B通信社の有名な軍事  
ラチオをもつ宣傳車、料理をし乍

走る戦車に、先に向つてがスピ  
ードの上に載せられ疾風をまいて  
移動し乍ら行はれるのだ。  
◇  
私は最後に、今度の大演習で見た  
もう一つの「機械化」を附加しなけ  
ればならない、それは鐵道文明に  
押し出された機械化ではなく、そ  
れとは寧ろ對上のものと考へ  
られてゐる精神文明の「機械化」で  
あるを諒解し易いやうにいふな  
らば「戰闘する精神力の訓練であ  
る、機械の「機械化」がもつ力は絶  
對のものではない之が精神の「機  
械化」と並行し、精神が機械を支  
持するのでなければ十萬のタンク  
も圓太郎馬車に劣るといふ事實で  
ある

伊國の兵は機械化の状左記に據る見ふべし

# 支那新中央政府を援助 事變處理完遂を期す 阿部内閣新政綱發表

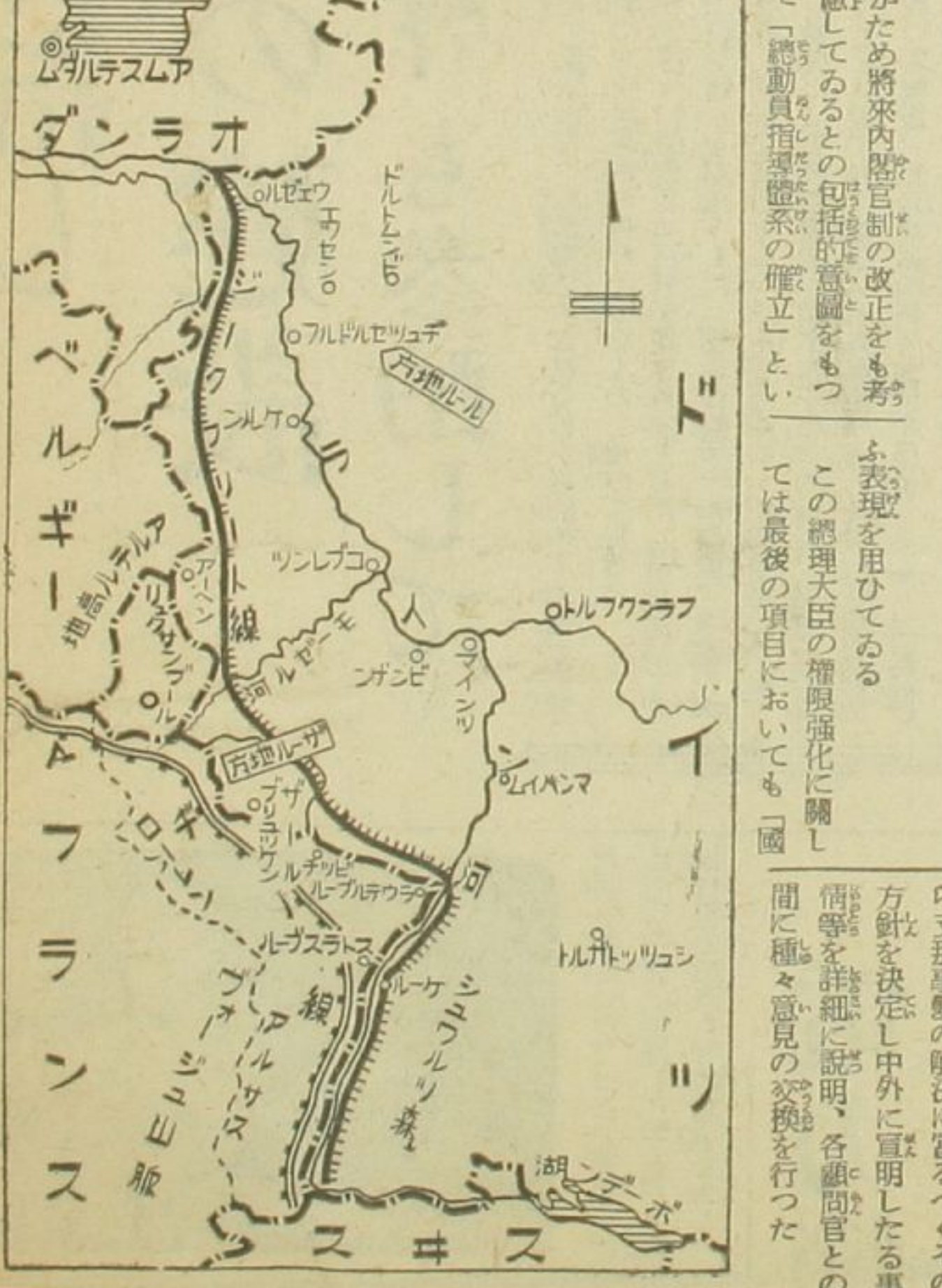
阿部内閣の政綱政策は十三日發表された、阿部首相は近時内外の情勢に鑑み、各階級の意見を徴して慎重熟慮を重ね、法律局長官に命じて政綱作成中のところ成案を得、十二日の午前、午後、二回の閣議において閣議を行った結果閣議決定を見るに至つたので十三日午前官中に参内、天皇陛下に拜謁仰付けられ奏曲奏上の上正午左の如く聲明した、この政綱政策は表現出来るだけ平明にして國民にその底意を明瞭にする點と苟くも聲明した事柄は必ず實行するといふ點に主眼を置いたものとしてゐる。

## 聲明全文

國體の本義に敬し、外交を調整し國防を強化し、産業を振興し、統制生活を確保する等、凡國政全般に亘り不撓の努力を傾注すると共に、時局下の重大海難に際し、支那内閣が緊急を以て其の具現に邁進せんとする露骨の要務をわねの如し、  
**一、根本方針** 政策の中心を支那事變の處理に置き、外は自主的立場を堅持して複雑微妙なる國際情勢に對處し、内は軍備の充實と基本國力の培養とに精進し、内外諸般の施策を此の目的に統合集中し、以て日滿一體の實現を期す、日支新關係の實現を期す。

## 首相の地位強化企圖

十三日發表された阿部内閣の政綱政策は従来となく政府の政綱政策といへば露骨式の項目羅列に類し、實行性が稀薄なのに鑑み今回は實行し得るものだけを特に取り上げて國民に公約しただけは必ずやるといふ決意をもつて作成したものである、即ちまづ現下の時局においては支那事變處理があらゆる政策の中心をなすことを明示し、これに伴ふ自主的立場の堅持、軍備の充實、國力の培養を強調しすべしとの政策の目標を事變處理一本に集中すべきことを根本方針として述べ、次に事變處理の具體策として支那新中央政府の成立を期待するばかりでなく進んでその成立を援助するといふ積極的意思を表



がため將來内閣官制の改正をも考慮してゐるとの包括的意圖をもつて「總動員指揮體系の確立」といふ表現を用ひてゐる、この總理大臣の権限強化に關しては最後の項目においても「國  
**二、支那事變の處理** 支那事變の處理は曩に決定せられたる確固不動の根本方針あり、最近抗日政權の實力漸く減退し、又近く新中央政府の成立を見んとするの趨勢に鑑み、進んで之が成立を援助し之と協力し、更に適切機宜の方策を講じて事變處理の完遂を圖る。  
**三、綜合經濟力の擴充運用** 急迫せる國際情勢の近情に鑑み重要國防資源の自給自足を實現するが爲め、生産力擴充計畫の實行を促進すると共に、新情勢に應ずる貿易制度を強化整備す、生産力擴充計畫その他經濟諸部門に互り、速に日滿支を通ずる綜合計畫を確立し、之が圓滑なる運用を期す。  
**四、國家總動員體制の整備強化** 國家總動員體制の整備強化、或中總動員指揮體系の確立、物資動員の整備、物價統制の徹底、勞務の需給調整の速なる實現を期す。  
**五、諸制度の刷新並に運用** 國政の全般に亘り、官民協力の実を擧げ、政府各部の連絡協調を一層緊密ならしめ、敏捷にして統一ある處理を確保するは刻下の急務なるに鑑み、行政機構官吏制度其他各般の制度の刷新並に運用の改善に付適切なる方策を講せんことを期す。

阿部外相樞府に説明  
樞府では十三日午前十時より官中控室に近衛、原正副議長を始め各閣内閣外相、阿部首相は衆議外相として出席、第二次歐洲戰の經過並にこれに纏る各國の諸情勢及び帝國政府がこれに介入せず專ら支那事變の解決に當るべくその方針を決定し中外に宣明したる事情等を詳細に説明、各閣内閣との間に種々意見の交換を行った





# 日ソ停戦協定の反響

## 米ソ依存に龜裂

### 重慶、寢耳に水の驚き

【上海本社特電十六日】ノモンハン戦は従来の行方から見て、重慶及び第三國に對し相當大きな影響を與へてゐることは想像に難くなく、殊に重慶政府は甚大と見られる。さきにも獨ソ不可侵條約成立直後、モスクワにおける東艦、モロトフ會見を重大視して重慶政府は極度に狼狽し直ちにパリ滯在中の孫科をモスクワに派遣してクレムリンの眞意を打診せしむると共に駐支ソ聯大使ナウチキンを通じてソ聯當局の對日妥協の眞意ありや否やを追究した。當時クレムリンは支那に對する物

心兩方面の援助は依然として變更されなからうと密へて重慶政府を安心させ、その後歐洲動亂勃發のため、英佛の對支援助は忽ち期待を裏切られたので重慶政府は疑念をもち、特にソ聯は獨ソ協定によつて西部國境に對する關心を部分的に解除されたため、程度東洋に武力を集中し得るに至つたことは重慶にとつて甚だしく有利なりとし、孫科はますますソ聯依存の態度を濃化しひたすらソ聯國境においてソ聯が日本を牽制するの對支武力工作の低下を懸つてゐるのである。

【ロンドン本社特電十六日】ソ聯の第二爆彈、英在支權益に打撃、六日發、日ソ間に於ける滿蒙國境停戰協定締結の報は十五日のニューヨーク各紙夕刊及び十六日のニューヨーク・タイムス、ニューヨーク・ヘラルド・トリビュン各紙にトップニュースとして取扱はれ、センセーションを喚び起してゐる。一般の論議はこれは支那の將政權及び英國の在支權益に一大

打撃を與へたるやうとしてゐる。ニューヨーク・タイムスは「ソ聯の第二爆彈」と題して、共産主義ロシアを新しい平和戰線におけるナチスドイツの精神のパートナーとなせる驚くべき方向轉換の後モスクワと東京が接近したことは驚くに當らないヒットラー總統の獨斷獨行を一政府に許すことの出来るソ聯政府は同様にして日本との二、三年に亘るゲリラ戰爭を完全な諒解への友誼的序曲と思惟し得るのである。

【ロンドン本社特電十六日】日ソ停戦協定の成立に關し、ロンドンでは左の如き意見が行はれてゐる。今後更に日ソ間に不可侵協定が成立したとしても重慶品を含むソ聯間の取引は變更されることはないであらう、停戦協定は單に日ソ間の戰闘行爲を停止する意味に止まり、これによつてソ聯の合法的な對華通商は影響を受けないのである。なほ當地支那關係者は次のやうな意見を示してゐる。支那がこれまで日本に抵抗して來たことは日本のソ聯に對する進出を阻んで來たのであるからソ聯としても今後なほ重慶政府を支援するであらう。

【ロンドン本社特電十六日】日ソ停戦協定は羅馬では好感をもつて迎へられ、十六日の各紙は何れも大きくこれを報道してゐる。政界方面では右停戦により日本の對支作戦は斷る有利となり、歐洲戰爭不介入の理前をとる日本は各國とは無關係に獨自の立場で自由なかつ種々な作戦を行ひ得るだらうとしてゐる。また政府の見解ではこの日ソ間の停戦は歐洲當局にも微妙な影響を生ずるだらうと懸念してゐる。

【ロンドン本社特電十六日】日ソ停戦協定の成立に關し、ロンドンでは左の如き意見が行はれてゐる。今後更に日ソ間に不可侵協定が成立したとしても重慶品を含むソ聯間の取引は變更されることはないであらう、停戦協定は單に日ソ間の戰闘行爲を停止する意味に止まり、これによつてソ聯の合法的な對華通商は影響を受けないのである。なほ當地支那關係者は次のやうな意見を示してゐる。支那がこれまで日本に抵抗して來たことは日本のソ聯に對する進出を阻んで來たのであるからソ聯としても今後なほ重慶政府を支援するであらう。

【ロンドン本社特電十六日】日ソ停戦協定の成立に關し、ロンドンでは左の如き意見が行はれてゐる。今後更に日ソ間に不可侵協定が成立したとしても重慶品を含むソ聯間の取引は變更されることはないであらう、停戦協定は單に日ソ間の戰闘行爲を停止する意味に止まり、これによつてソ聯の合法的な對華通商は影響を受けないのである。なほ當地支那關係者は次のやうな意見を示してゐる。支那がこれまで日本に抵抗して來たことは日本のソ聯に對する進出を阻んで來たのであるからソ聯としても今後なほ重慶政府を支援するであらう。

【ロンドン本社特電十六日】日ソ停戦協定の成立に關し、ロンドンでは左の如き意見が行はれてゐる。今後更に日ソ間に不可侵協定が成立したとしても重慶品を含むソ聯間の取引は變更されることはないであらう、停戦協定は單に日ソ間の戰闘行爲を停止する意味に止まり、これによつてソ聯の合法的な對華通商は影響を受けないのである。なほ當地支那關係者は次のやうな意見を示してゐる。支那がこれまで日本に抵抗して來たことは日本のソ聯に對する進出を阻んで來たのであるからソ聯としても今後なほ重慶政府を支援するであらう。

【ロンドン本社特電十六日】日ソ停戦協定の成立に關し、ロンドンでは左の如き意見が行はれてゐる。今後更に日ソ間に不可侵協定が成立したとしても重慶品を含むソ聯間の取引は變更されることはないであらう、停戦協定は單に日ソ間の戰闘行爲を停止する意味に止まり、これによつてソ聯の合法的な對華通商は影響を受けないのである。なほ當地支那關係者は次のやうな意見を示してゐる。支那がこれまで日本に抵抗して來たことは日本のソ聯に對する進出を阻んで來たのであるからソ聯としても今後なほ重慶政府を支援するであらう。

【ロンドン本社特電十六日】日ソ停戦協定の成立に關し、ロンドンでは左の如き意見が行はれてゐる。今後更に日ソ間に不可侵協定が成立したとしても重慶品を含むソ聯間の取引は變更されることはないであらう、停戦協定は單に日ソ間の戰闘行爲を停止する意味に止まり、これによつてソ聯の合法的な對華通商は影響を受けないのである。なほ當地支那關係者は次のやうな意見を示してゐる。支那がこれまで日本に抵抗して來たことは日本のソ聯に對する進出を阻んで來たのであるからソ聯としても今後なほ重慶政府を支援するであらう。

○ソ聯が日本と停戦協定を結ぶと、其の大軍をポーランドに進めようとする。ソ聯は、日本に代り、白雲とウクライナを救済する。その結果、東洋の秩序は、中東の秩序、改め、世界の秩序は、蹂躪され、北極の氷、南極の氷、最

米と石油の思ひもあふぬかきも、世界は利を  
争ふのみならず、大義も併進すべしと云ふを得るべし  
か  
（九月十九日）

# ソ軍果然波領に進入

## 邀撃の波軍と激戦

### 波既に潰滅條約解消

【モスクワ本社特電十七日森特派員發】先般米大規模な動員を行ひその行動を注視されてきたソ聯では十七日午前六時（日本時間十七日午後一時）を期しポーランド領に進入を開始した。この赤軍のポーランド進入の目的は白ロシア人、ウクライナ人の救済のためであるといわれている。

【ベルリン本社特電十七日發】ドイツ政府はソ聯軍が十七日午前六時を期しポーランド領に進入する旨を通告し、右はドイツと完全なる諒解のもとに行はれた。軍付加へた。なほDNBのモスクワ特電はソ聯のポーランド大使クルジボウスキー氏に手交せる對波通牒内容として次の如く傳へてゐる。ソ聯は北はポロツクより南はカメネツポドリスクに至る全國境より進軍するが右行動の目的はソ聯自身の利益および白ロシアおよびウクライナ人の救済を保障するにあり、ソ聯はポーランド内に進軍するも刻下の戦争には中立を維持するものである。ポーランド國はすでに現存せるものと認め得ない故にソ聯はソ波間の諸條約は解消したものと認める。

【モスクワ本社特電十七日發】モロトフソ聯外相は十七日朝報のラヂオ放送を行った。要旨次の通り。ポーランド内白露及びウクライナの同胞に援助の手を差し伸べることはわれらの義務でなければならぬ、ソ聯政府はポーランド國民をその無能な支配下から解放しその悲境から救ひ出すことを希望する。この二週間來の事態はポーランドが國家として全く破産してしまつてゐることを實證した。ポーランドはこの産業中心地のすべてを失ひワルソーは最早ポーランドの首都ではなくなつた。今や何人もポーランドの存在を知るよしもなくなつた。かゝる状態に對しソ聯は國防上斷じて妥協たり得ない。ソ聯は最後まで中立を守つてゐたが事態が斯くなる以上最早中立を守ることが出来ない、われらはウクライナ人と白露人の運命のために中立たることは出来ないからである。これゆゑ政府は軍最高司令部に對しわが赤軍をして國境を越えて西部ウクライナ人及び西部白露人の生命財産を保護せしめるやう命令を發した。わが忠良なる赤軍兵士諸君はあくまでこの民族解放の崇高な闘争のために戦へ。

# 江南奉新の敵を

## 大包圍殲滅戦

### 高安付近の

【奉新前線本社特電十七日今宮、松本兩特派員發】奉新南方の敵を追撃中の各部隊は十七日夜敵が難攻不落を認る〇〇の敵陣に肉薄し池田部隊は奉新西南約四十八キロの〇〇、〇〇、長崎部隊は奉新西南約十二キロの〇〇、竹内部隊は高安付近〇〇の各地點を再躍突破兩擧げ逐次包圍陣を縮小、一大殲滅戦を展開しつゝあり。

【ロンドン本社特電十七日發】モロトフソ聯外相は十七日朝報のラヂオ放送を行った。要旨次の通り。ポーランド内白露及びウクライナの同胞に援助の手を差し伸べることはわれらの義務でなければならぬ、ソ聯政府はポーランド國民をその無能な支配下から解放しその悲境から救ひ出すことを希望する。この二週間來の事態はポーランドが國家として全く破産してしまつてゐることを實證した。ポーランドはこの産業中心地のすべてを失ひワルソーは最早ポーランドの首都ではなくなつた。今や何人もポーランドの存在を知るよしもなくなつた。かゝる状態に對しソ聯は國防上斷じて妥協たり得ない。ソ聯は最後まで中立を守つてゐたが事態が斯くなる以上最早中立を守ることが出来ない、われらはウクライナ人と白露人の運命のために中立たることは出来ないからである。これゆゑ政府は軍最高司令部に對しわが赤軍をして國境を越えて西部ウクライナ人及び西部白露人の生命財産を保護せしめるやう命令を發した。わが忠良なる赤軍兵士諸君はあくまでこの民族解放の崇高な闘争のために戦へ。

米とすし海軍の思ひもあふぬ観かき。世界は利権  
争いの如き大戦も俟たずしてはじきと得るべしとあり  
か  
（九月十九日）

# ソ軍果然波領に進入 邀撃の波軍と激戦

## 波既に潰滅 條約解消

【モスクワ本社特電十七日森特派員發】先般大規模な動員を行ひその行跡を注視されてきたソ聯では十七日午前六時（日本時間十七日午後一時）を期しポーランド領に進入を開始した。この赤軍のポーランド進入の目的は白ロシア人、ウクライナ人の救済のためであるといわれている。

【ベルリン本社特電十七日發】ドイツ官報はソ聯軍が十七日午前六時を期しポーランド領に進入する旨を報じた。右はドイツと完全なる諒解のもとに行はれた。言付加へた、なほDNBのモスクワ特電はソ聯の駐ソポーランド大使クルジボウスキー氏に手交せる波領通過内容として次の如く傳へてゐる。

ソ聯は北はポロツクより南はカメネツポドリスクに至る全國境より進軍するが右行跡の目的はソ聯自身の利益および白ロシアおよびウクライナ民族を保護するにあり、ソ聯はポーランド内に進軍するも刻下の戦争には中立を維持するものである。ポーランド國はすでに現存せるものと認め得ない故にソ聯はソ波間の諸條約は解消したものと認める。

【モスクワ本社特電十七日發】ポーランド領から得た情報によれば、波領境のミンスク、ウイリナ、グロドノの各領地、モトテツ、イ付近に於いて進入し來つたソ聯軍に對し波國境警備兵は抵抗激戦を繰りかへしてゐる。

【パリ本社特電十七日發】ソ聯軍のポーランド入りは二週間余りの準備の後先づミンスクに主力を集中、ブリベット、沼澤地帯の北に連なる本廠から國境を越えて行はれたもので、國境では何等の抵抗も遭はなかつたがウイリノにあつたポーランド軍は東進してソ聯軍を激撃したものと報せられる。

【ロンドン本社特電十七日發】モロトフソ聯外相は十七日朝最初のラヂオ演説を行つた。要旨次の通り。

ポーランド内白露及びウクライナの同胞に援助の手を差し伸べることはわれらの義務でなければならぬ、ソ聯政府はポーランド國民をその無能暴虐な支配下から解放しその悲境から救ひ出すことを希望する、この二週間來の事柄はポーランドが國家として全く破産してしまつてゐることを實証した、ポーランドはこの産業中心地のすべてを失ひワルソーは最早ポーランドの首

# 戦局全面に模様替

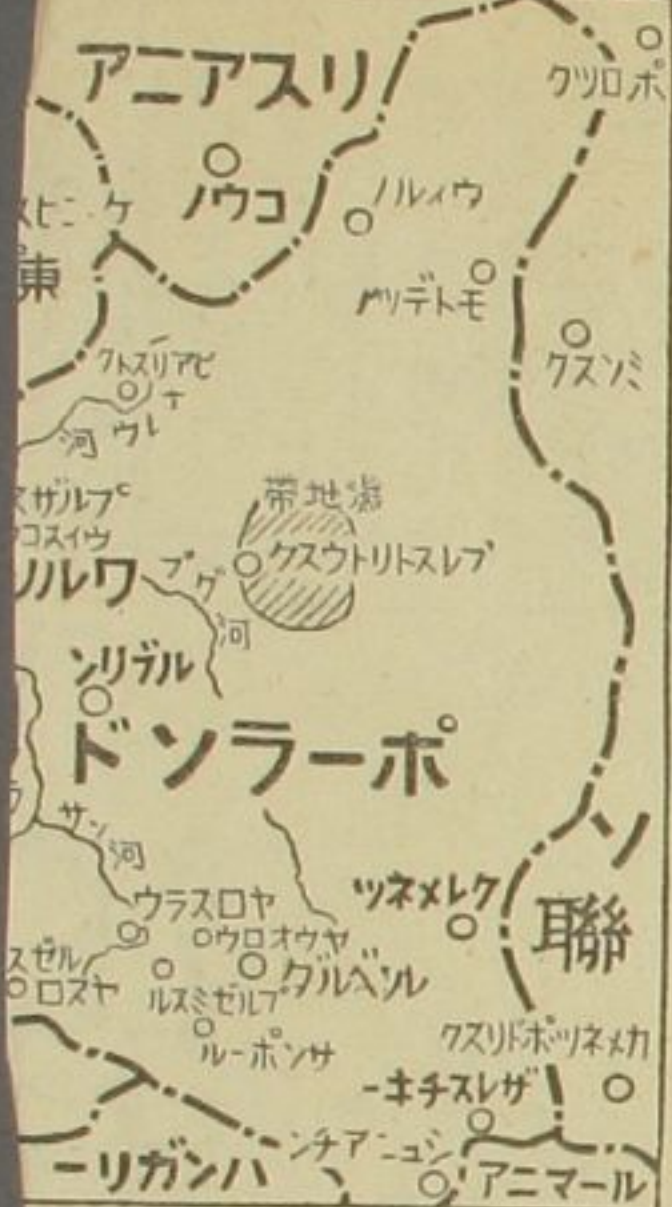
## 大ウクライナへ發足か

【ロンドン本社特電十七日UP歐洲總監發】ウエツフ・ミラー發】突然ソ聯が大軍を動かして東歐洲の舞台へ登場したとの報道にめざまし十七日朝の西歐洲は、この衝撃によつて一段と不安を深くし逆路し難い今後の展開に對して騒ぐ、決断を強ひられる形勢となつた、地球地表の六分の一を占め現役兵員四百萬、警備兵員數百萬、莫大な資源を擁するソ聯が容赦したことは戦局を全面にわたつて模様がへし情勢の見通しを根柢から覆へす未知數をなげこんで來た。

【モスクワ本社特電十七日發】ソ聯軍は十七日午前六時を期しポーランド領に進入する旨を報じた。右はドイツと完全なる諒解のもとに行はれた。言付加へた、なほDNBのモスクワ特電はソ聯の駐ソポーランド大使クルジボウスキー氏に手交せる波領通過内容として次の如く傳へてゐる。

【ロンドン本社特電十七日UP歐洲總監發】ウエツフ・ミラー發】突然ソ聯が大軍を動かして東歐洲の舞台へ登場したとの報道にめざまし十七日朝の西歐洲は、この衝撃によつて一段と不安を深くし逆路し難い今後の展開に對して騒ぐ、決断を強ひられる形勢となつた、地球地表の六分の一を占め現役兵員四百萬、警備兵員數百萬、莫大な資源を擁するソ聯が容赦したことは戦局を全面にわたつて模様がへし情勢の見通しを根柢から覆へす未知數をなげこんで來た。

【モスクワ本社特電十七日發】ソ聯軍は十七日午前六時を期しポーランド領に進入する旨を報じた。右はドイツと完全なる諒解のもとに行はれた。言付加へた、なほDNBのモスクワ特電はソ聯の駐ソポーランド大使クルジボウスキー氏に手交せる波領通過内容として次の如く傳へてゐる。



【モスクワ本社特電十七日森特派員發】激戦に追はれて今や波領の直前にあるポーランド軍に對するソ聯赤軍の行動は極めて容易に進捗すべくポーランド領白露及びウクライナをその支配下に入れんとするソ聯の大ウクライナ、大白露主義はこゝに波領の第一歩を踏み出したものと見られる。

○波刺河ワの一敵をかくて益々衰窮、投降の爲め波  
軍使を派せんとす、波刺河を去りして西保に刺庵漢海  
をも免れ、寄る末細工の國のまぬ悔をへき、  
ソの進出の英回、脅威を以て赤支那を顧み、この取  
しと保、ソの願、河梅、日本、援助を以て、親善、但し此の  
状態を視て、米國の爲に、法、英、意、海軍力を増し、英  
伊に代つて、東方の者大にせん、

英艦隊、この船の、米雷、艦隊を撃沈せしむ、今又、英の  
母艦、撃沈せしむ、法王、王他、左、右、也、  
ソが、日本、と對し、手を引く、の、ソが、英國、脅威、を以て、この  
が、英、支那、と手を引かせる、ハ、ソ、と、協、力の、む、蔣、政、格、の、窮、蹙、  
ハ、非、常、な、う、り、此、時、の、方、の、は、北、地、銀、の、起、つ、に、依、り、西、南、の、兵、

漢京

府と手を握り、和す、遠近、と、又、蔣、の、窮、状、想、ふ、べし  
伊の、懸、念、ハ、今、尚、は、依然、な、り、中、立、國、の、或、り、敵、の、進、つ、る、を、  
謀、測、さ、し、と、す、ま、や、一、回、の、世、界、戦、い、失、地、し、る、の、地、の  
船、隊、に、回、復、せ、ん、と、す、こ、の、二、三、と、上、す、と、す、敵、軍、援、大、に、つ  
ん、と、終、仲、の、益、に、加、へ、ん、と、す、

(九月十九日附記)

○獨り、は、波、の、今、割、と、聞、く、と、一、條、の、事、を、左、の、如、く、と、す、  
ある、今、割、の、後、者、も、波、を、再、建、せ、ん、と、す、る、に、在、り、と、す、  
ソ、間、に、在、る、も、後、衛、地、帯、を、作、ら、ん、と、す、る、に、在、り、と、す、  
援助、の、何、等、根、據、の、事、に、ハ、此、の、如、く、と、す、  
ハ、最、早、に、在、り、と、す、る、勝、手、と、す、  
ハ、最、早、に、在、り、と、す、る、勝、手、と、す、  
ハ、最、早、に、在、り、と、す、る、勝、手、と、す、  
ハ、最、早、に、在、り、と、す、る、勝、手、と、す、



【ベルリン本社特電十八日發至急報】獨ソ兩軍は十八日ブレストリトウスクにおいて相會し友好裡に交驩、握手をとけた、獨ソ兩國の間にはポーランド分割に關する六項目につき意見一致した

# 英佛波條約既に解消 國內民族再調整を期す

項事解諒

【ベルリン本社特電十八日發】十八日のドイツ新報はポーランド問題に關する獨ソ間に一致した協定として次の六點を擧げてゐる。(一)ポーランドはその成立當初より國家として當然持つべき存在の條件を具備しなかつたものと思惟する。(二)ポーランドは自らの無能力によつて崩壊した、それゆゑに獨ソ兩國はこれに即断する手段をとつたものである。(三)國民協同體を建設するとよつてポーランド内各民族を再調整しなければならぬ。(四)獨ソ兩國の平和と秩序を保障すべきポーランド内各民族間に新しい和協の途を開かねばならぬ。(五)英佛の對波援助宣言は何等根據なきものなることが實證された、従つて英佛波三國間の同盟なるものは最早存在せず。(六)英佛兩國は今如何なる目的をもつてドイツと戦ひつゝあるかといふ問題に連卷してゐる。  
【モスクワ本社特電十八日發】モスクワでは十八日獨ソ兩國共同コミュニケとして次の如く報道した。獨ソ兩軍の行動は獨ソ不可變條約の精神ならびにその條文に違反するものではない、われらの目的は秩序あるポーランド國の再建にあり、獨ソ兩國間に介在する緩衝國を作らうとするにある。』

獨ソは之れんとす波を前々置き既に分割を内閣も決る其の要領  
方々あり

## 波蘭分割に就き 諒解の八項目

ニューヨーク十八日發同前 十九日ニューヨークに達したA.P.ベルリン電がドイツ政府消息の情勢として傳へるところに依れば、獨ソ兩國間には左の八項目の完全な諒解が成立してゐる。

ポーランド 國家は最早存在せず△從て獨ソ兩國はその自然的歸結に責任を取る△前ポーランド政府施政下の少數民族の地位は各民族の民族的發展の線に沿つて改訂する獨ソ兩國のみが單獨で新秩序建設義務を負ふ  
ポーランド は從來共に獨ソ兩國の自然的勢力圏であり、獨ソ兩國のみがポーランド國領土の再建に關心を有する△英佛兩國對波援助は意義を失つた△英佛兩國は復讐河故對獨戰爭を遂行するもの難問題に直面する△獨ソ兩國はポーランドに對し獨ソ間の緩衝地帯として小領土の維持を許すかも知れない

波の進退あるは後故力なり要し時六、元行核協議新案  
マニヤ入る、四條の中心も、多し戦亂に捲きこまらん  
とを思ふも進退あるを拒絶し、独は彼等の情を以て  
その外せん  
何の形勢に起るも漸やく英進んとも傾向あり  
り、その北は波蘭的デマを感する、一視に依り難し  
獨のワルソー市をラシエと改むる悲痛の叫びを  
あゝ、わゝ、英佛の何なる未償の犠牲も  
其の志きく、露波の、其の欲する所も如く、其の  
伴の迷惑もや

英佛の支が、日本に對し、志固く、保衛し、抱合を其甚し  
供給せし、鐵道、金と香餌、と、森の、其の、其の

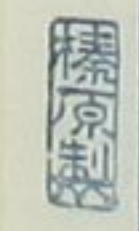
モノハシの偉敵協定を日ソの多量現地、南嶺、後田、沼、近、と  
常の文致の比、人々、味々の都、又、也、也、

寺内大将、獨り相、振、り、ん、を、相、親、也、と、言、い、親、我、等、と、初、め、じ、と、う、と、言、  
見、す、と

彼の敵、九、萬、二十、萬、捕、虜、十、萬、と、相、報、す、  
獨、り、帝、の、好、親、死、英、の、前、帝、陸、軍、少、將、格、と、英、親、す、と

昭和四年九月廿一日記

二十五年前の世界の大戰は、獨、の、軍、國、主義、を、世、界、の、平、和、を、破、つ、た、と、  
一、と、聯、合、軍、の、敵、つ、た、と、言、ふ、獨、が、破、ん、だ、ウ、井、ル、サ、イ、三、體、制、の、一、向、平、和、の  
條、約、と、言、ふ、再、ハ、大、戰、と、言、つ、た、ら、今、日、獨、が、破、つ、た、英、佛、の、  
二、後、の、約、束、が、多、い、該、國、を、あ、つ、て、二、前、回、に、變、つ、た、何、ん、と、信、じ、ま、ら、ぬ、  
と、言、ふ、一、つ、英、佛、の、條、約、と、言、ふ、獨、が、破、つ、た、と、言、ふ、獨、が、破、つ、た、と、言、ふ、獨、が、破、つ、た、



二、後、の、條、約、の、英、佛、の、條、約、の、名、義、に、ん、と、大、戰、を、告、げ、せ、ん、と、す、か、  
一、と、言、ふ、一、つ、獨、の、破、壞、行、動、に、あ、つ、た、と、

ソ、獨、が、支、那、を、一、度、と、獨、し、日、本、と、偉、敵、と、協、定、し、た、ら、獨、の  
勳、章、を、納、ん、だ、ら、う、と、言、ふ、獨、の、日、ソ、と、協、定、を、英、の  
と、し、ま、さ、し、ま、す、且、一、と、言、ふ、今、後、の、獨、の、破、つ、た、と、

(同上記)

今、世、界、戰、争、に、對、し、英、獨、何、ん、と、存、在、か、獨、の、  
吾、ん、の、口、唇、を、閉、じ、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、  
是、も、他、の、敵、に、對、し、と、言、ふ、故、に、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、  
所、に、一、つ、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、  
其、の、一、つ、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、  
觀、か、あ、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、言、ふ、獨、の、破、つ、た、と、



ドイツ人無くロシア人なき眞の  
ポーランドは再建されるであら  
うがヴェルサイユ條約によつて  
造られたポーランドはもう出来  
上らない。民主主義の強硬派  
や指導者達は勝手な議論をする  
のは自由だが國民は眞にその利  
益を考へさせられるに至つてゐ  
るといふのは事實だ。特に越え  
得ざる防壁を挟んで砲火の洗滌  
を受けながら第一線で對峙を續  
ける國民の間ではこの事實を反  
省する事が一層切實な問題であ  
らう。

又援助をせよといふ人々も、  
元金押かあへば交戦中も兵士も  
こゝも自由である。切くさへ米  
得る。我らも我らも中主の怒り  
と、不可解の中立法を要する。中  
から来ル一程も恩儀を修正する。  
思はれとこのこと、米國の輿論

あること、米國の輿論は社説を左の如く評してゐる。

ルーズヴェルト大統領が議會に  
提示した中立法改正案の骨子は、  
現行中立法から「交戦國に對す  
る武器輸出禁止事項」を削除し、  
それに代るものとして「現金・自  
國船」主義を適用しようとするも  
のである。すなはち大統領が議會  
に對して要求した諸條件の中、  
(一)戰時區域を指定し米國船のこ  
れに入ることを禁ず、(二)交戦國  
は米國から物資を購入する場合、  
米國はその積出しに先立つて、そ  
の物資に對する權利を獲得するこ  
と、(三)交戦國に對する戰時クレ  
ヂット限額の禁止等は、これを要  
約すれば、交戦國が米國より物資  
を購入する場合、支拂ひは現金を  
もつてし、購入した物資は自國船  
にて輸送すべきことを規定したも  
のである。

を保護し得る強大な海軍力を必要  
とするのである。これを英佛とト  
イツの場合に當てれば、その  
何れが「現金・自國船主義」に違  
て、米國より軍需品を購入し得る  
かは問はずして明らかだといへる  
のである。ルーズヴェルトといへる  
はその教書において、「われわれ  
の立法はこの戰爭から、米國を引  
き離しておくといふ、單一にして  
強固な意見によつて指理されねば  
ならぬ」と述べてゐる。これは確  
に米國民の多數意見を代表したも  
のであらうが、同時に、去る五月  
一日を以て満期となつた「現金・  
自國船」主義を、事實上、復活す  
るとによつて、米國の中立を維持  
しつゝ、可及的に英佛側を援助せ  
んとすること、また、明らかに米  
國民の感情を如實に代表したもの  
といふことが出来る。ルーズヴ  
ェルト大統領は正面からドイツを  
非難してはゐないが、「今日われ  
われが直面する任務は、文明を存

護せしむるに必要な西洋の牙城を  
保全することに裨益するにある」  
と力説してゐるのは、ルーズヴ  
ェルト大統領の對歐政策を説明して余  
りあるといへる。問題は、「現金・  
自國船」主義による英佛援助が、  
結局、米國をして歐洲戰爭に参加  
させる動機となるといふ孤立派の  
勢力が、大統領の要請を果してど  
の程度まで阻止し得るやの點に  
ある。

現金取り買主の般  
心運搬此二條件こそ  
中立法の主旨を終止  
此二條件を可と取  
りては、英佛の援助  
は、英佛援助とすとの心ある、英佛  
の心ある心金を与するから次の切り  
ぬきとせよ (九月廿三日の記)

# 對日差別的措置に

## 警戒の必要あり

### 日米關係調整重視さる

#### 米中國立法 場登の正修

米國中立法改  
正問題を目的  
に召集された  
臨時議會にお  
いてルーズヴ  
ェルト大統領  
は本年春の議  
會において否定された一現金自國  
船主義をとる限り現行中立法の武  
器輸出禁止令を撤止し如何なる物  
をも交戦國に輸出し得ることを  
骨子とする改正を主張したが、わ  
が各方面の輿論では歐戰期間勃發  
前の春の議會當時と異なり勃發後

の現在においては米國民に英佛支  
援の主張が多くギャラップ輿論研  
究所調査では支援論が八割を超え  
る情勢であるため、曲折はあるに  
せよ結局今回はこの中立法修正が  
成立する可能性多しとしてゐる  
しかしてこの修正が實現すれば  
理論上交戦國双方にとつて公平  
なりとしても實際上は制海權が  
英佛側に握られてゐること及び  
金準備が英佛側はドイツに比し  
遙に

ある、たゞ現金購入に限られて  
現行法で許されてゐる通商上の  
商業クレジットを禁止されるこ  
とはジョンソン法（賠償不拂國  
政府に對する新規貸付の禁止）  
の撤廢をまで希望してゐる英  
佛にとつては打撃ともいひ得へ  
く、前大戦當時の如く米國より  
クレジット及び賠償により短期  
間に大量買付を行ふことは困難  
となるが、英佛は五十一億ドル  
の金準備を有し、その他爲替平  
衡資金として十二億五千萬ドル  
在米投資四十五億ドル、金年産  
九億ドルを有するので戦争が非  
常に長期に亘らぬ限り米國より  
買付を賄ひ得べく、米國對英  
佛の貿易膨脹、即ち米國製武器  
及び戰時資材の英佛向け大量輸

出と、英佛より米國への金の大  
量流入が新たな歐米經濟の局面  
を展開し、爲替問題としてボン  
ド、フラン及び南小民主主義國  
通貨の減價も起り、三國通貨協  
定によりその支持も行はれると  
豫想される  
かくの如く中立法修正は英佛支  
援を目的とするもので、日本を目標  
とするものではなく、假に日本及  
び支那を交戦國と見てこれを適用  
するときは制海權を持つ日本は英  
佛と同一立場に立ち、支那はドイ  
ツと同様となり、日本にとつて有  
利となるので、これが支那事變に

ついて適用されることは米國の立  
場よりみて全く不可能であつてそ  
の限りに對して中立法修正による  
直接の影響は日本にはな  
く、戰時資材の歐英佛供給による  
量の減少と價格の騰貴が日本の買  
付を多少困難にすることが考へら  
れるのみである、萬一米國が中立  
法修正によつて英佛支援を行ふ一  
方、この空気に感情的に躍り立  
られて種々の對英佛援助を行ふと假  
定すればその場合には修正中立  
法とは關係なく別の行政的措置に  
よつて日本に對する差別的輸出禁  
止を行ふことが唯一の方法と考へ  
られ、殊に來年一月廿五日以後の  
日米通商條約有効期間満了後はこ  
れに對して條約違反の抗議を發し  
得ないこととなるので、この問題  
は甚だ重大のチャレンジであつ  
て、中立法修正問題とは全く別個  
の問題として米國の日本に對する  
差別的懲罰を警戒する必要あると  
ともにかかる問題の起らないやう  
日米關係の調整が望まれてゐる

藤原製

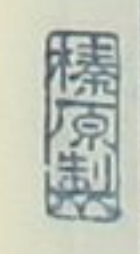
○波、大佐使領館の政府要人、通商手続の促進、改定を

肯んとも今高裁つてゐる條に決し稻ソの間に波の分  
割せんぬ、其の對り地後的、ソの取合が稻ソも大きい、稻ソ工業  
地帯も取合、ソは着意地帯を以て取合、その世界は  
之の中心、稻の産大、その為るべきの目をもとめ、その中心  
稻への對り、ソの期も所ある、その中心、ソは中立である  
その大軍を動かして、その對りを得、其の中心、その中心、  
いとす、その對り、その中心、その中心、その中心、その中心、  
作の開闢を望む、その中心、その中心、その中心、その中心、  
度、その中心、その中心、その中心、その中心、その中心、  
英の對り、その中心、その中心、その中心、その中心、その中心、  
の果して、その中心、その中心、その中心、その中心、その中心、



五人の今中ノ官にありし勲あるは北平の時に負けんが  
ぬ。いかに互に白状したりありしが、そこよりあがりかえりてナチ  
スにヒットラー教に熱中して政海の大入り首目であるの、ヒッ  
トラーが他國の土地をナチに又せよいか、自然首目であるの、  
も亦然いどもらの波を教にヒットラーが英佛に敵りしと信じ  
たりいも、又誤りたありた。  
(九月廿四日記)

○樞は終に軍事の事と任ぜられた。いかに樞は初めから約せし  
たことあり、唯は波蘭を樞が征し、ソ連に中支の地位  
を占つて、樞と共仰れば、波が樞の側をめぐり、ソ連に中支  
の地位を脱した。樞が波をソ連との間を分割し、を決する。意  
外は又ちる合け前とソ連を許したの、軍事の事か前進である  
か、の事とあり、今とちるに、樞は出まふソ連と伊太利の



間使めんと見え、中樞は地中海の西部を、伊太利と協力し  
てあり、いかに、伊太利は英佛にさへさへ、重慶を軽くし  
て、いかに、おのづから、樞の作の作を成さむあり。樞は  
内支ソ連を、と東方と手と引うして、日本と其の回を、  
加へんと欲す。いかに、モノハンの停戦も、現いんしあるこ  
とあり。又樞は日蘇樞の口を、長あること。樞は相対ソ連  
トヒツ、我大島大使、及めり、こと、由りて、指し、得る。樞は  
東邦と、中央ア、ヤ、ハ、波斯、<sup>波蘭</sup>、方向と、轉し、せめん、  
こと、下支である。蘇が、新く、方向と、轉す、こと、英、英、  
脅威、ひ、ある、蘇、北、方、略、を、取、つ、た、日、蘇、の、存、在、  
石、油、海、軍、の、制、制、を、件、を、極、め、つ、つ、を、以、つ、つ、を、  
了、つ、つ、の、要、の、請、ひ、あり、樞、の、日、本、を、樞、め、つ、つ、所、大





# 獨逸の新海底陣

## 水素と酸素で動く潜航機能

海における歐洲新戦場の開  
見、一編乙の新潜水艦につい  
てはその威力怖るべしとされ  
てゐるが、その構造及び性能  
についてはこれまで公表され  
てゐらず、その威力の中心點  
については多く知られてゐな  
かつた、ドイツの新潜水艦は  
こゝに最も新しい技術を用  
眼に誇つて、海底を縦横無忌  
にあはれ廻つてゐるのだとい  
ふが、その海軍再建ともに関  
係をもつて革命的な新威力の  
建造に没頭して來つたのである  
が、最近英海軍當局から得た  
情報によると、世界列國にそ  
の比をみないとも言はれる水

上水中同一の機關を以つて推  
進し得べきものを以つて新造  
し、その潜水艦隊を組織し  
てゐるといふ事である

これは列國海軍でも多年研  
究を續け來つたのであつたが  
遂にドイツに凱歌があつた  
とみるべきである、ドイツの  
新式推進機關は水素及び酸素  
によつて作動するもので、小  
排水量を以つて、大なる戦  
艦力を發揮するもので、デー  
ゼル機関の潜航用として電機機  
關を裝備したものであつた、  
デーゼル機関の潜航用をこれ  
使用すれば暫時にして艦内存

在の空氣を悉く消耗し盡す  
ので之が潜航用としては電機  
機關の裝備を必要とした、そ  
してこの兩種機關の使用し來  
たつた最良の缺點は潜航用機  
關の重量が比較的に大であ  
つてその重量は時として潜  
航水量の六分の一に至つたも  
のである

更にこの新電池は何等かの  
原因に由り海水が浸水してそ  
の酸液に屬する事があれば必  
ち有毒な酸素ガスが発生する  
と言ふ危険があつた、ドイツ  
潜水艦はこれ等の危険を一掃  
して第一式機關を裝備してゐ  
るものであり全艦五十四隻中  
三十二隻は殆んど水素及び酸  
素によつて作動される最新機  
關である、これ等の中二十  
隻は排水量僅かに二百五十噸  
であるが水上速度及び行動半  
徑が著しく大であり、その兵  
裝は五〇八噸の魚雷、射撃管と  
機關一門を備へ、その建造期  
間僅かに十一月で完成され  
たといふ驚くべき事實が知ら  
れるに至つた

右の新潜水艦について主要  
なる利點を擧げると  
一、艦隊重要の前線  
二、第一内線機關一基に依つ  
て作動せられる故その構造が  
極めて簡單  
三、推進能率の急増進  
四、非常の際使用し得べき機  
備馬力の各量なる事  
五、單一機關による艦隊縱の  
簡單化  
また何等有毒ガスの発生を考  
慮する新電池なき故に潜入角  
度至つて自由であり、假りに  
艦が海水のために水面に浮び  
上がる事が出来ない場合にも  
バラストの排水に水素ガスを  
利用し得るから艦内貯藏の機  
構空氣を使用して艦に呼吸用  
の空氣を消費する必要がない  
又ガス使用の機關を裝備し  
てゐるから潜航時間も普通の  
潜水艦より遙かに長い、こ  
の結果は艦隊潜航に大きな差  
別を來たし、現にイギリス海  
軍當局ではその作戦に新しい  
スタイルを觀なければならぬ  
だらう

海軍省

を輕み見んことを度感してソ聯の行動又抑へて過の注意を取  
つてゐる。獨逸の對して開戦を宣言する。ソ聯の増強を定し、ソ  
連を敵とする。このことを不利とする。打撃から起る。この結果ソ  
は是を利し、從横に法又の利を逃してゐる。この外交親心  
歐洲の小回の敵への向背が其の決する。この結果が何れかを英  
佛の爲めにも不利である。この言ふまでもない。併し今更なるこ  
とを言ふ。この言ふは、行はれざるを頼みとして獨逸を敗れし。其の  
と前回の軍事行動が異なる。其の條件の海軍に於ては、其の海軍  
の任内打撃を行つて、獨逸に困らざるの態から、此の世界戦の  
利を争ふ。この言ふは、この言ふ。

口は獨逸の獨逸の河の割振へんが、其の言ふは、この言ふは、其の  
る。大位領の國のたりの。其の言ふは、この言ふは、其の言ふは、

使日回を代表して駐在するも、波の存続は此の大戦が終つて  
見届けしは決りきつた。相手が負けんばかりが負けんは其の割拠地  
の回復も及らざる。北前の大戦は二三の口波と曰へ、甲午の  
日清戦争も戦つた後、日露戦争と凱旋した例もあつたから、  
相手が割拠地が戻つて来ると世界の公認を得るが、未だ返  
らぬ回復は多しと連断することが出来ないのがある。

○政治の如く、波は先づ其の波の勢を接して回つたこと、  
不幸である。一波起ると其の波の勢を接して回つたこと、  
せんが、固く中主を持し、路大回の勢を中主を併せ得る。  
強國の如く都合よく一報して中主を破つたことを  
も思つて、たかくなつた所で見ると、併せ得る、何かの  
改定は他回もか合判へん、せんが、回を併せ得るといふ、是を幸

波の勢

とす。波は先づ其の波の勢を接して回つたこと、  
その相手が行動せしむる、彼等の名とす。所は、波の勢を接して回つたこと、  
せんが、固く中主を持し、路大回の勢を中主を併せ得る。  
強國の如く都合よく一報して中主を破つたことを  
も思つて、たかくなつた所で見ると、併せ得る、何かの  
改定は他回もか合判へん、せんが、回を併せ得るといふ、是を幸

○相手が提議し、其の勢を接して回つたこと、  
せんが、固く中主を持し、路大回の勢を中主を併せ得る。  
強國の如く都合よく一報して中主を破つたことを  
も思つて、たかくなつた所で見ると、併せ得る、何かの  
改定は他回もか合判へん、せんが、回を併せ得るといふ、是を幸

もあつた。之れは由りイタリノ冬戰ハ動搖を伴ふ又一策也。英佛  
空軍利と云ふは、こゝに本格的の歐洲大戰を見るべきであらう。伊國  
ハ現に此の提議が行へば、冬戰すも倚くらざるであらう。最  
後の勝利は何なるであらうとも、英國の所望の策ハ此様なるであらう  
屈しを國際會議を開く、武許の面目を正して、和平を以て策  
すべしとある。英仏のある部ハ此箇故の説もあつても云ふが恐  
らく、英の獨り今後の跳梁を恐るゝヒツト、うゝも倒さるゝん  
ハじやうとするてゝゝ、冷靜の心を掩ふよらいつて此  
の力を張るゝある。唯此の威怖と面子が遂に國家を危殆  
に導くのである。英は歐洲に近づくとも、海を跨ぐれば時を  
どある大陸に入ることか、少くとも今後の國を併せ置く  
長策は、未と云ふは、我邦を憂ひ、海を司るを以て本領と



了ること、國と守るの長策であらう。歐洲に入ると其の安危  
を擔ふ如きは、國と守るの策にあらう。歐洲のことは、歐洲  
として為さるゝのみ、歐洲の事情ハ、その世界戦争の如きとい  
ふが、莫も世界の大戰は、後の事を、達観すべきは、此時に在る。十  
月一日記

○武漢ハ戦へ敗れたが、その死一にのみならず、政府ハ改選せんが、四の  
つに政府の是で所望する、伊國の建設せんが、今更の戦多  
終つて、英佛と獨りの勝敗決するまでも、借家信長は、ある、哀れ  
也。

○并政府は、頼る、所なく、今更に窮する、米、部も、神傳と  
哀訴する、その、北時格、軍司令部、南京、軍、  
西軍司令部、在南京、入る、皇軍、湖南、奮發、長沙

蔣政權の泣言  
蔣政權弱餘遂に  
米國の調停希望  
支那外交 際事は最近  
言明を回避す  
日英會談再開  
内閣政綱  
尚日本が 日米條約  
米と英佛 三國の何れ  
再問題化の  
支那外交 際事は最近  
言明を回避す  
日英會談再開  
内閣政綱  
尚日本が 日米條約

蔣政權弱餘遂に  
米國の調停希望  
支那外交 際事は最近  
言明を回避す  
日英會談再開  
内閣政綱  
尚日本が 日米條約

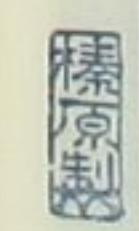
の弱るは且つに通り、汪兆銘亦我々の援助を得て益々強を謀り  
とす、持の運命の最早汪射し滴の憂ももさす。米が今時中  
裁と試みるは徒勞也  
(十月二。記)  
○このトローは波蘭を征しつて英佛と對峙する事を擬する  
へ一と和平を提議し、英佛の改を檢するが起つた、此れは今の  
目的が與つるの以上の戦いの案をとり、そのひらきか、勿論英佛が  
まに能く遂行すべしとの懸念も一さへある、係一柄の此の提議は  
部社の責任を英佛に轉嫁すると共に、對日策もある、此の  
トローはとんと無意味なる多量の失地を回復した、ピットローが四  
内、人比のあつたの、此故である。柄の國民の戦を好まない  
く、以上戦つて就いて、國民のあつた、其情を促す必要がある、  
和平の提議は此れ必要ある、あつて、ピットローの提議をぬき

昭和十一年



暇へると大い改善せんことを切願ひ

○近頃の戦争と外交の果は果もそのことを敢て見るとも  
あつて、いふべきに、戦場の開戦を市もいふことはいふべき  
日支の戦争も其一例である、中支と云つてある。亦中支と云ふは、支  
回、戦も中支の方、戦も公平である。この常規と云つて、その  
と、その果國の中支、如く不公平中支と云ふのが、支支現してゐる。敵回  
と云ふも、擔子として、攻守の境も、枝小如き支那の春秋勦討といふ  
つれづれ、いふべきに、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
してゐる日本、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支と云ふ、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支



してゐる、其の國の支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支

(十月三日記)

○又和手物も主張せん伊也、本願は主支のやうな、  
英の石、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支  
支、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支支の境も、支

十月十日記

# ヒ總統の對英秘札 今戰へば列強共倒れ

## 獨伊首相幹旋に樂觀

【ベルリン本社特電三日 楠山特派員發】ベルリンを訪れたチアノ外相はヒットラー總統やリッペンントロツプ外相に會つて時局對策を協議したが、大體はムツソリーニ首相の考へてある平和方法を傳へヒットラー總統の意向を聞いて更にムツソリーニ首相に相談し直すといふ段取りといはれる、しかし問題は大して詳細な點に關しはゆる戦争か平和かの大討論であつて

(一)ポーランド問題は獨伊間の局地的問題として處すべきである  
(二)西部方面においては全歐ドイツに戦意なし、ゆるにポーランドがなくなつた今日、英佛獨三國間に戰争状態の存在するいはれないといふのが歴史的な情勢であつてポーランドに關しては可なり莫大に取扱ふことをほめ、獨伊兩國間に一種の緩衝地帯的なものを設けて約一千萬の人口

を有するポーランドの獨立を許し、これによつていくらか英佛の額を立てムツソリーニ首相の努力により歐洲平和再來を期さうといふのがヒットラー總統の考へである、しかし英國に對しては海洋帝國としての英國の世界的制覇權を脅かすやうな眞似は全然する意思なしとの保障を與へ

考へ直さうではないかと英國に訴へようとするのである、しかし、これを英國に懸へる方法として、まづ今週中に開かるべき國會議でヒットラー總統が平和の懸賞をする、しかしこれは一方的懸賞であつて英國への通告にはならないから中立國イタリーの手を通じて正式に外交的條件を通すと共にムツソリーニ首相の手紙に頼らうとするのである、ベルリンに關する外交通はこれだけの提唱では英佛が容易に應じないと思つてゐるが、ドイツ側では案外樂觀的な觀測を下してゐるところを見ると或はチアノ外相がローマで英佛兩大使を通じて打診した結果が相當樂觀に値するものがあるとも見られるが、この間において可成り氣脈を通じてゐるのてないかと見られる

日五月十年四

新日京東

【ローマ本社特電三日發】チアノ外相のロンドン離歐後、英佛兩國がヒットラー獨逸の申出による如何なる和平案をも一讀する意向を報告せる情勢に鑑み、和平工作の重荷はあげてムツソリーニ首相の双腕にかゝる要務である、イタリー政府の事情に通ずる方面ではムツソリーニ首相が英佛引入れの好餌として平和會議参加を米國に促す意向があるといふ、この案によると會議には伊、米、獨、ソ、英、佛、土の七ヶ國を集めるのであるがトルコの参加は同國の試案、歐州外交動態が示すが如くムルカンと地中海における同國の地位が重要になつたためである、米國の参加要請は米國が英佛の態度を緩和して和平の達成に最も大なる貢獻をもたらすものと見られるからである

### 波チエコ、軍縮を含む

### 恒久平和以外は拒否

### ジョイジ氏、チエ首相を激勵



氏ジョイジイロ

【ロンドン本社特電三日發】三日の英國下院では各黨首が悉く擧げてチエンパレン首相を全面的に支持したが、第一次大戦當時首相たりしロイドジョージ氏はドイツの和平提案を慎重に研究

すべきことを政府に促し左の如く述べた  
もし英國にしてドイツのポーランド征服を基礎として和平を受諾するやうなことがあれば、英國は全く名譽を失墜するであらう、しかしわれわれはそれどころかもつと廣範圍の和平提案に接するであらう、和平はポーランド、チエコ、植民地等の問題をも含むものである、また軍備縮小について何等かの協定を含ませ

ざる限り如何なる平和も恒久的ではあり得ない、無條件の平和は無用である  
解決 は最も廣範圍にして基礎的なものでなければならぬ、ドイツの提案に接した場合にはチエンパレン首相は宜しく下院にこれを語るべきであり、そのためには秘密會議を行ふこともよいであらう、和平の場合には平和を強かす全ての問題を考慮すべきであるがこれはイタリーの要求をも含んで、次の問題は米國を引入るべきか否かである

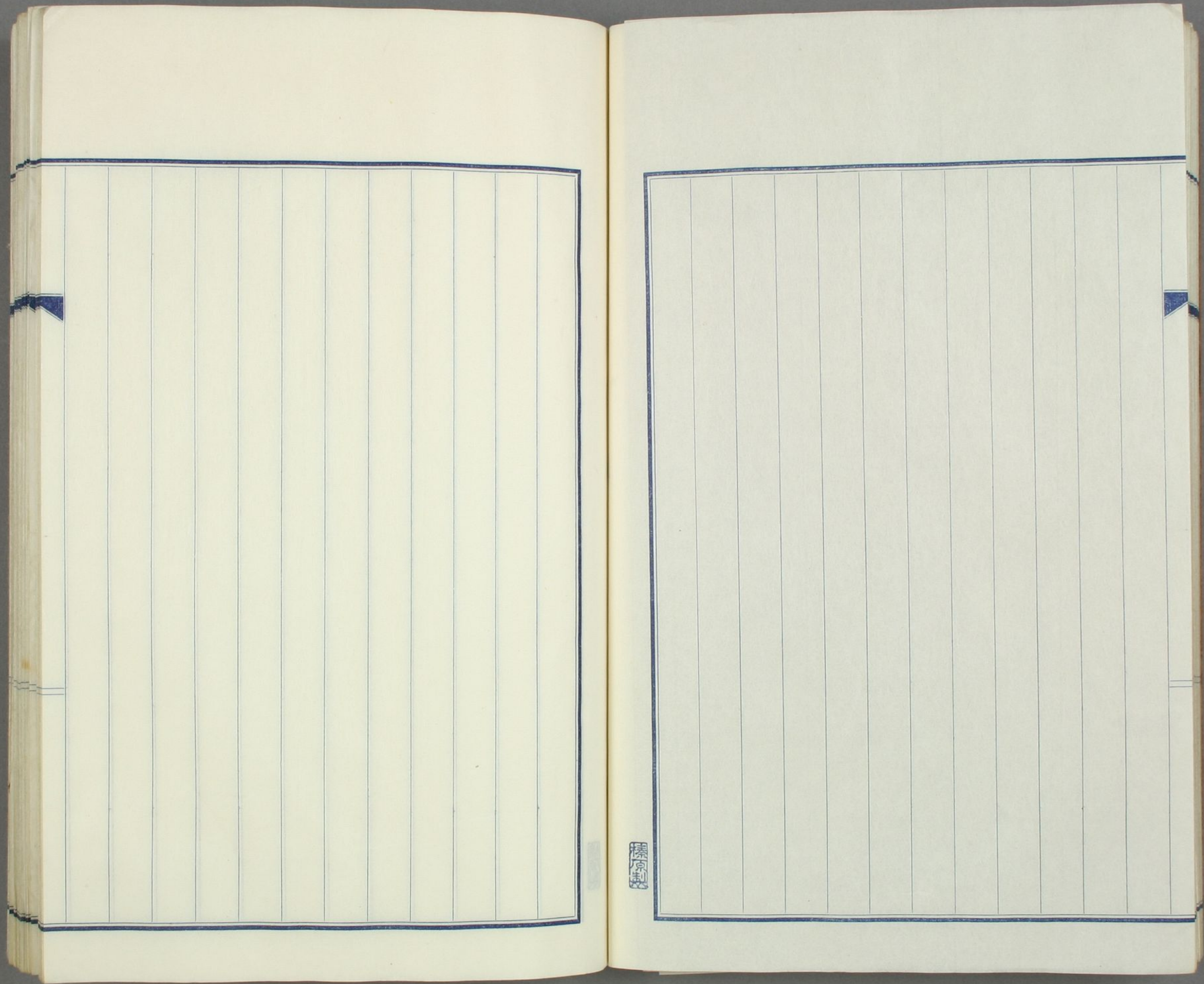
予の判断によるならばソ聯とイタリーのみならず米國をも招聘した上ではなければ和平交渉に入るのには大間違ひである、懸案の成行は米、伊、ソ聯の態度によつて決せられるかも知れない、米國は中立國として最も中立國の限定以内においてわれわれを援助することが出来る、ソ聯及びイタリーもその中立が英國に對して友好的か敵意的か何れかにあることによつて大なる差異を生ずる

○ヒツトラーが何を提唱して及二内...  
留を吹いたも作れ躍々親かあつて、英佛と敢てお手  
るしめず、米國の作戦を欲しき米も起るといふ、敢て一  
向流儀なる。ヒツトラーの言ふ所の飽まむ己んの地歩を占  
定けり、敢て英佛が降服の者、敢て此を提唱するか、えん  
えんといふのも無理なき、いかに保し和戦を決する、敢て此時  
にありて此情を思ふ、えんいやくし、敢て此情を續け、えん  
す、敢て此情を止せしとす、と否との際つて此時あるか、英佛の  
かきヒツトラーを捕ちし、と、冷戦一番、た、雲を拂り、  
ば、えんいやくし、此間、経りの流儀が行んて、英  
本、敢て此情を停戦説か、と、えんいやくし、英  
國民一般にせし、と、此情を呼び起し、と、えんいやくし、



く國境の戦争を起すに、此情を有して、た、えんいやくし、  
後人心と交際するも、無記の、口、た、此情を起し、  
と、冷戦回家の前途を、和戦を、敢て決する、  
ぬと、忠告を吐いた、と、た、激な、敢て決する、  
じ、た、此情を起し、と、た、此情を起し、  
静、た、此情を起し、と、た、此情を起し、  
かう、た、此情を起し、と、た、此情を起し、  
（十月十一日記）





1919

以下  
10丁  
白紙

新白石社、奉納の額



新白石社

三徳町  
 名實の深淵風十五名有は門衛左吉町 第三  
 名實の深淵風十五名有は門衛左吉町 第三  
 名實の深淵風十五名有は門衛左吉町 第三  
 名實の深淵風十五名有は門衛左吉町 第三  
 名實の深淵風十五名有は門衛左吉町 第三

たつたと瓦刀御幣字苗てい描を備にめ扇の首代様三

世界一周大飛行完成祝賀式

時日 到着の翌日午後二時卅分開會

場所 日比谷大音樂堂雨天の場合は東京寶塚劇場

主催 東京市、帝國飛行協會

順序

一、奏樂  
 一、開會の辭  
 帝國飛行協會總務部長

國歌奉唱

宮城遙拜

皇軍武運長久祈願並に陣歿英靈に感謝默禱

一、挨拶  
 東京市長、帝國飛行協會長

一、花束贈呈

一、祝辭

內閣總理 大臣閣下  
 逓信 大臣閣下  
 外務 大臣閣下  
 陸軍 大臣閣下  
 海軍 大臣閣下

一、挨拶

東日・大毎代表

大原親善使節

中尾ニツホ之機長

來賓代表

東京市會議長

東京市局長

一、世界一周機ニツホ之萬歲

一、閉會の辭

一、吹奏樂

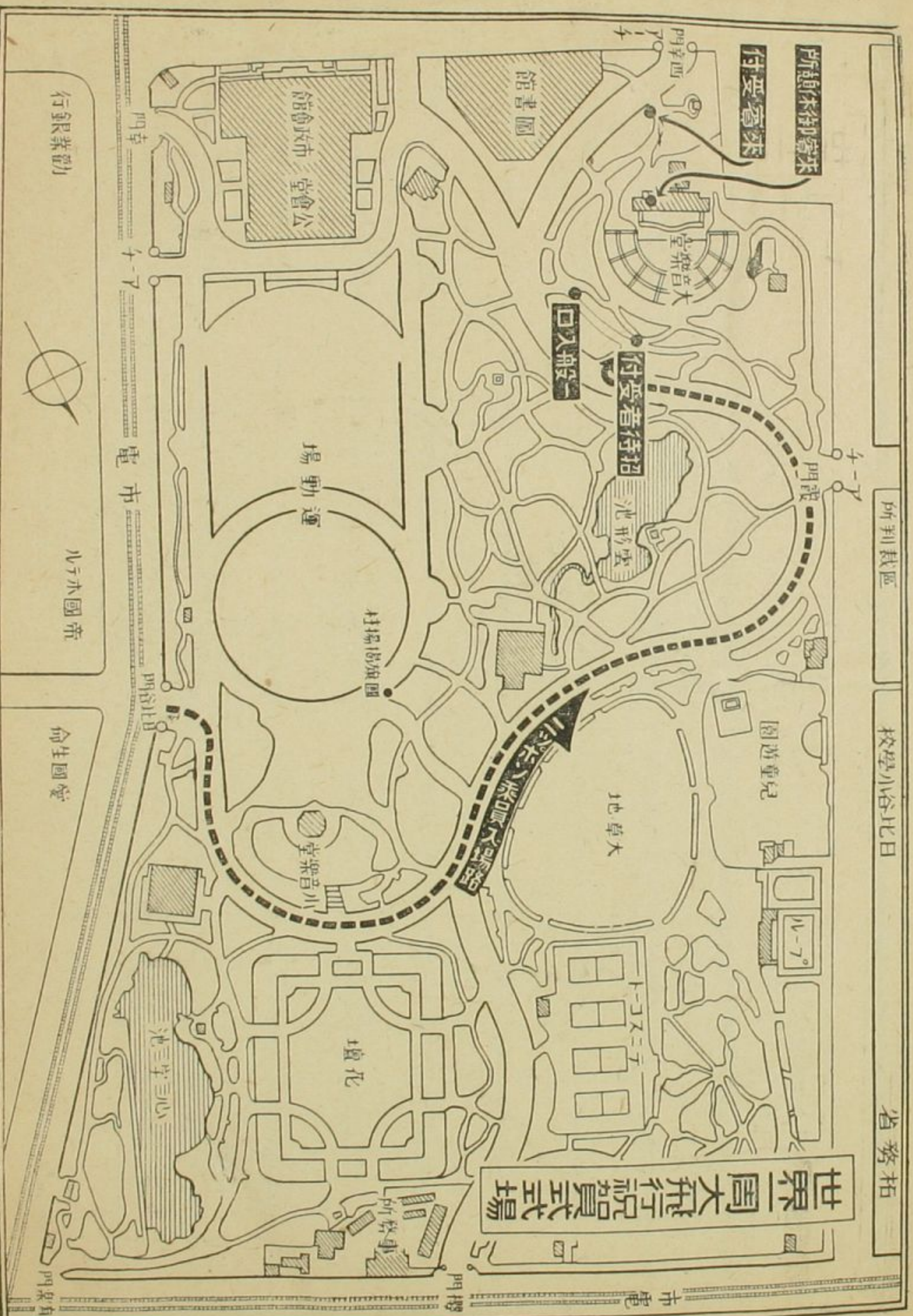
一、舞踊

一、愛國歌合唱

音樂學校生徒

以上所定時間卅分

帝國飛行協會



省務拓

校學小谷北日

所判表區

新館來迎室  
 待受室

世界一周大飛行祝賀式場

新館來迎室  
 待受室  
 東京市議會  
 東京市局長  
 帝國飛行協會  
 日比谷大音樂堂

小宮水國帝

命生國堂

行銀業勸

木堂宰相硯銘

佐藤 凜明

先生は政界の奇傑。その文墨に於けるや、亦曠世の偉人たり。夙に木堂翰墨談一部世に行はれ、博く推賞する所なるも、斯の著の如き、未だ先生文墨風雅の一片鱗に過ぎず。

詩文書畫ともに先生好んで之を試むと雖も、畫は終に能品にだも入らず、况や、神品妙品逸品をや。文は高古にして神韻無盡のもの少からず。詩はその境、文と畫との中間に在り、或は妙に或は凡、書風より謂ふも、詩稿の筆跡は、十中八九、木堂の高處に于てせず、紫微に於てせずして翠微霞微に於てせり。唯だその硯銘五七篇は、高古深大にして樸訥幽玄、何ものも比すべき無き妙趣あるを覺ゆ。

國分青厓、今詩壇の雄、殆ど斯界の聖を以て呼ばれ、群雄の青厓を瞻る侯伯の王者を見るに異ならず。木堂亦青厓の詩格に於て推服措かざるも、木堂の硯銘に至つては、青厓亦如何とも爲す能はざるものあり。

青厓翁の最妙什は、その愛する所の石楠花に於ける詠物にあり。長篇秘幽、字字靈府よりし、句々神氣よりす。木堂硯銘の朴にして雅、雄にして澹、僅々十六字の諷詠に至つては、詩王妍麗の蜀錦も、一步或は二步譲らざるを得ず。その調や迂にして聖、その格や最も質にして至つて眞なり。眞か眞か。木堂の是とする處。

水巖 硯銘  
水巖之精。木翁之寶。  
同持賢貞。與爾俱老。  
往年得硯版。石質甚精。使内海羊石琢。吾常用硯也。

端谿天青硯版銘。雕蓋至寶天成。曷須雕琢。亦似老迂。一生抱璞。  
此硯版、青端尤物。足以誇視銘。小野鍾山囑。硯甚古朴。大德愚如。良玉不琢。百年之交。取乎頑朴。

碧堂天然硯銘  
渾然一塊。其容如愚。嗟文之至。是在茲乎。

端谿天然硯。爲田邊碧堂作  
仙橙硯銘 澄泥硯。山口蕙石子爵藏。介松方仙臺素銘。  
仙家橙予。註以瓊漿。上之筆端。淋漓含香。

四言四句の一詩、硯銘ならずして爲れるものあり。木堂翁かつて黒柿の老根、徑三尺なるものあり。黒質にして堅固、一怪玉の如し、先生之を北川某に與ふ。某之を以て、火鉢を造る、亦

奇寶たり。その來りて銘を覓むるや、則ち先生賦すること次の如し。

頑斯盤根。其堅如石。  
吾交比之。百年不易。

更に一銘あり。山本某の乞ひに依り、端硯に付する所なり。曰く

堅貞成性。溫潤含章。  
宛如吾友。玉質深藏。

百千回、之を讀み之を誦んず。未だ飽かず。愈々親しく益々切なるを覺ゆ。研寶の偉徳、全く移りて木堂の字面に上るに非ずば、何ぞ斯くの如きを得ん。(完)

市 島 春 城

近頃は書畫の展覽會がデパートを會場として時々催されるが自分も大概縦覽して眼福を得て居る、中に就て自分の最も喜ぶものは、志士の筆蹟の展覽會である。此の展覽會は藝術を主とするものでなく、別に深重の意味が存するからである。所謂志士の筆蹟は、書に於ても畫に於ても、専門の藝術でなく、強て藝と云へば、素人藝である。書でも畫でも、或る除外はあるが、多くは巧（抄）筆など、評し難いものである。併し此種の書畫には巧拙を超越した雋味があつて、それが専門家を壓倒してゐる。それは何故であらうか、所謂志士と云はるゝ人には、敢て學者ではなく詩人でもなく歌人でもなく亦書家でもない、唯一死國に殉ずるの精神がありて、その熱血が迸つて書となり畫となり又詩歌となるものであつて、その作品には稜々たる氣骨と烈々たる氣魄があり、慷慨の精神が漲つて居つて一見人をして襟を正さしむ

るの壓力がある。夫の東郷元帥の「皇國の興廢云々」の信號の如きが即ち好適例である。英雄は血を以て文を書くと云ふが、誠に其の通りで殉國志士の遺墨が人を動（動）す（動）決して偶然でない。今東亞建設の秋に際し然も靖國神社臨時大祭舉行せらるゝの時、此の勤王志士眞蹟展開催の舉あるは、如何にも時宜を得たもので、これぞ血性の展覽會である。普通の書畫會と同視輕々に看過する勿れ。

白木氏の筆蹟志士  
眞蹟の丹子の首  
事と魁了  
十回年十月十日



菊池寛編著

現代文

宛然!! 明治大正昭和文壇の鳥瞰圖!! 一冊にして實に百五十冊に當り、文學研究の指針として又名文鑑賞、作文の正本として、その精粹のみを一書に集めたるは讀者の至便至寶万人必携の書たり。

收載文章

著者名(掲載順)

野鈴夏國森尾口木目楠橋米三秋安次郎吉石歩外葉島吉薄佐寺入木江田赤橋並信貢藤彦松蓮綱彦吉

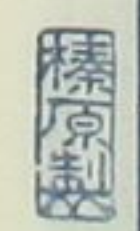
章軌範

定價 一圓五十錢 四六判四四〇頁 送料十錢 郵酒箱入

東京小石川表町 非凡閣 振替東京三六三三九

平馬友谷五田中河若戸柳藤中田火林室水嵐山志菊久武谷近島徳長幸徳矢岡岸片川瀧子葛佐芥小田橋松川十部川東山川田森村山野美生上津本賀池米倫松崎田塚田富代本田岡端井野西藤川川

こんなものが出版されて、余の一文七絶筆の肉と標くんさあ。  
秋の長期にこころ衣食住の事も統一  
制の進と退之感を感してこころ自分  
取つて辛然しヨツリをさすれん折角組  
み上げれば池澤の印刷の進めりすこと  
があら、進川の澤を日守ぬべし紙の候  
別か々容易く紙が求の難く本月末出  
版を望むべしが来月十二月末さるべしと  
常山のふかへ通知を済し別々多く社の  
このハラのしが出来たつておる、まことこの  
ハハラよひあつたおむもこのハハラ約代  
岡本目心紙と表すう、回来及するの態符い  
ち〜〜と共々いれ。  
御人さう余の社を仰ぐ余ハ十八の嵐  
を吹かんと先が古歌を口すさんびら〜  
お〜〜の身う〜〜の心〜  
先ハ人をも始〜  
先ハめらうも宮大の心ある、自分の幼さを  
い年か終り来た、自分の後生ハどう考  
すかとうまくかあるかと悩〜凡そ〜  
前押直毛〜、後五〜所ぬ〜の扁額がある  
う〜、思を思つて流流に描〜

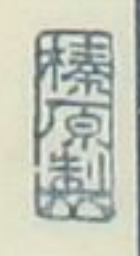






陸軍衛生院の  
七十七号の方の  
能成と振舞

の管つと「は笑陳列」と名づけたいシテキの反故を陳列せしむるかあるか  
 今又因に東に家花の残品中今人の目新くき骨是数をも  
 記して紙上陳列せり  
 一 清政高松玉藻城門遺村盆 近江  
 一 仁清作南をむビストル 箱つき 一 乾隆帝硯形御墨  
 一 菊式薬龍 外科具機等入 一 全属外壯蓮様俣具  
 一 砂時計 一 點字各刺  
 一 洋物ナウトリウカ 一 バイタラ 金  
 一 才一世の歌身の節拍を發行の小紙部 一 夏  
 一 蘭名醫科カニ夕 一 經石 散  
 一 五百年前の蓮の文 一 銀器入 一 經筒  
 一 ジヤワ製水牛角の鳥 一 露兵の肩標



一 シヤム言中侍世作小人形 ぬいこ 米白船模  
 一 壺島の假面 赤色 一 江隆寺羅漢像 模  
 一 羅馬のカンテラ 模 一 填輪人形 模  
 一 角をこトーテンポール 一 燈檠 日本式木製  
 一 支那の虫籠 二個 一 鉄器 四徳漢  
 一 騎馬の婦人像 支那明器 二 模 模人形  
 一 水筒 一 双 白上 一 扇の巻名版  
 一 伊太利製大理石像 バンドル 一 陶印 大書 銘  
 一 葉巻烟草の帯 貼り込の灰おろし 一 婦人腹身刀 青色 装  
 一 橋本雅邦繪婦人烟草入 一 外 一 書 法隆寺在銘  
 一 昆布の作らるるシガレ? 一 ホルター 一 寒念佛像  
 一 秀衡杯 二個 一 羅馬騎士彫刻 額

- 和田義盛杯 一
- 魚袋 有職
- 正倉院古尺模 杉谷振高尺
- 大宰府瓦研 一虎
- 漢瓦研 遺安刺銘
- 水府烈公夫人遺物猿面澄泥研 山田光相
- 前原一誠用研 一ツクウ人形模
- 本原寺前日唐材七作ノ研 池田村四作
- 百萬塔 一 所内色込出灰皿
- 季吟用研 一 道中ノヤヤ
- 叩き扇 漆法師用扇
- 釘火器 茶人用 一 水府相君手齊品
- 一箇唐瓦
- 一台湾船模型
- 一 皇本位紀念銅牌
- 一 東京市海軍紀念牌
- 一 小波千馬紀念馬蹄牌
- 一 一ツクウ人形模
- 一 池田村四作
- 一 道中ノヤヤ
- 一 水府相君手齊品



- 密校箱
- 鑑逢草の中着
- アイ又金 杉浦武田中川什
- ペーパー、カワター 冬四十種 一 石器
- 最小の印刷物 二 一分刻心経印
- 最小世界群書 為程 一 七種の土塔
- 殿下の沙翁全集 書架社 一 併記摩訶酒佛如來經 附原版
- 大上大成佐版木 卷其湘書 一 盲心伝
- 御伝章入印萬里皿 一 浪を舞山末像
- 御伝章入銀篋 二 一 茶の寺古材道
- 名墨 程君三房外 古物園古墨 一 國寶加沙浪形 仿模
- 御原任大官祭の米 悠紀里米 一 木洗字
- 一 旧時代女子打交飾
- 一 毫木骨片
- 一 封泥
- 一 石器
- 一 一分刻心経印
- 一 七種の土塔
- 一 併記摩訶酒佛如來經 附原版
- 一 盲心伝
- 一 浪を舞山末像
- 一 茶の寺古材道
- 一 國寶加沙浪形 仿模
- 一 木洗字

- 洋物インクスタンド 粉箱
- 薩摩政府の印 銅章
- 水原縣官印 同上
- 天子御料の巻紙 法文車入
- 牙の罫川墨 和刻了
- 画家用ケシ炭ハサミ
- 膠製の印褥 三ヶ屋製
- 珍半切 州封筒 一箱
- 富士の石枕
- 徳田勝高の二文字名刺
- 伊豆後輔の意刺
- 李王家紋入銀器
- 屏風幹子記代入熱餘の書物
- 朝鮮石印
- 日本最古の宮儀 卷子 筆箱
- 銅研 唐の年号了
- 其所及状
- 有親免状
- 紙衣 断片
- 踏台 模ヤキもの
- 木彫りし佛像 江戸の
- 沙翁夫妻エワテシ 模
- 日本後標本 模ヤキもの



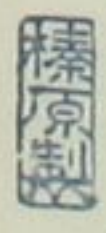
- 古物東洋の俗謡 唐曲二枚
- 洋畫人物像 四山人像
- 埃及像 模大形
- 黄瓦 支那 無鉄大形
- 沙翁故郷の内装灰皿
- 砲銘拓本 本所
- 操練部令詞 日本
- 徳川如文通文書 光緒帝
- 萬葉時代人物人形 十基
- 玩石 十基
- 茶摺り針
- 雅神火鉢 上野 模刻版
- 三軒釜盆大日台
- 密地塗小箱
- 自在腰掛
- 台湾大竹筆
- 春地塗手箱 大形
- 和式相意内りり 折々山石屏
- 短檠 陶製 木製二種
- 帝園寺の聖達宗徒念巻紙入
- 古友伶元 模 数冊
- 瑞西人形 数冊
- 各種小什像 十数上
- 凡神 雷神

○長州の四郎屋と高杉ありや伊勢信勝もいかに  
 折、高杉より二三の友故が信勝もいかに、高杉の信勝  
 の手紙も、高杉死後、信勝もいかに、高杉の信勝  
 高杉を畫し、信勝の首級の高杉もいかに、高杉の信勝  
 高杉二枚いかに、高杉の信勝もいかに、高杉の信勝  
 高杉の信勝もいかに、高杉の信勝もいかに、高杉の信勝

阿房唐津の唐津の山に

長州の信勝もいかに、高杉の信勝もいかに、高杉の信勝

長州の信勝もいかに、高杉の信勝もいかに、高杉の信勝  
 阿房唐津の唐津の山に  
 長州の信勝もいかに、高杉の信勝もいかに、高杉の信勝



水産から見た

驛賣りの名物



四面環海のが日本のこと、全国の鐵道沿線各驛で呼び賣りする名産品の中には、水産物とその加工品の多いことは申すまでもない。

歐米では、驛の呼賣りなどは珍らしいと思うが、日本のやうに驛辨や名産品が汽車の考に賣られる風景は、先づ見られないこと。

「お壽司に辨當、サイダーに正宗」  
 あのなつかしい呼賣の聲は、日本の專賣特許だといふことだ。

實際日本人は、旅行となると無暗に物を喰ふ國民だ。従つて驛辨や名産品が、飛ぶ様に賣れる譯である。旅するものは、地方の産物を何か買ふことを當然のやうにしてゐる。

驛辨の發展と共に又名産品がいろいろと賣り出され、近來非常な發達を遂げた。又旅行者も、その土地の名産品に、多くの興味と期待をかけてゐる。

驛賣りの始つたのは何時頃かハッキリしないが、明治二十年頃であると言はれ、そ

れ以前は驛の前は、うどん屋と一膳めし屋で埋まつてゐたことは、賣物こそ異なれ、今とあまり變りはない。併し、何と言つても、窓越しに賣られる便利は、驛呼賣の進出によつて得られたものである。

驛辨の外におすし、團子、菓子、果物、更にいろいろの食物や雜貨が呼賣りされるやうになつた。最初は賣品の不正も多少あつたやうだが、鐵道當局の嚴重な監督や検査によつて一掃され、驛賣品なら安心して買へるとさへ思はせる發展振りである。

驛辨と驛賣名産品の包装レッテルも、近頃は頗る凝つたものが用ひられる。鐵道側と協力して風景寫真入のものもあるし、都々逸やその土地の名勝、音頭、流行小唄等を入れた氣の利いたものもあり旅の宣傳も兼ねてゐる。

全國的を股にかけて旅して見ると、驛辨に水産物を使用されてゐることは勿論だが、驛賣り名産品中には水産物やその加工品がなかなが多いことである。併し、水産王國である日本のこと、驛頭

で賣るに呼ばれる水産物や加工品は、殆んど數へ切れぬほど多いが、しかし大體似たりよつたりのものばかりである。で、その中で珍らしいもの、うまいものを定評のまゝ紹介してみよう。

△ 東京附近では土浦驛の辨當が變つてゐる。それは公焦や鮎のすめ焼甘燻煮、さくら蝦を入れてゐる。木更津驛では小さい烏賊の丸煮を入れてゐるし、千葉驛では蛤を入れてゐる。

國府津の鯛めしもうまいが、鯔は一寸變つてうまい。元老西園寺公の好物で、東京への上下には必ず買はれるそうである。

△ 山北驛の鮎もうまかつたが、今は熱海線を通るのでその獨特の風味は味へなくなつてしまつた、淋しい氣がする。然し中央線の八王子と立川で鮎すしを賣つてゐるからそこで味はへる。

△ 鱧井は、大宮、熊谷、高崎、小山、水戸、米澤、其他關西への途中で濱松と豊橋が、名物だが、水戸、米澤、濱松、豊橋がうまい分に入る。尚水戸にはえびめしが變つてゐて一寸味へる。

△ 名物から言へば、鎌倉の海苔手羹は他の驛のものより斷然好い。横須賀では、ひじきと、もづくが名物、もづくは油壺で採れたもので却々好い。國府津小田原は蒲鉾と鰻の鹽辛がうまい、沼津では鰻のでんぶが賣つてゐる。

△ 富士驛から富士身延線によつて芝川驛に行くとな物芝川海苔の珍味がある、極めて淡白な香と味をもつもので、普通の海苔と

變つてゐてよい。興津ではタタミ鱈を賣つてゐる。

豊橋の白魚、名古屋のコノワタ、藻漬、海老そぼろがある、名古屋のコノワタは知多半島の大井港でとれるもので却々好い。岐阜の鮎ずしと鮎の粕漬鮎のうるか、鮎の腸の鹽辛であつて、一寸にがみはあるが珍重なものである。

大津の鮎ずし、薬用だとの話湖魚の焙煮これは琵琶湖獨特の小魚で、乙な味である。大阪のまむし井、鰻を使つてゐるのだが、鰻井とは東京人から見ると變つてゐる。神戸のむし壽司も推奨出来るうまいもの一つだ。

伊勢路では、桑名の蛤の時雨煮、蛤、四日市の白魚紅梅煮、鳥羽の鮎の粕漬が名産品として驛の呼び名だ。

更に山陽線沿線では、尾の道のさくら鯛の鹽辛に蒲鉾、廣嶋には海苔、三田尻では佐渡川の鮎が名物だ。廣嶋の牡蠣は名物だが遠方への土産物にはならぬような氣がある。唯冬の間だけ海田市と宮嶋驛で、素焼の井の中に入れた温い牡蠣めしを賣つてゐるが、なかなか美味い、それが終ると今度はあなごを賣る。

下關では何と言つても雲丹と蒲鉾で、それに鯨の尾羽毛である。

四國に入ると、徳嶋の鳴門若布、高松の鯛味噌と平家蟹、多度津の小鯛甘酢漬がある。甘酢漬は小鯛を酢と砂糖に東唐がらしの漬けたものでなかなか風味がある。八幡濱では鮎のわたの粕漬は珍しいもの一つだ、芝罘も蒲鉾の名産地である。

九州路へ行くと、門司の雲丹と蒲鉾は有名であるが、小倉にまで貝といふのがあつた。

大分では子持ち雑魚、白杵の黄飯これは石首魚の肉に茄子、葱、牛蒡、芋莖、など煮込んだ井飯で、五目めしと同じやうなものだ。

博多の儀助煮、小蝦、小鱈、小鯛、小鮎、小はぜ、シヨなど何でも一寸以下の小魚で賣物にならず普通の食ひ方では、不味といふものを集めて、天日に乾かし味をつけたものである。

唐津は松浦漬、鯨の燕骨の粕漬であり、更に鮎や烏賊の粕漬もある。

長崎の五目めしには鹽生節を使つてゐる。その外には有名なカラスミがある、カラスミはボラの卵巣を取つて鹽乾にしたものと、一旦鹽漬にしたものを湯釜に入れて鹽抜きをして乾燥したものもある。長崎本線の諫早驛では珍味むつころがある。天草の鮎の油漬やどろ雲丹も長崎で賣つて居る。其他鯛の花、水音寺海苔と大村の雲丹も九州名物の一つである。

山陰線へ入ると福知山と和田山で鮎ずしを賣つてゐる。鳥取では松葉蟹と湖山池でとれる鰻井、米子では刻み鰻を賣つてゐるが黒胡麻を混ぜてゐる。安來では鰻の匂玉煮と十神もつくが名物である。松江では出雲若布等有名で、地方色タツプリなものだ。北陸路へ入つて来ると、福井の干鰯、敦賀では羽衣と言ふ昆布菓子がある。金澤は越前蟹を食はせるが、大變美味い、ねり雲丹と刺し鱈、ふくの皮と言つてふくの肉を乾して粕漬にしたものと、鮎の粕漬がある。

神道の鮎はあまりにも名高過ぎる。

富岡と高岡ではもみじ子と稱してスケツウ蟹の卵巣の鹽漬がある、粒子が極めて微細で地方獨特のものであらう、其他に昆布巻蒲鉾と黒作り烏賊の粕漬がある。

東北方面では、土浦の公魚とさくら鰻があり、平潟の鮎の切漬、古河の利根川でとれた鮎の甘露煮がある。進んで仙臺の鯛味噌と牡蠣、青森の昆布と昆布菓子、羊羹、酒田の蝶螺の鹽辛は珍しい。

北海道へ渡ると、大沼の鮎ずしめ焼、小樽では帆立貝を乾したもの、時候によつて生の儘を驛賣してゐるが、生のは内地迄は持つて歸られないのが残念だ。

札幌驛の鮎めし、これは鮎と野菜を昆布で味をつけたのをめしの上に混ぜたのである。沼の端驛の貝舞當も變つて居て一寸味へる。新保驛のやまへ鮎等は北海道でなくにはならぬ自覺である。

朝鮮、臺灣等も相當あるやうだが、それは又の機會に譲る。内地でも此外にいろいろとあるが、これに止めておく。

何れにせよ、驛賣水産名物は斯くの如く多い、併しまだ、賣り出されてゐないかかれたる名産品もあらうし、現に賣り出されてゐる中に、形態其他相當改善を要するものもあるやうな氣がする。

地方水産關係の指導と研究によつて、更に一層の開拓をせらるべき水産物及び水産加工品をエキサイトして、食へものづきの旅行家、土産物買入れを慣習とする旅行家の慾望に備へて、水産王國の王國たる所以を充分發揮せしめる程、各地名物の創製を切望するものである。(食糧日本)

○家名、久浅を毒城が画一と母の流りの回かあひ画  
成と二枚つぎ、風景の横技ひあふが、飯ら大キくくし  
仕まふゆり、保一帯伝とくも思ひ、飯後ふんけと  
後まて、法もあふこと、丹島か目取のち、思ひつきり人、  
持にせやつた、まねの、飯後中の、飯ら風景の指字、飯  
没飲、いことかあふ、此高も、文ひあふ、飯ら、まて、  
あ、飯ら、同一、飯ら、大、飯ら、指字、あ、飯ら、  
か、あ、飯ら、い、飯ら、い、あ、飯ら、









# アステカの越え

【フエノスアイレス本社特電廿七日 大原親善使節手記】廿七日朝六時起床、気がかりの空は曇り、雨は脚だけで頂上はみえぬ、フエノスアイレスは曇りて薄空なく、雨になるとの懸念、メンドサ通りは曇りだが少しは晴れかみえてゐる、ウスマタラ山脈通過は可能だと山頂の觀望所からの無難だが風速十六メートルの向ひ風、余り有難くない、機體が思ひ切つて二世一代のアンドレス機體に出るべく決心する、朝八時十二分出発、右手に雲をかぶつた連山の脚をみつゝ、雲の下を北に向ふ、やがてワアルパラインからアンデスを越えて東に向ふ、鐵道線路が延び、この線路について東すればアンデス山脈越えの山腹だ、いよいよ右に機軸して山腹征服にかゝる、中尾、吉田、吉田君はバンドで體を座席に縛りつける、山腹征服一歩、雲がすいて東の空がうす明るくみえるところがある。

両側の山は空気が薄切れを著したまの如く雲を被つてゐる、頂上は雲の中で見えない、山腹の明るい所をめぐりて、ニッポンは全力をあげ前進する、高度五千五百、雪下廿度、両側の脚の下は蒼蒼しい山腹だ、雲のない所は死のものもの如く灰色の赤土だ、生きたものは草木といへども眼に見えない。

秒速十六メートルの向ひ風、山腹にあつて渦を作り跳返す風、それ等の風が作る真

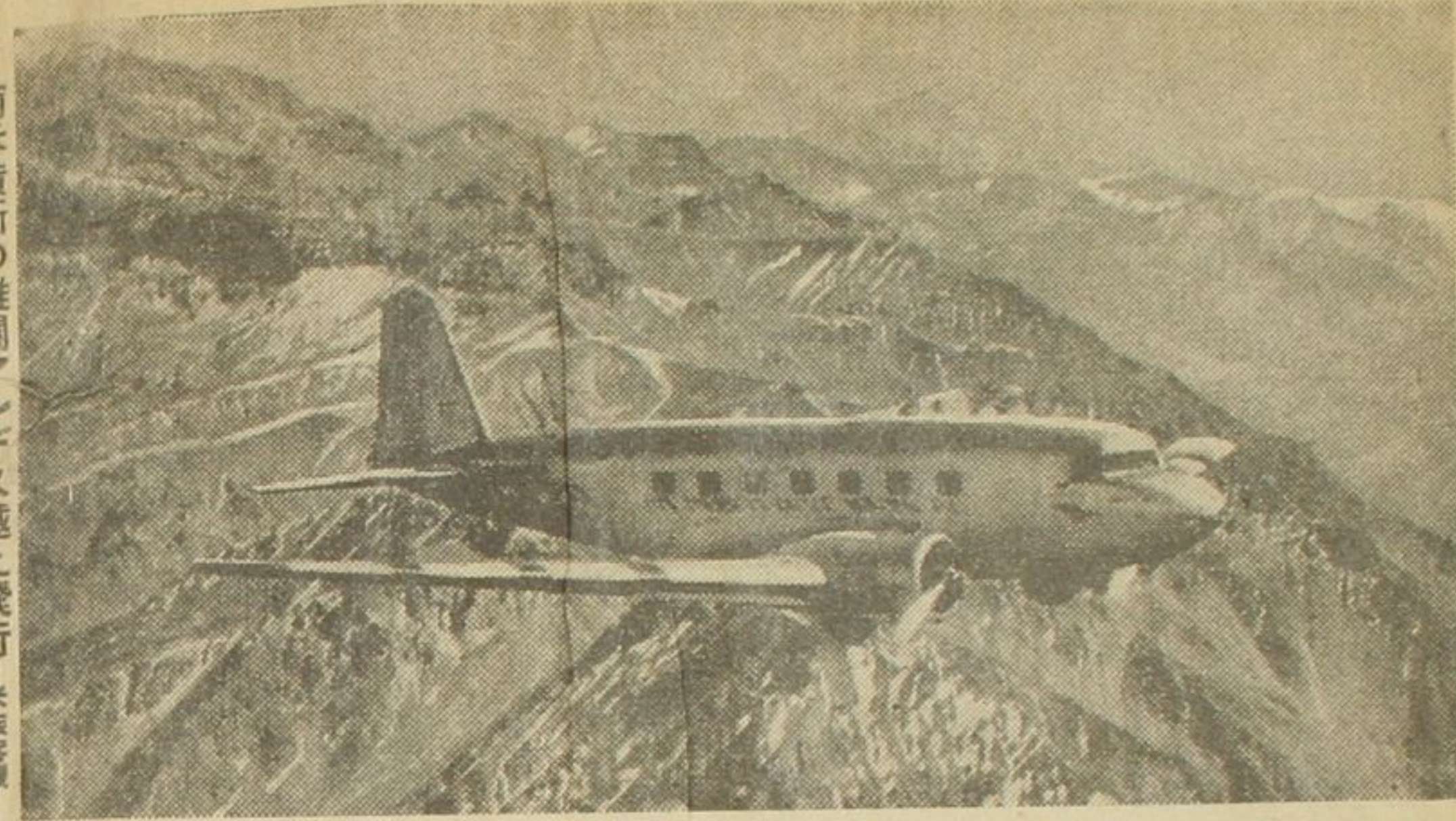
## 山腹にうづつ巻く突風

空のポケットにさすかの、ニッポンもまたたいたになり、上は下に、右に左に、木の葉の如く翻弄される、機體は低い降りだが、雲の影つたのもしない言た、濃いビツチで全速力を出してゐる、この機體飛行機も人も山腹征服に一心をこめてゐる、乗員全部顔は土色になつたが、用意の酸素は誰も使はうとしない、機體背に立つて外を眺めてゐた機は機手で乗機にしがみついてゐた、手は硬くて感覚を失ふ、足も凍えてつゞく、離れ、しかし機體外装も著しく羽搏く、遂に山頂だ、飛行機は一段と激しく羽搏く、いつも地面をもつて機體の後ろに立つてゐた山君、中尾機長の肩をたゝいて今ひと息と激励した、ニッポンは飛び上り跳ねかへつた、しかし遂に山頂を飛越し前方の視界が急にひらける、朝日日光を浴びる、高度も下げる、これで機のアンドレスにさすならを告げた、一同機を見合はせ「相當なもんだつたな」といふ以外に言葉もなかつた。

紙のぼろ、無事、翔破りうりつと、未だ詳細の報を得ずとも  
左ス冬冬社事を描りけ置く  
九月廿八日記

○昨夜九月廿七日仲秋にあたり、内子例の月：前夜  
例の供物を修くし月をゆき、晴天をゆるぎ、雲を散らす日  
鮮なること、偶に皇軍一河定湖、柱を敵の大甲を包  
圍し運の力間中せ、北湖。戦月を雲の曙と  
びとの、幾高の、赤特士月：對し、家郷を憶ふの情切  
る、あちしと想ひ、風無量ううじ、大も河信仲の故  
軍を放送す、此時北物語とすくも一真る、更なる感懐を浮  
めたり。

○元行機世界一迫の途上難コースはアンデス山を越り、ことごとく  
北山の高さニとあり、元行機は高千尺の上空を飛  
ハル、ゆるぎなき、稀なる、わらわら乗者の目と所、一  
小終降雪をうき、過り、元行機はあちしと氣つう、人々今朝の夜



南米横断の難関アンデス越え飛行 米旅客機

# 暁の空に

# けふア

**第2回 読者投票**

投票用紙は、本紙の裏面にあります。ご投票ください。

投票期限：10月15日まで

投票場所：本紙の読者センター

**第3回 読者投票**

投票用紙は、本紙の裏面にあります。ご投票ください。

投票期限：10月20日まで

投票場所：本紙の読者センター

**第4回 読者投票**

投票用紙は、本紙の裏面にあります。ご投票ください。

投票期限：10月25日まで

投票場所：本紙の読者センター

**第5回 読者投票**

投票用紙は、本紙の裏面にあります。ご投票ください。

投票期限：11月1日まで

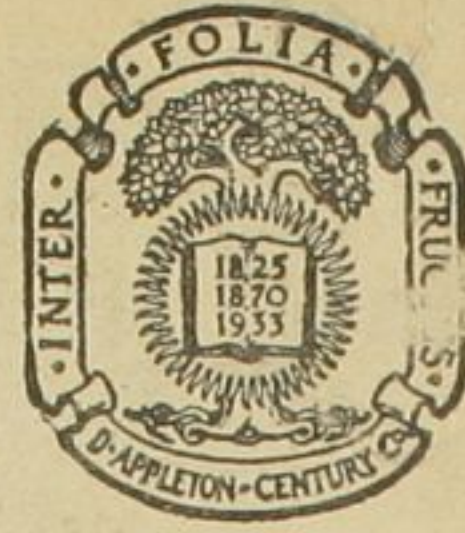
投票場所：本紙の読者センター

東京日日新聞社  
〒100-0001 東京都千代田区千代田

電話：03-XXXX-XXXX

支店：東京、大阪、名古屋、福岡

発行部：〒XXXX-XXXX



### 「小泉八雲 秘稿 妖魔詩話」稿本

三邊清一郎

昭和九年九月

ラフカディオ・ハーンの世界に残る樹精その他の妖精を  
 繞る香りの高い説話は、吾々の祖先の自然に對する深い愛  
 から生れたのである。たとへば「青柳のはなし」をとら  
 う。浮世草子「玉すだれ」から引いたといふ、この若柳と  
 青年武士との美しい戀物語は、糸のやうに繊かな嫩柳への  
 深い愛がなくては生れやうもないものである。そこに現は  
 れる若人の青柳への思慕は、すなはち作者の楊柳への思慕  
 である。がしかしそれは亦吾々の祖先の草木に寄する心で  
 もあつた。このことは吾々が幾多同様の使承をもつことに  
 よつて證明される。彼等は非情の自然を單に美しいものと  
 して愛玩したのでない、有情のもの、吾々と同じものとし  
 て愛したのである。すなはち魂を與へて愛したので。ハー  
 ンはこれを知つて居た。彼は「西歐の詩歌に於ける樹精に  
 就いて」その他、草木鳥蟲「すべての物に靈がある」と

考へることの重要性を説き、花の精、樹の精を信するの  
 は、日本人と昔の希臘人だと言つて居る。「知られぬ日本  
 の面影」以下の諸篇は、日本人へのかうした理解を基礎と  
 して執筆されたのである。

しかしこの種の傳説は、合理的な教育に培はれた今日の  
 人々の間では、既に眞實性を失ひつゝある。彼が明治二十  
 三年といふ早い時期にわが國に來たことは、蓬萊の幻に憧  
 れた彼、彼によつて優れた文學を加へた吾々にとつて、共  
 に仕合せであつたと言はなければならぬ。なぜならば、  
 彼の來朝の頃、既に「西の國から邪惡の風が蓬萊を吹き」  
 初め、有ゆる夢幻的なものを拂拭しやうとして居たからで  
 ある。維新政府によつて移植された西洋文明は、その頃漸  
 く民間に浸潤して、そのなから言はず、實生の新文化が生  
 れ出やうとして居た。産業方面では政府の強行政策が實を

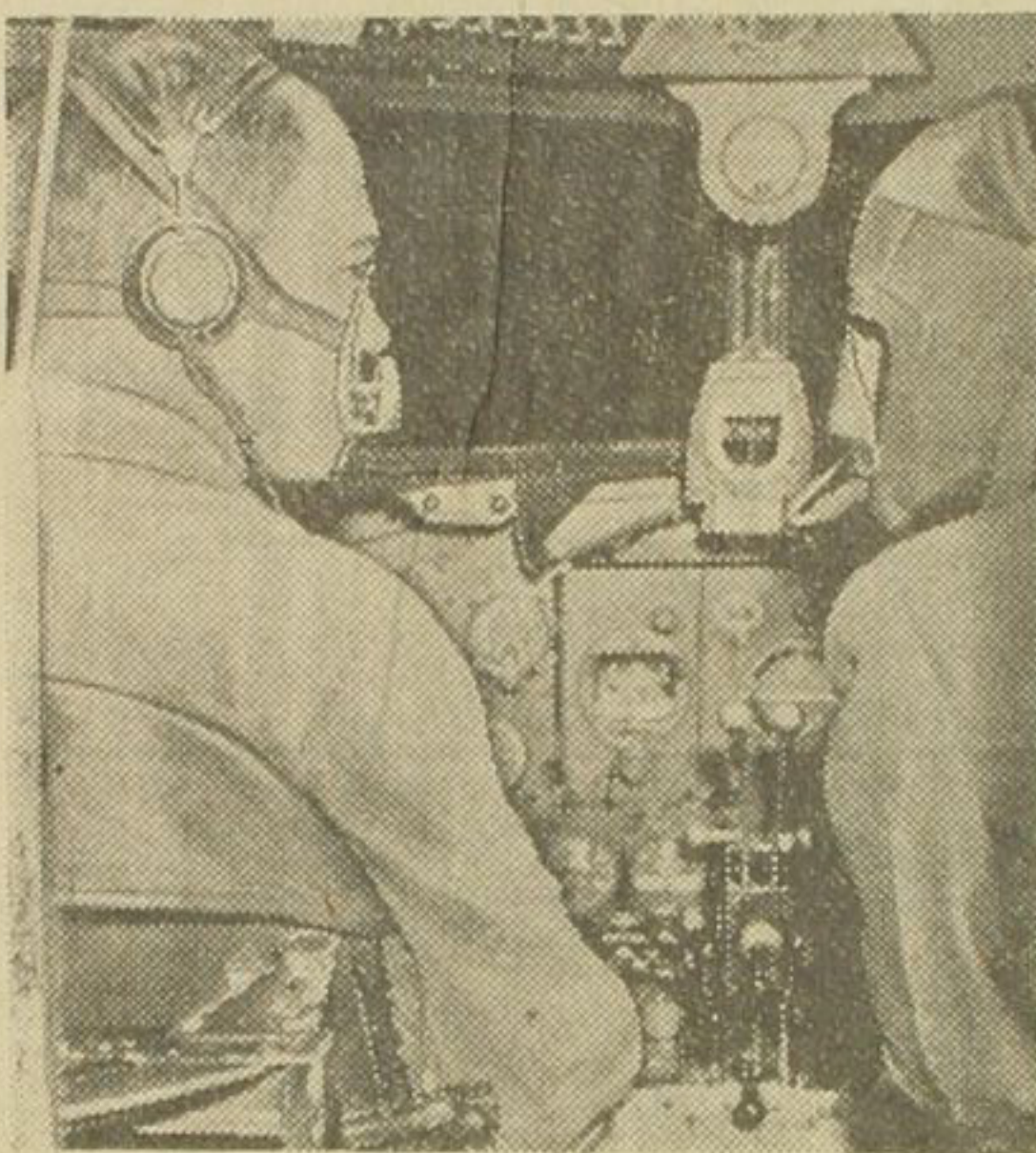


南米横断の難関アンデス越え飛行―米旅客機

# 遅まじわがニツポン

## 征服アンデス

### 既に完成は縦断南米



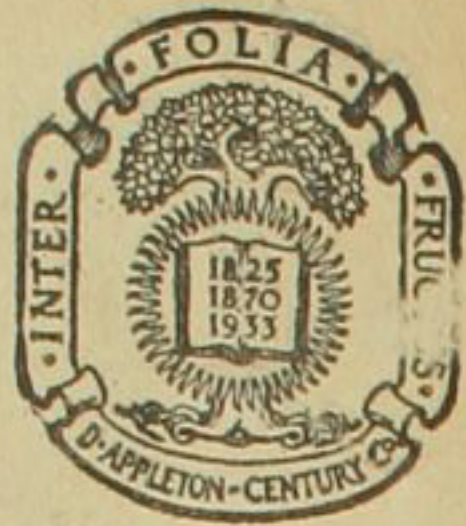
米旅客機がアンデス越え飛行の難関を突破したとき、このスリルに満ちた機内を覗いた。写真：高木重雄

#### 一萬尺の山を縫ふ 酸素マスクを携帯

【サンチャゴ(チリ)本社特電廿五日發】世界一困難ニツポンはチリ政府の希望を容れてアントファガスタ着陸をやめアメリカに泊り廿五日その難関を首都サンチャゴにあらはしつゝ南米西海峽の飛行を了へわが航空史上にあらたな一頁を加へた。だが次に密へてあるものはアンデス越えの難関だ。アンデスを直越えて行くには六千メートル以上の高度をとらなければならぬ。酸素の用意はしてあるがこの高度を一時も飛ぶのでは機械やプロペラに水が張る恐れがあり恐らく中尾機長は汎米航空會社の定期飛行が通つてゐるウスパタ山脈を縫つて行く方針だと思はれる。例の「アンデスのクリスト像」をはるか下に見下ろして五千メートル内外の高度を一時間余飛ぶのだ。しかもこの山脈の幅はせまきく氣流がわるくアンデスの壁と呼ばれる突崖は間断なく懸ひかり旅客機の空路としては難コース中の難コースとされてゐる。今一つ問題となるのはこの一帯の天候だ。チリはまだ冬である。廿五日の天気概況によれば廿六日はアンデス一帯早朝から吹雪機嫌ウスパタ山脈は密雲に閉ざされ飛行不可能といふことだ。一行は大事をとつて廿六日を休息と機内の検査に費し廿七日アンデス越えを試みる予定である。眞實は酸素マスクをつけて操縦するアンデス越え定期機の乗員

レズ飛行機を導つたのが朝の十時です。こゝからアンデス山脈のメンドサまで千キロ余りはいはゆるアルゼンチン・ペネ大平原で二千メートルぐらゐの高度で飛んで来たやうですが空が澄み氣流もあつたやうで申分ない愉快な空の旅でした。メンドサに着いたのは午後一時半頃で半分ほど休憩して機上の人になりました。いよく機内は合衆の客はアメリカ人の母子二人、新婚夫婦らしい男女が一人、アルゼンチン人らしい四十がらみの男です。アメリカ人母娘が「空の旅ついでいゝものな手紙まで書けるんですわ」といふのでした。これは恐らくアンデスの空の旅を知らない初めての人のなせう。そのうちに一萬四千尺級の高山があつて行く手に現れ飛行機は五千メートル以上の高度をとり出した。すると機體が右に左に揺れ

出しひっきりなしに大きなエアポケットに入るものと見え百メートルも下ると見えてくるので、エレベーターが四階か五階から一度に降下するやうな心持です。しかしシートに身を預けておぼつかたがそのうちに頭痛がして来て呼吸が苦しくなる。氣がついて酸素吸入器を口にあてると忽ち爽快になります。



「小泉八雲 祕稿畫本 妖魔詩話」稿本

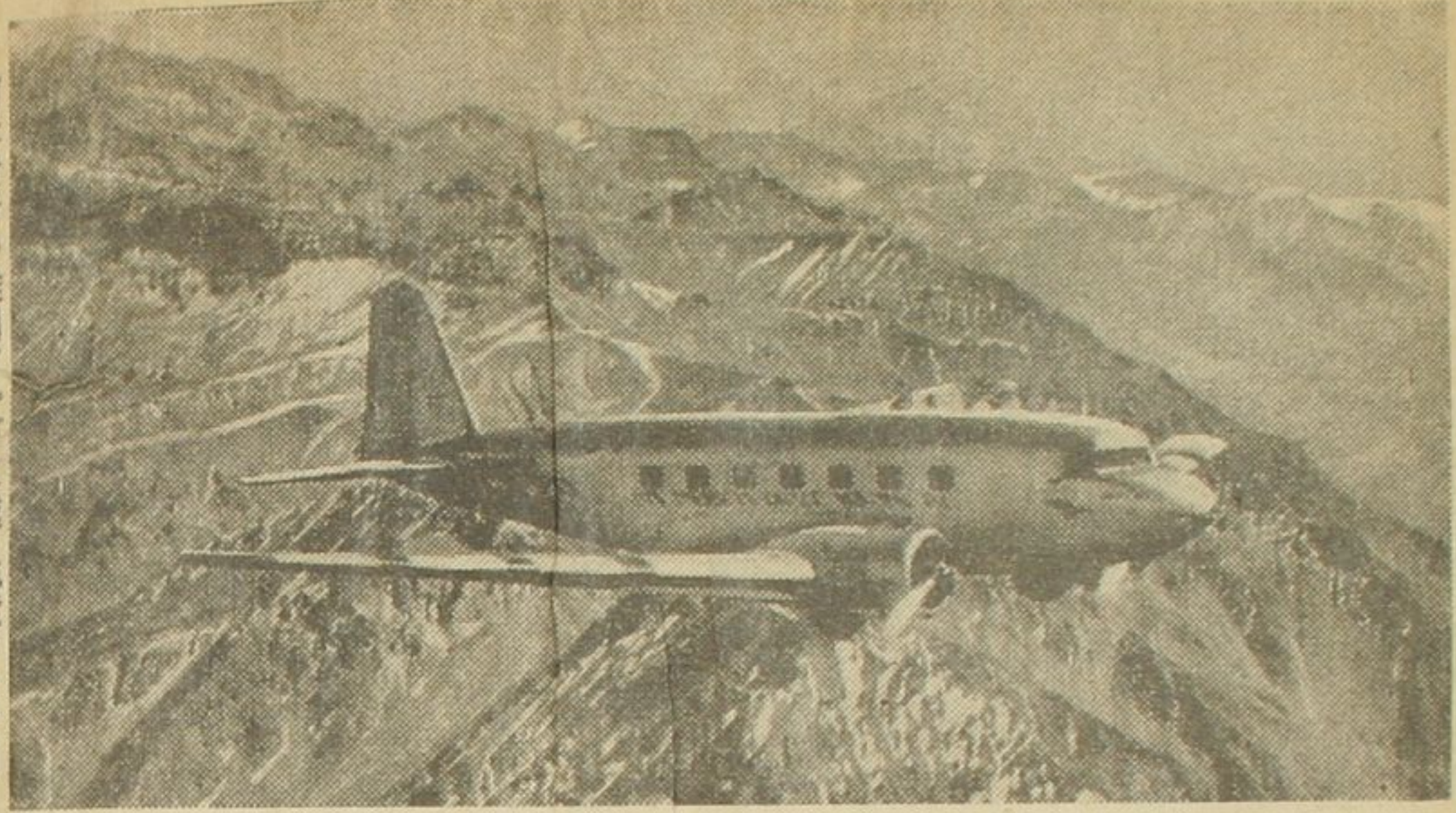
三月九日

三邊清一郎

ラフカディオ・ハーン作品に殘る樹精その他の妖精を繞る香りの高い説話は、吾々の祖先の自然に對する深い愛から生れたのである。たとへば「青柳のはなし」をとらう。浮世草子「玉すだれ」から引いたといふ、この若柳と青年武士との美しい戀物語は、糸のやうに繊かな嫩柳への深い愛がなくては生れやうもないものである。そこに現は

考へることの重要さを説き、花の精、樹の精を信ずるのは、日本人と昔の希臘人だと言つて居る。「知られぬ日本の面影」以下の諸篇は、日本人へのかうした理解を基礎として執筆されたのである。しかしこの種の傳説は、合理的な教育に培はれた今日の人々の間では、既に眞實性を失つてゐる。皮が月台二十





南米横断の難關アンデス越え飛行 米旅客機

# 暁の飛行機

## けふア

安田生命 募集  
1911年 募集  
募集員 募集員  
募集員 募集員

野野 募集  
募集員 募集員  
募集員 募集員

募集員 募集員  
募集員 募集員

募集員 募集員  
募集員 募集員

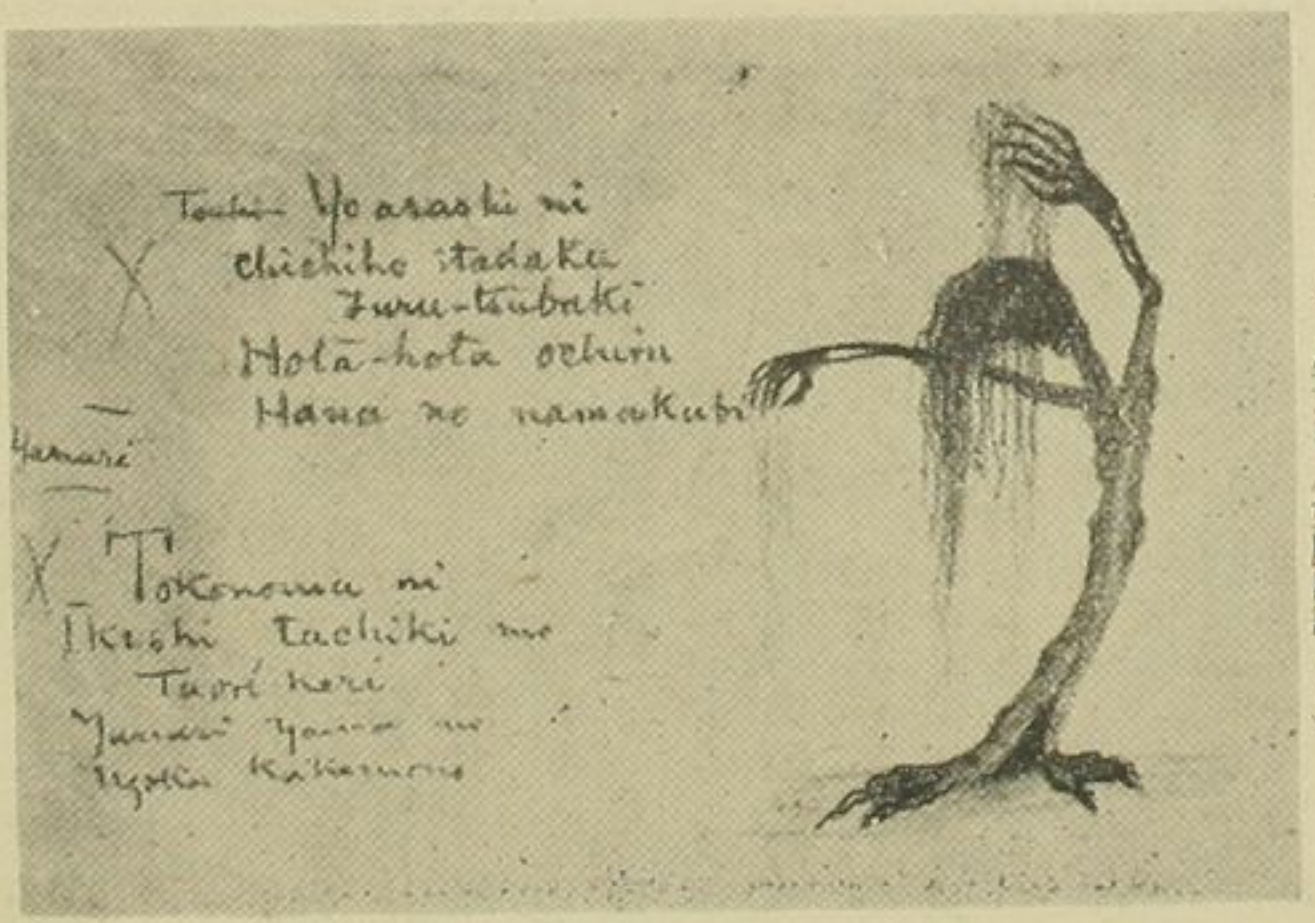
募集員 募集員  
募集員 募集員

紙の端等へ毎度戯畫を描く癖がありました。この物語を翻譯の場合は、何時もよりはより餘計に斯く動に驅られたものと見え此のノートブック中には「畫が多いのです」と附加して居る。このノートは後天の河縁起そのほかの化け物の歌の素材として取入れられた。

それらに記された徳川末期の狂歌は、有難いものでない。けれどもその戯畫には、たゞ繪心があつたからとだけでは済まされないのである。例へば柳に月がかゝり、蝙蝠が飛んで居る小品である。迫力といふのは言葉が強過ぎるが、確かにある妖しさを感ぜさせる。それは、むつとして、春雨を濡れて歸れば、門の青柳でまた晴れてゆく、一月の影ならばおぼろにしてほしや、「など、唄はれる情景とは、凡そ異なるものである。



ある。またモデルを友人に示したところ、直轄首のそれは、かつて畫を描く友人に示したところ、直ちにそこに燈火の暗き蔭化性のもの、臥す怪異を連想したのであつた。これは「束の間も梁をつたはるろくろ頸けたく笑ふ顔のこわさよ」といふのものでしたのでから、この想像は當つて居ないが、しかし感受性の高い人には、それほど迫るものがあるらしい。これ等は、柳なり轄首に對する吾々の習俗感情にわけ入ることなくして、よく描き得るところでない。



この理解があつて始めて「怪談」その他の名篇が書き得たのであらう。またこの稿本には、彼の入念な推敲のあとを示す、初稿より最終稿に至る四の「ろくろ首」草稿

醫學博士藤浪剛一著 新刊  
**温泉知識**

(文部省認定圖書)

菊判五九四頁  
挿圖六四圖  
口繪七面  
定價金五圓  
送料二十二錢

現下時局に對し國民保健の立場から温泉  
國策樹立の要を説き、西歐諸國、特に獨  
伊の温泉國策の歴史、現狀を紹介して識  
者に訴へると共に、温泉の諸科學及日本の温泉に就きあらゆる  
角度から豊富な知識を提示してゐる。先づ温泉の文化的方面で  
は、本邦温泉學の發達を詳述すると共にその先達たる宇田川榕  
菴、拓植龍州、小村英菴等の業績を特に細述し、温泉の發見、  
傳説、地名考などから、温泉と風景、昔の温泉行遊、草津の時  
間湯等趣味的事項をも掲げ、温泉の衛生組織、取締、觀光事業  
としての温泉學についても述べ、フイエランドの温泉知識、ナ  
ウハイム温泉研究所の紹介をも記してゐる。而して科學的方面  
では温泉の生成、湧出、溫度、分類を始め、醫學上の諸知識を  
廣く示し、温泉治療の諸要諦を易説してゐる。この著者にして  
はじめてなし得る温泉知識の一大金字塔たるもの。國民福祉に  
關心をもつ各方面の識者、醫家、温泉療養を試みる者、また廣  
く趣味、好事家、旅行者に價値多き權威的新著である。

(内容見本進呈)

數葉が收められて居る。これは「經驗ある文士でも三度は  
書直し、思ひ直し、作り直し、改め直し、せねばならな  
い」といふ彼の言葉を、文字通りに裏書するものである。  
「妖魔詩話」は、かやうに、種々の角度から彼の創作態度  
を示すところに、高い價値をもつ。

本稿本はザラ紙質のノート用紙三十二葉とその表紙、及  
び前記ろくろ首の原稿五枚を内容とする。うち繪のあるも  
の二十四であつて、船幽霊を描いたものが二枚ある。そし  
てそのなかの幽霊は彼れ自身であり、それに追はれる三の  
人影は愛兒の姿であるといふ。幼き者へ限りない愛を運ん  
だ彼は、出版になつたものななかで、水の死靈は「何處へ  
でも跟いて行きたがる」といふ俚言を引いて居る。轆轤首  
が夫人のそれであることは前に述べた。殘された人々に  
は、このノートが、この上もなく懐しい形見であつたに相  
違ない。前人愛用の蒲團裂を用ひて美装に改め、先考を偲  
ばれた遺族の方々の心持がそこに窺はれる。それは最近ま  
でその手許にあつた。それが些かの機縁により、他の二三  
遺稿と共に、慶應義塾圖書館に收められ、今はそこで深い  
注意の下に保管されて居る。私がこゝにこの文章の筆を執  
るのも、世のハインの尊敬者、研究家に、その所在を知ら  
せたいが爲めに外ならない。

新刊 日日東京東 (日曜水)



南米米國の標榜











社第玉浦福元素頌首九拜寫

福原五岳筆

池大雅の肖像ハ二三あるが、この中ハ、中興竹田と稱し、五征、禮儀似すと云ふ竹田の係と對照したいと思ふ。北國南志、總領事、執事、修福中の因も大いなる

# 兒島大審院長の銅像を建立

## 司法省の記念事業

司法省の大審院、裁判所構成法が制定せられてから五十年、来る十一月一日にはその記念式典が司法省主催の下に全国の裁判所、検事局を総動員して盛大に舉行されることとなつてゐるが、司法省では記念事業の一つとして明治中興の名大審院長兒島惟謙の銅像建立を計畫し彫刻家山白雲氏に依頼してゐるところこの程度迄を完成するに至り去る十三日には岩村司法次官今下關係者が概分を終へたので近く第二段の工作に移ること

となつた

兒島大審院長は愛媛縣宇和島の

人で明治二十四年五月十一日、來朝中のロシア皇太子(慶帝ニコライ二世)に對し路上警備の津田三藏巡查が拔劍して斬つた大津事件當時大審院長の重職にあつた、政府當局は事件の成行を重大視し最高裁判所たる大審院に向つて刑法の便宜的解釋を要望し津田を極刑に處して外交の圓滿遂行を期さんと極力努めたものだが兒島大審院長はこれを受け飽くまで法權擁護を主張して政府の威壓的態度に屈せず津田三藏に對し無期



一死刑を宣告した  
その後間もなく兒島大審院長は遊官のやむなきに至つたが「憲法の

神」として擧げられ、司法省として  
もまた兒島大審院長の毅然たる態度を賞揚のあまり今回の司法制度

確立五十周年を以て銅像建立となつたもので銅像は大審院正面階段東側の大柱を背後にして建てられ台は鶴田花岡岩を用ひ高さ六尺、その上に二尺五寸の銅像を安置し司法省の鑑守となるわけであるが銅像は時局下鑄造することを遠慮し石膏の塑像を作り黒褐色に塗つて安置、然るべき機會に鑄造する豫定である、なほ司法省ではこの銅像計畫と並行して大津事件の真相をはつきりさせるために東京控訴院安西判事が中心となつて資料蒐集にとめてゐるが同事件の  
**裁判** 官だつた堤裁判長以下井上、安島、木下、高野、土師中各陪席判事の遺族で居所が判然しないものもあるので知合の方々は司法省まで申出て貰ひたいとの事である「寫眞は兒島大審院長の胸像と作者山白雲氏」

自他身の上話

敏 郎

私のやうな筆不精で手紙を書き事嫌ひな人間は、月々雑誌を發行して、それに身の上話でも書く事にならぬと、御懇意に下さる友人先輩諸君に對して、段々不沙汰になつて、遂に一年に一回の年始状の遣取りを續けるだけで、そして最後に黒梓附の死亡通知を遣り取りして、それでおしまひで、と云ふ餘りにもあつさりした交際に止まりさうだ。で、手紙代りに雑誌を讀んで頂く、これも私の雑誌發行の趣意の一つには確かになつてゐるのである。

回顧すれば、私も上州沼田の田舎から、初めて東京へ出て來て以來、今年で滿三十四年になる。最初は全くの一人ぼっちで、親類は東京に何軒か有つたが、友達としては一人もなく、芝白金の明治學院で寄宿舎の北向の廊下を歩く時、故郷の空をふりか

る。今更云ふ迄もない事ながら、人がこの世に生れて來て、袖摺り合ふも他生の縁と云ふ言葉もあり、一樹の蔭に宿るのも一河の流を汲む事も、まことに何かの縁を汲む事かと思はれるのに、與にしたり、お互にその住宅を訪問したり、手紙の遣り取りを易ならぬ縁故が有るやうだ。我々日本人はその數實に八千萬と注せられてゐるけれども、その中で一生の中に言葉を交はす人は凡そ何人あるだらう。省線電車の中で、往來する間に何人の顔は、一生の間に何百萬と云ふ數に上るだらうが、記憶に残るものとは、殆どない。その中から互に顔を一目見

て、その次には一體何時逢ふのだらう。それを思ふと情なくなる。三 それからもう一つ、私は近年近眼の度が次第に進んで、今かけてゐるのは三度の眼鏡だが、これでは明るい所でも一尺五寸から先はハッキリしない。さりこれ以上強い、自分の眼に合ふやうな眼鏡は、お醫者さんかお見掛けしたから、君を呼んだが、聞きつけずに電車に乗り込

五 先達で久し振りに逢つた友人に、この頃は身體が丈夫になつて、風邪も引かないと語つたところ、友人が云ふには、「それは君が貧乏したからだ。」との事だつた。貧乏が第一の健康法だと云ふ事に相場がきまれば、病人は醫者を見限つて貧乏して見せればいゝのだが、と

Handwritten notes in Japanese, including phrases like "やあ、暫く。" and "だから私にとつては、雑誌に..."

或る日の頼山陽の横顔 (女弟子江馬細香の横顔) 生方敏郎

五月の和やかな夕日が西山に... 頼山陽は五十年前後と見え、文人... 山陽は五十前後と見え、文人... 山陽は五十前後と見え、文人...

城に激賞されたことがある。あ... 山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな...

山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな...

山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな...

山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな...

山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな... 山陽は口が悪い。左もな...

敏郎 新玉の年来る

今日は十二月十五日の夜だ... 新玉の年来る... 新玉の年来る... 新玉の年来る...

新玉の年来る... 新玉の年来る... 新玉の年来る... 新玉の年来る...

新玉の年来る... 新玉の年来る... 新玉の年来る... 新玉の年来る...

新玉の年来る... 新玉の年来る... 新玉の年来る... 新玉の年来る...

新玉の年来る... 新玉の年来る... 新玉の年来る... 新玉の年来る...

舞臺に今や我を以てかきこきしむる振替小説  
止陽を以て大抵下ざりしを由縁に姫一有  
りかたくなはれ大正ナニヤ頃其思ひを戯曲家  
のバーナード・ショーと小説家のアルノー・ド・バネツ  
トが大議論を起し一人は戯曲は小説より劣  
るべきと云ふ一人は小説は戯曲より劣るべき  
と云ふは如何なる上句の果、バネツトは小説は戯曲より劣るべき  
かすを小説に書き付へ又バネツトは小説は戯曲より劣るべき  
曲に書き付へて発表し、其に大に世を驚かせ  
しむるなりやはありしなり、そのころか頭をあつたの

時を考へ

と我まの。とつ人 棒と箱將戲にこののの事來てく



陸奥の

下巻の「松山陽」に読み、此中にあつたものを  
 そのまゝに取材して、<sup>且つ</sup>「<sup>陸奥</sup>」小説を書いたみやくし  
 モクにんたうが別巻「茶室茶後」の三頁にあつた  
 私の拙作「松山陽」です、中々唯一つ、猫の名前  
 かけ私が勝手に命名しました、黒猫といふこと  
 ちやうど九郎といふやうな、こゝは小説とあると思  
 い猫といつたのは形がまゝなやうなやうな、名  
 前を付けたやうです、他は一つは私見を加へたもの  
 は有りません、先巻の論文に「<sup>陸奥</sup>」を結ぶさうで  
 小説曲に作り代へる』ところに非常な面白味を

略名を

陸奥の... とつ人 棒と箱將威にに考この危難私よにる見事

感はちう下す、漢詩を作るには平仄押韻の  
 束縛かゝせかつたら、何の作詩の面白味か有り  
 ませう、私は束縛の年で書くところに脚韻を挿  
 ち、脱稿の後一人笑壺に入つたのですが友人  
 に其強をいへる自慢といふもの甚だ書くと併讀  
 した者下ちこは成程と云ふ声をおちいわけ  
 たり、成程強念かありません、坪ゆえをいとお  
 訥ねしん之をお見かけたら、そんなことありま  
 せん、好むものをいふから大に悦ぶと思つ  
 て居るや、だが、その後私の方が不意に不如意

時居を察

和歌まのし とう人  
 卒と箱將感にに考この危難孤よににる見事

道 本 二 三 四 五 六 七 八 九 十

4

結末下級海に在る餘餘を世之、その中につい  
 中しに失念し、今更にはむりやうた、下級の  
 古九種の中かく之を我見し、せめて先をよむ  
 りと見お見かけしては笑ふ事あることを得ず  
 如何んせむ<sup>(上)</sup>の本情をあらわすことあり  
 又、東結の中道を作るしといふやうな  
 技巧的なものは現代人には丸きり解つて  
 くる人があるまい、之を何とせん、その言の  
 深かった明治時代の人の畑で、おれは、  
 私を著せ、おれは、おれは、おれは、おれは、  
 略歴を略

と其まのこ、とう人、  
 棒と箱將意にに考この危難孤よにる見事



んを。山陰の山。山陽論と比較し、同い物  
もろのなぬまは依り此位遠しかと感し  
た。  
霧の山のゆるい決し悪い物もあつせん。たか  
あんなをまきり。山今のまはゆるく、又時た  
おそかつた故ははたせしませう、

はかり書に。古雑誌「茶前茶後」お送り致し

九月十九日  
かきおくり

市嶋 せんせい

江馬細香の唐嶋松下の詩は、懐立上君在舟の意か、令  
りかき。細香かよつ帰るちらと夢ろ反對下は略し種せう  
か、の陽が出汗に立つてゐるさうと思ふますが、如何にせう、  
（おかげで）

お宝まのし。とつ人 柿上船將殿に。考この危難私よに寄る事



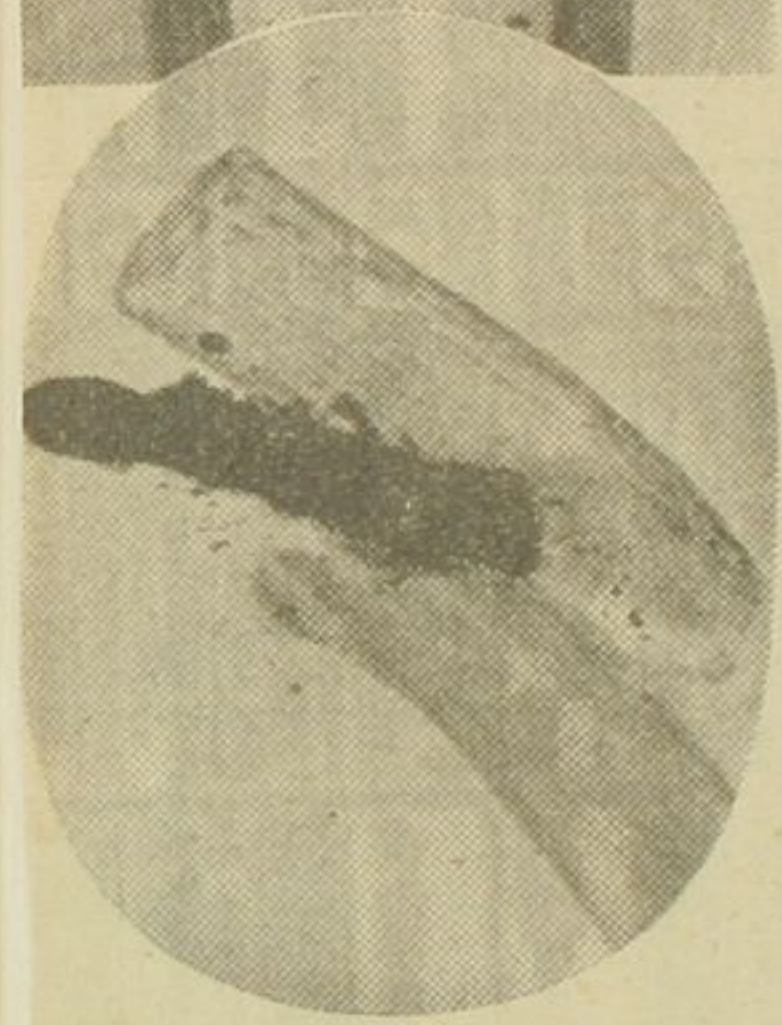
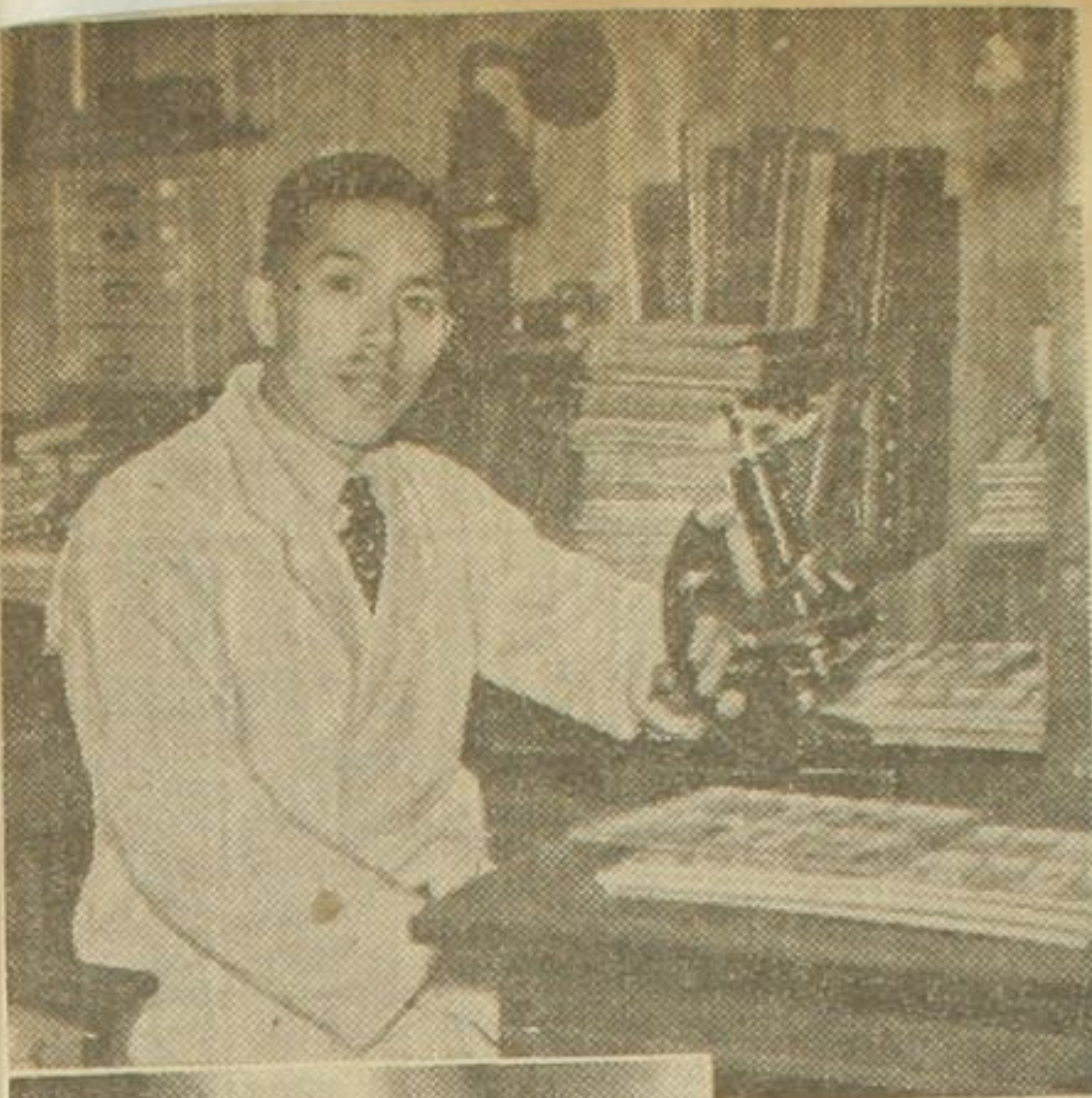
# 肉體は弾丸を食ふ!

## 戦争醫學の新発見「留弾周圍現象」

### 郷博士の貴重な研究

支那事變の勃発によりわが戦争醫學の進歩は目ざましいものがあるが、その戦争醫學の一研究として日本赤十字醫院病理部の郷光太郎博士が、敵陣営に敵軍中の數十人の白衣の勇士について臨時的に研究した結果、「留弾周圍組織の組織學的所見に

ついて」と題して來月四、五、六の三日間にわたつて岡山醫大で報告される第廿九回日本病理學會總會の席上で報告することになった、郷博士の貴重なこの報告は事變下の命懸けとして各方面の多大の注目を惹いてゐる。



およそ人間の肉體内に侵入した弾物の變化を受け、體はその弾片に對してある種の反應を呈することが留るとが多く、留弾破片や小銃弾などが留るとして十數年に亘つて體内に留まつた例も少なくない、しかし留弾自身は體内で多少の變化を受け、體はその弾片に對してある種の反應を呈することが

部分にレントゲンや肉眼で発見出来ないやうな小弾片が無数に留つてゐることを認めた。弾丸は鐵、鉛、銅から造られてゐるので要品染色によりどの金屬が最も多く體内に留るかを組織學的に調べたところ四十一例中鐵が十八例で最も多く、鉛が十五例、銅と鉛の混入が七例、銅を主とするのは僅か一例、これを金屬的特質がいかに周囲に變化を及ぼすかを金屬別的に組織學的に検査したところ弾片が體内に入

本発端の學問争戦るかに室究研は眞實  
彈砲たし中命に部則即右(中)=士博郷  
彈銃銃機たつさ刺き突に骨胸(下)片破

東京... 大阪... 京都... 名古屋... 神戸... 横濱... 仙台... 札幌... 函館... 旭川... 釧路... 帯広... 青森... 岩手... 秋田... 山形... 宮城... 福島... 茨城... 栃木... 群馬... 埼玉... 千葉... 東京都... 神奈川... 新潟... 富山... 石川... 福井... 山梨... 長野... 岐阜... 愛知... 三重... 滋賀... 京都府... 大阪府... 和歌山... 奈良... 徳島... 香川... 高松... 愛媛... 高知... 福岡... 佐賀... 熊本... 大分... 宮崎... 鹿児島... 沖縄... 各都府県... 支那... 南洋...

春城の筆  
餘生の哉

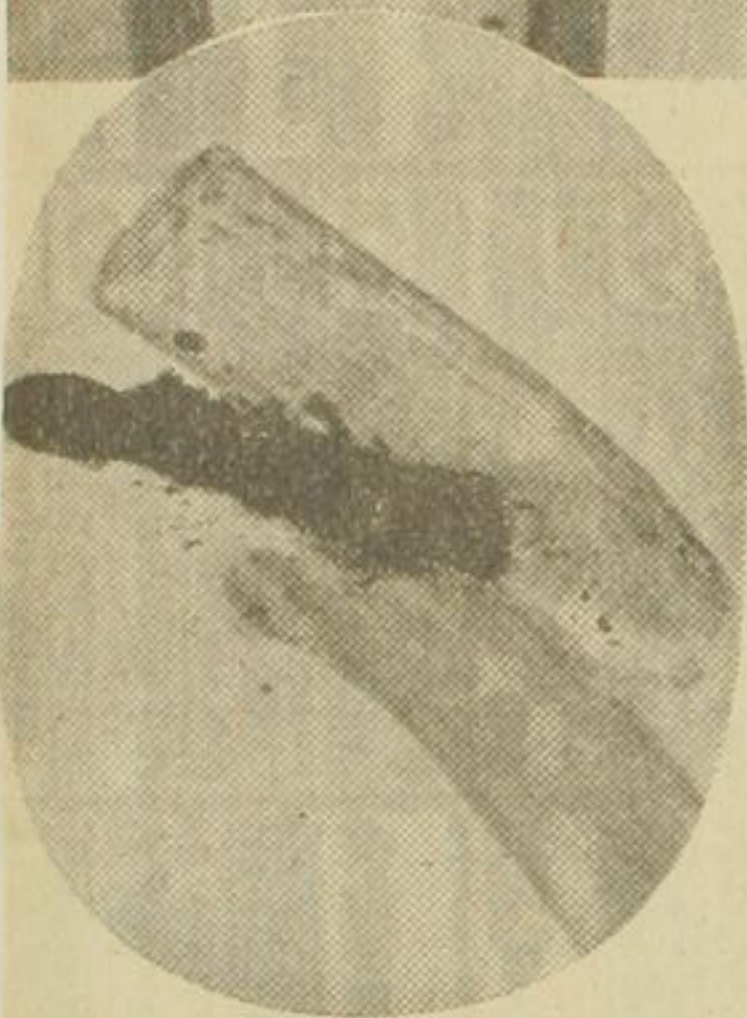
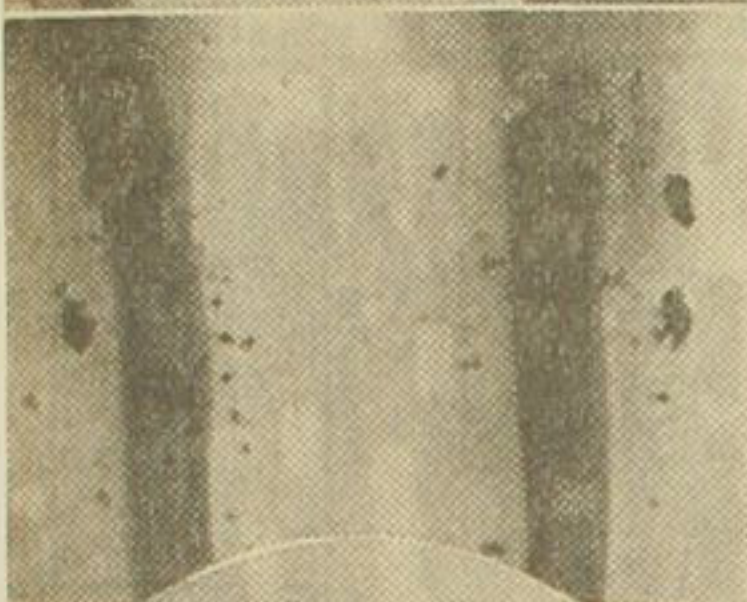
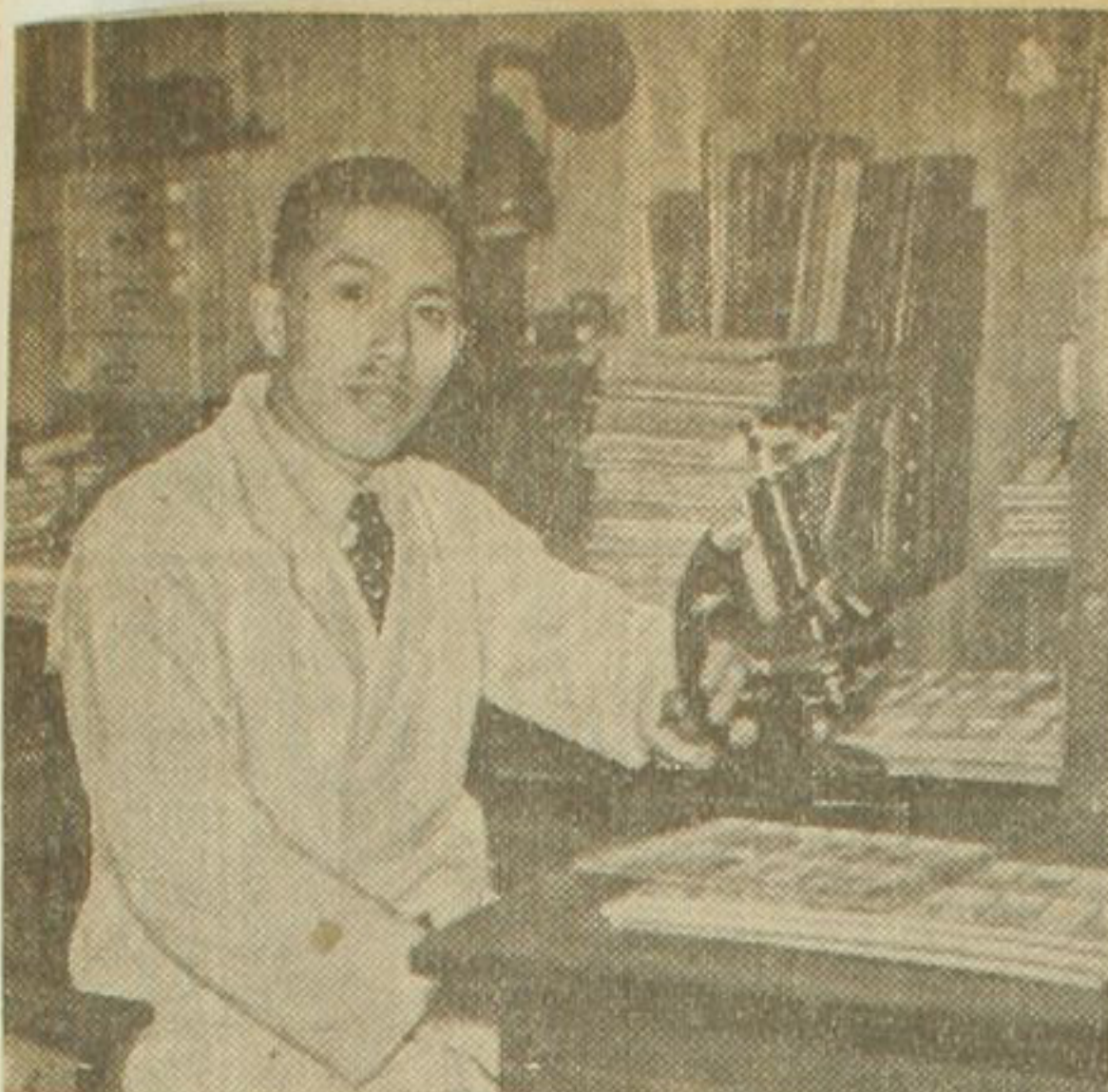
富山房版

# 肉體は彈丸を食ふ!

## 戦争醫學の新発見「留彈周圍現象」

### 郷博士の貴重な研究

支那事變の勃發によりてわが戦争醫學の進歩は目ざましいものがあるが、その戦争醫學の一研究として日本赤十字病院病理部郷博士が、同病院に收容中の數十人の白衣の勇士について臨床的に研究した結果を「留彈周圍組織の組織學的所見」に多大の注目を惹いてゐる。



およそ人間の肉體内に侵入した異物は無害である場合は留彈なく残留するものが多く、留彈破片や小銃弾などが留彈周囲として十數年に亘つて體内に留まつた例も少なくない、しかし留彈自身は體内で多少の變化を受け、體はその彈片に對してある種の反應を呈することが察せられるところから郷博士は戦傷勇士から抽出した不良肉芽や切斷物六十五例を組織學的に組織を檢查したところ、彈片が體内に入

ると、その彈片に對してある種の反應を呈することが察せられるところから郷博士は戦傷勇士から抽出した不良肉芽や切斷物六十五例を組織學的に組織を檢查したところ、彈片が體内に入

部分にレントゲンや肉眼で發見出来ないやうな小銃弾片が無數に留つてゐることを認め、彈丸は鐵、鉛、銅から造られてゐるので、色素色によりどの金屬が最も多く體内に留るかを組織學的に調べたところ四十一例中鐵が十八例で最も多く、鉛が十五例、銅と鉛の混入が七例、銅を含むものは僅か一例、それで金屬性質がいかに周圍に變化を及ぼすかを金屬別に組織を檢查したところ、彈片が體内に入

本兒那の學醫爭戰るおに室究研は眞真  
彈砲たし中命に部脚右(中)＝士博郷  
彈銃調候たつさ刺き突に骨胸(下)片破

つた當初は出血が起るが次に小圓形細胞が彈片の周圍に集まつて來る、そして面白いことには更にアミープ状態をして異物を食ふ大形の巨噬細胞が生じて小銃片を食つてまた何れかへを消してしまふ、またこれと共に破片は體液によつて周圍に重量づつ溶かされる、これは多く見られる次に結核式纖維化が起つて彈片を包んでしまふ(これは鉛の割合多く見られる)、また纖維化が強い場合には壓力の少い皮膚面に押し出してしまふともある(これは鐵の割合多く見られる)、といふのであつて、彈片の割合と鉛片の割合とを比べると、鉛片の割合は小圓形細胞の浸潤ならびに巨噬細胞の割合が起ることが多く鉛の割合には纖維



「私が抽出したのは早いので彈片が入つてから七十八日目遅いので三百七十四日目でした、彈片が體内に入り込むとこれを食ふ巨噬細胞が出來たり體液で溶解したりまた纖維によつて體外に押し出したり更に鉛のやうな中毒物が入ると周圍に纖維が出來て毒を散らさないためコンクリートのやうに固めてしまつたりして肉體を保護するので、ですから支那軍の甲性なダメージに對したとしてもその大量を抽出すればさう心配することはないのです、實際血液検査をして見てもわかる通り微量なものは全身状態には影響がないといつてよいでせう」

ハントックスは細菌の毒

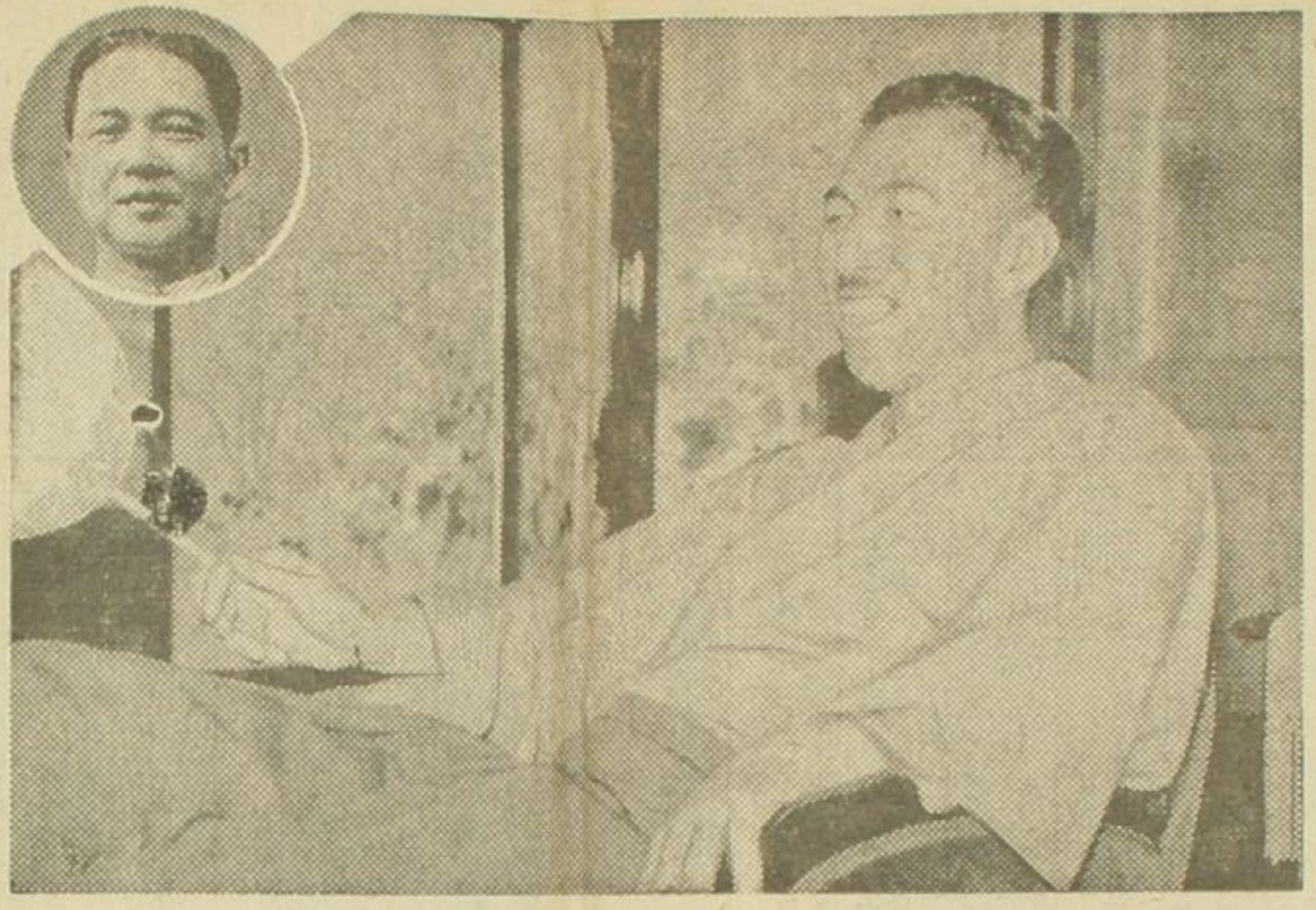
春城 活筆

# 近衛公が語る汪兆銘氏

## 筆談・東亞の大計

### 二十年前と少しも變らぬ温容

### 今夏落合別邸で會談



語る近衛公と汪兆銘氏 (圓内)

事變處理を政策の中核とする師部内閣の成立、支那派遣軍總司令部の設置と我が新東亞建設の巨歩は力強く進められ、また南京では汪兆銘氏を中心とする新支那中央政府の樹立運動が急速に進展、皇軍の参加も傳へられてゐるが、この時に當り汪兆銘氏を偲んで一しは感慨を新たにしている人に、權相近衛文相公がある。今夏六月かゝつて重慶の抗戰陣營と離れし和本國國運に献身してゐた汪兆銘氏は突如我國に來朝、平沼首相(當時)以下我が政府當局者とひそかに會見を遂げた、この時汪氏の訪問をうけた一人が近衛公一さきに首相として所謂「近衛聲明」を詔した當の公とその聲明に應へて起ち上つた汪氏とは親しく膝を交へて會談、胸襟を開いて東洋平和の道に一つの道標をうち建てた、その想出があるからだ、去る六月八日流傳島下落合一ノ四三七の近衛公別邸に、白賀、柔和左面等に選んだ見聞と懇々の懇談をひそめ、長身を瀟灑な紳士の青嵐に包んだ汪兆銘氏が門を叩いたのは午後三時ごろだつた、公は直隷軍の間に招き入れて會見した、まづ挨拶、ついで汪氏の重慶脱出の模様、同志會仲鳴の最期の模様等が通譯を介して物語られたのち他の者を退けて主役二人が水入らずで對等、支那語のわからない近衛公と日本語の殆ど話さない汪氏のために筆談が取り上げられかくて同三時半頃から筆談が始まつた、汪氏は驚くべき巧な筆字で致國の至情を書き綴つた、近衛公もまた墨海辭やかに平和の主義を紙に語つた、そして紙上に肝膽相照すること前後實に三時間半、同七時ごろ漸く筆談を終り一同支那料理の卓に酒を酌んで談笑、夜九時ごろ飽かぬ快を分つたのであつた、それから三ヶ月余、近衛公が語る汪兆銘氏は――

初めて會つたのはペリの講和會議の時だつた、もう二十年も昔の話だが當時私は西園寺公の隨員として滬寧中だつた

**確か** ペリの公國の何とかいふレストランだつたと思ふ、向ふは五、六人連れ、こちらは一、三人連れ、一様に餐食をして半日近くも話し合つたのだつたが、その中であの人だけが何か記憶から消え去らうとした、やつぱりどこか異色があつたのだらう、この會つたのが二回なのだが、二十年前と一寸も變つてゐないのたまづ驚いた、若く見えた、まるで三十代の青年のやうに……それから、張作霖もさうだつたが、あの人も色が白くて男で、見たところ女のやうだ、話をしてゐても暖かいやさしい聲で、手を揉んだりして、まるで聲かんでゐるやう、永く革命に臨へられ大それたことをやる人とは決して見えない、所謂英雄豪傑等とは全く違つたタイプだ

人を選ばずして筆談をやつた、文字だけは共通だから立派に意思が通じる、話の内容は詳しくは言へぬが、汪兆銘はうまい字で

日支關係を和平に導かねばならぬといふことは共產黨以外の重慶の要人の一致した考へだ、要人の大部分は自分の同志だと言つても良いから、然し彼等は物を言ふ自由を持たない、とも言つた、そして自分の抱懐するところを語り重慶の内情を語り蔣介石を批判した、また汪がその衣鉢を繼いでゐる孫文の大亞細亞主義を説き

日支間の關係がこんなことになつたのは孫文先生の意思に反したことで、此上もなく残念だと言つて涙ぐみ、ハンカチを出して眼を拭いたこともあつた

**筆談** が終つてから夕食をべた、酒も日本酒を一本ぐらゐら平けたと思ふ、とにかく血色も良いし非常に元氣だつたと思ふ

共にしたが「肺病で砂糖を一切喰べぬ」といふ話だつたので砂糖抜き支那料理を出したら良くて

ると語が起つてゐたらうか、日一海軍の共同宣言を見たが、國臣一これて前線の兵をも大膽に動か

# 古老の話



## 荒井芳次郎爺談

経歴は話中であり、本年八十三歳、頑健老を知らざるものゝ如し、但視力のみ意に任せざること、亦話中に見えたり。

私は安政四年の生です。例の大地震が二年ですから、それから二年たつて生れたわけです。生れたのは永代の側の川端で、今では町名が變つて新川一丁目、二丁目になつてゐますが、靈岸橋を渡ると四百戸ばかりの町がある。南新堀一丁目二丁目、富嶋町、濱町、四日市町、鹽町、大川端、もとはこれだけあつたのです。

酒問屋のあつたのは新川、茅場町、新堀と此の三場所です。以前は二十五軒あつたが、今は十二三軒位のものでせう。鹿嶋清兵衛といふのが一番大きい店でしたが、今は商賣をやめて、地所家作で立派にやつてゐます。沖から酒が來ますと、小さい舟でそれを兩方へ取分け、店へ持つて行つてころがし上げるのです。酒は皆上方から來る。

ので、新酒が出來ると、それを船に積んで、並んで帆で走つて來る。その一番先に東京へ乗込んだのを、新酒の一番と云ひます。その船の者が陸へ來て、赤い襦袢を着て踊つてゐるうちに、船はカラになる。この一番の酒は、あとから上つても先へ積むことになつてゐました。

永代のところに井上といふ問屋がありました。こゝへ最初に船を下したのが一番です。船は傳馬と云つて細長いやつですが、それに載つて品川から太鼓をたゝいてやつて來るのです。

酒を下してしまふと、船の者は佝の住吉様へ、やはり赤い襦袢を着て、傳馬で御參りに行きます。その時は上に立つた若い衆が權を振廻して行きました。

酒屋では著いた順に三番まで、賣場に札を下げました。札は下つても、踊るのは一番きりです。

新に著いたお酒は御燗して飲むんぢやない。冷でやつて値をきめるのです。値がきまつてしまへば、御燗して御客に御馳走しますがね。最初は茶碗で利いて、鹽梅を見るだけです。船が著くと大きな杭に帆を結へつけて、船頭だけ問屋へ上る。若い衆は泊りつけの宿がありました。

沖へ來るのは大きな船です。三十六反の帆ですから桁が太い柱は立てつきりで、綱が四本ついてゐる。屋形と云つて屋根が出來てゐるんですが、その兩方に綱が二本づつ渡るわけです。中の轆轤に椗の木の棒を挿して、それにつかまつて、えんや／＼と云つて帆を巻きます。さういふ船が百駄。二百本から酒を積んで、幾杯も入つて來る。船には一々名があつて、舳のところに角福とか、劍酢漿とか山上とかいふ風にいろ／＼な印がついてゐます。上には苦で屋根が葺いてあるし、兩側も垣根のやうにして、雨が來ても濡れないやうにしてあります。

私が新川で働いたのは二十二三の時からです。本當の親仁は山田仙之助と云つて、大川端に古くゐた家ですが、何しろ子供がしつかりあつたものだから、荒井といふ家で一人うちへくれないかと云ふ。それで貰はれたのです。河岸ッ端で船商賣の家が並んでゐるし、子供の時から船は好でしたが、本當に仕事をはじめたのは二十二三からです。

江戸社來の近刊に新川の  
 春日時代を誇る昔にぬ  
 つても、新川の古時流の  
 食産があらたが、ちやうど  
 九又蕨の櫛が入り切ら  
 い時の米人長を一時借りて入  
 んどと誇られぬ、此の酒は  
 昔の若い頃の酒の味  
 代り、樽の品川沖、昔の  
 とを、舟の棹、舟の棹、入  
 り、赤い襦袢を着て踊  
 つた、酒を下すと、赤い襦袢

傳馬の御の住ま神社の太坊にたよるよ

三人の化物を出した宋家

—お藤元の重慶で流行の唄—

此の頃重慶でこんな唄が流行つてゐる。  
 宋家出三妖 麗粉迷當朝  
 君臣裙下醉 國土化成焦  
 此の意味は「宋家は三人の化物を出した。脂粉を以て當局を迷はせ、蒋介石も役人も皆その裙下に酔ひしれて、國土はいつしか焦土となつて了ふ」といふ、支那一流の痛烈な諷刺である。宋家三妖とは、宋慶齡（孫文未亡人）宋霽齡（孔祥熙夫人）宋美齡（蒋介石夫人）のことである。こゝらが文字通りの「傾國の美人」といふところであらう。

獨ソ不可侵協定

樽 太 鼓

世界中に毒薬を蒔いてはく笑み不可侵。不可思議。オカシナ事になり腕前がダンチと涼しい顔に向け「お宅へも仁義しますとお世辭云ひ防共を逆さまに行けば狂暴か

時局川柳

今 太 閏

獨ソ不可侵條約  
 毒素をば互に吹き出し赤い舌あてにせるひとの禿穴があき  
 日英會談のお流  
 勝星を日本が取つて引き分れ  
 原則は怪談となつて尻がきえ  
 天津地方の水害  
 水までが租界封鎖を手傳へり  
 陳銘樞の出馬説  
 重慶のかこみ飛び出す蝗かな  
 歐洲對岸の火災  
 飛火せぬ内にしなをば始末せよ

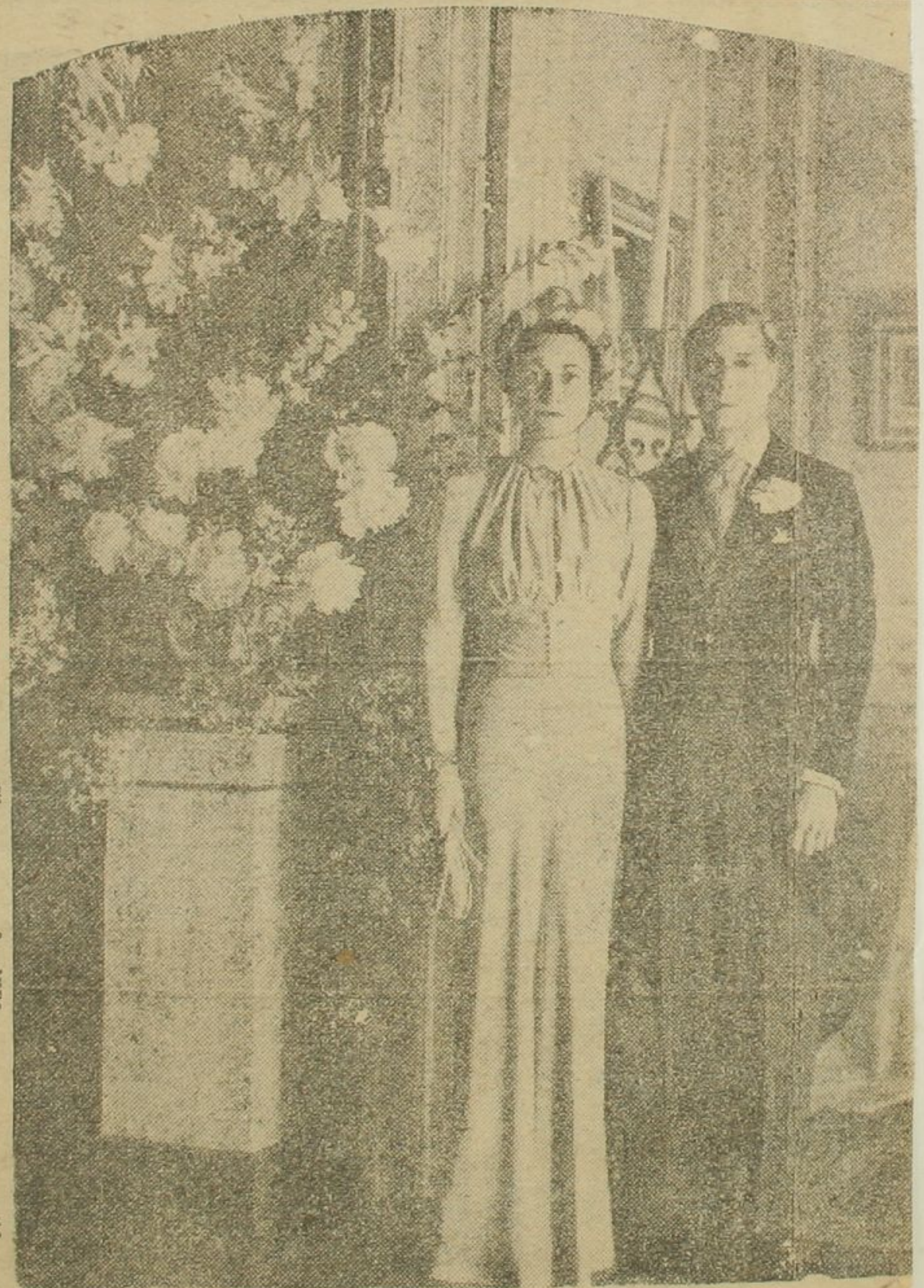
團子

篠田鐵造

△ヨマ出獄土産の樂り  
 市島謙吉、竹村良貞兩氏とも現代現存の名士長老であるが、この時代は共に新聞記者の盛出で、面白半分は海軍の新聞「高田新聞」を経営し、紙上にニュースを流つてゐたのだが、市島謙吉は社長で、竹村謙吉は印刷長であつた。ところが、誌上に「出獄土産」といふを掲載して、檢察官傳辱に問はれた。  
 出獄土産と題し、高田自由黨員宮澤喜文治氏の語を連日記載し高田新聞の社長市島謙吉、編輯長新田忠誠、印刷長竹村良貞の三氏は檢察官の職務に對し、侮辱せし者と判定され各重懲罰六ヶ月に處し、罰金卅圓づゝを附する旨去十五日（廿六年六月）宣告ありしが、市島、竹村の兩氏は不當なりとて即日上告せられし由  
 とはいへば、泣く子と檢察官には勝てず、入獄となつて、兩氏はモッコを頻りに、竹村氏非力腰が切れず、「相棒のヘナク」に困つた」と、市島謙吉の回顧談の語。  
 正誤（一）「出獄土産の樂り」中、去る十五日（廿六年六月）とあるは（十六年六月）の誤り、又

ウインザー公夫妻歸國

妻のスポークスマンは七日御夫妻の今後の計畫について左の如く語つた  
 ウインザー公御夫妻は八日歸國遊はられる事となつた、歸國の上はウインザー公は直ちに重要軍務に服せられる由で夫人も又赤十字勲志者歸婦として僱傭兵の看護に當らせられる筈である（寫眞はウインザー公夫妻）



口畑後、三根山藩。自分の家が傲れかあつても、先考の時におくを  
行つたことかある。まゝに北藩に金を貸すの關係であつた。あめと  
思ふ、自分の家なく成る家。嫁に北藩の士。あつた。丹兵衛。嫁  
に北藩で、自分のあつた。三根山から、近頃の女子が三人。早くて  
まゝに北藩に。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

何ぞおびくことしやうふれ又  
城址と云ふ所はいふまでも  
うつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。  
あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。あつた。

この間、講演の爲に私は初めて峰岡村へ行つて見たが、中々気分がいい土地で、流石は長岡藩主がわが子を分家するに最適の場所と選んだ土地だけであると直観した。峰岡に對する長岡人一般の知識は貧弱だが、現在の長岡の興隆と人物の輩出を語る場合に明治三年に三根山藩から百俵の米を戦敗長岡藩疲弊の見舞として贈られたことを忘るゝ者は無い。實に此の百俵の米によつて分家の峰岡は本家の長岡人に永遠に感謝し親愛せらるゝことになつて居る。

筆記すべき佳話だから、こゝにも此の米の話を書くが、戊辰の戦に破れた長岡藩士の生きのこりが戦ひ止んで仙臺から歸つた時には、城も我が家も焼き拂はれてしまつて、荒



寥たる焼石焼瓦の上に寒雪がふり、暗澹たる風物には全く斷腸の思ひであつた。尋ねる家族は 大分流離してしまひ、全く途方に暮れざるを得なかつた。此の家なく 食無く 貧窮困態の裡にも 明治二年の五月には國漢學校を立てた。校長は病翁 小林虎三郎先生であつた。峰岡からの見舞米百俵を迎へて舊藩士連が嘆願し強要し噴霧した時に、「食はれねばこそ教育するのである」と喝破し、「今日食はれぬと云うて子弟の教育を怠つたら、永久に食はれぬ境遇を脱することは出来ないではないか。將來の大計を考へて 此の米は學校に使はう」と断々乎として、頑張り通した。病翁先生はかつて象山門下の二虎として、長州の吉田松陰と並び稱せられ、象山先生からその愛兒の教育を托されただけでも偉人たることは察せられるが、峰岡からの百俵がもとで 學校は新築され、必要な書籍と器械は購入されたのである。今の長岡、將來の長岡を思ふ者は 此の峰岡藩からの百俵米の佳話を忘るべきでなく、以て子孫に傳へ、以つて天下に傳ふべき貴い教訓である。

とは氣品が違ふ。

今は峰岡、昔は三根山、どうしてと村長の荒井國造さんにうかゞふと「この小高い所が三箇所あつて、それを押しならし開墾して城地を開いたから三根山と名づけたと言はれて居ます。」では峰岡といふ名はとまきくことは忘れて、私の目はもう四邊を追うて居た。舊藩の家屋敷が昔の規格のまま、でぼつ／＼存在して居るのが床しい。昔の學問所と武道所の跡が小學校で、殿様のお屋敷跡が小學校の運動場から公園となり、開藩三百年記念碑は白く高くきちんと青樹青草の中に立つてゐるし、下に記念館があり、之等がまことにあるべき所に在るから、見ても氣持がいい。角田山の集約造林たる杉林の深緑が實に美しく、壯大な背景を成した運動場の中に白い山羊が一匹靜かにゐた。此の山羊も亦在るべき所に在るといふ感じである。さて、此の在るべき所に在るなあと感心したことに村長としての荒井國造さんが在る。前村長 中村富次郎さんが在る。この村に来て此のお二人から史料をきき、治績をきき、徳風をなつかしみ、このお二人がこの村に生れて相次いで、共に長く村の學校の校長を勤められ、又、村長をもつとめらるゝと聞いては、村の人物の配置が洵に在る可き處に 在ると思はれた。この村の正しい發展の原動力は此の如く物質をして 人物をして在る可き所に在らしむるからだ。それが峰岡のいゝ點だと言ふやうなことに思ひ耽つたのであつた。



口上

此間奉懸

御書勞小老母腰折共垂曲御教示御正考  
被下何より難有か王於小生も身感感荷仕  
小其後以任御礼謝も不申上忍入小然  
今日懸意之方家内とも招小二百舞妓  
少々召寄可申小失礼如何敷御意も得御心  
安ニ任セ申上試小萬一御手透ニ被為在  
且御退屈之節杯御座小御座候立  
寄被下ましく也老母心付小而申上小程

申付小家内之申も皆々不俗物共ニ御座候小名  
春琴方たのむ申小御来臨被下候小皆々  
喜可申小餘不盡 頓首

四月廿六日

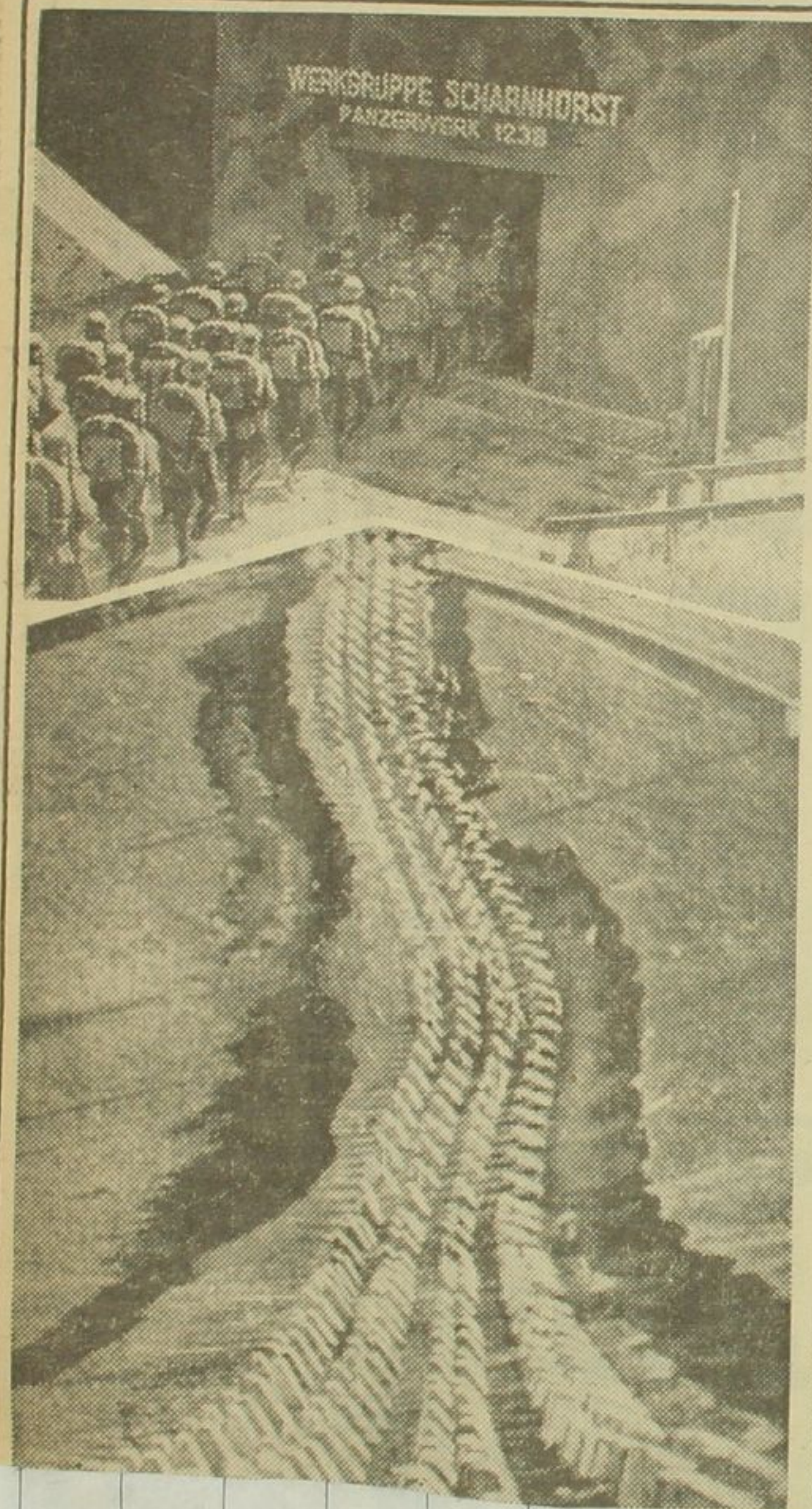
尚々 御惠集 ~~御~~ 申上小御座候小  
よろしく御座候小

香川長別

侍侍史

頼徳太郎

拜具



ダンラ  
ベルギー

ガルパンのフ  
地 突破 卓

ジークフリート要  
塞圖 〓 喜慶は 〓 同要塞  
に入るドイツ軍(下) 對戰車  
防禦施設

法學博士  
立作太郎 著 七 菊判上製六六二  
送定價五・五〇  
送料 〓 二二  
國際法の補綴たる著者は、本書に於て世界大  
戰に依つて生じた新判例、條約協定等を収録  
しつつ、國際間に現はれた新動向を捉へ、學  
說・思潮の發展の跡を説明して、博引傍證厚  
利なる理論を展開してゐる。第二次歐洲大戦  
勃發の今日、國際關係の明日の動向と戰時法  
規の新たる意義を豊かに示す名著である。

日本工業協會編 三 第 〓 卷一・〇〇  
送定各册 〓 二〇〇  
本叢書は伍草草雄氏を會長とする日本工業協  
會が朝野の専門權威者實際家を網羅し戰時に  
於ける工業生産のあるべき態様に就いて論述  
せる所を編輯したもの、戰時生産力の擴充、  
軍需品の調達問題、物資の供給、戦時下の勞  
働問題等、廣くその全般に亘る。第一卷戰爭  
と工業、第二卷物資動員、第三卷戰爭と労働

川合能大令榮多傳士も毎日鞍山陽の協考を頼ま  
ん改二十数回に及ぶその鞍山陽と特産物の運  
送者、右の宮一(九月七)

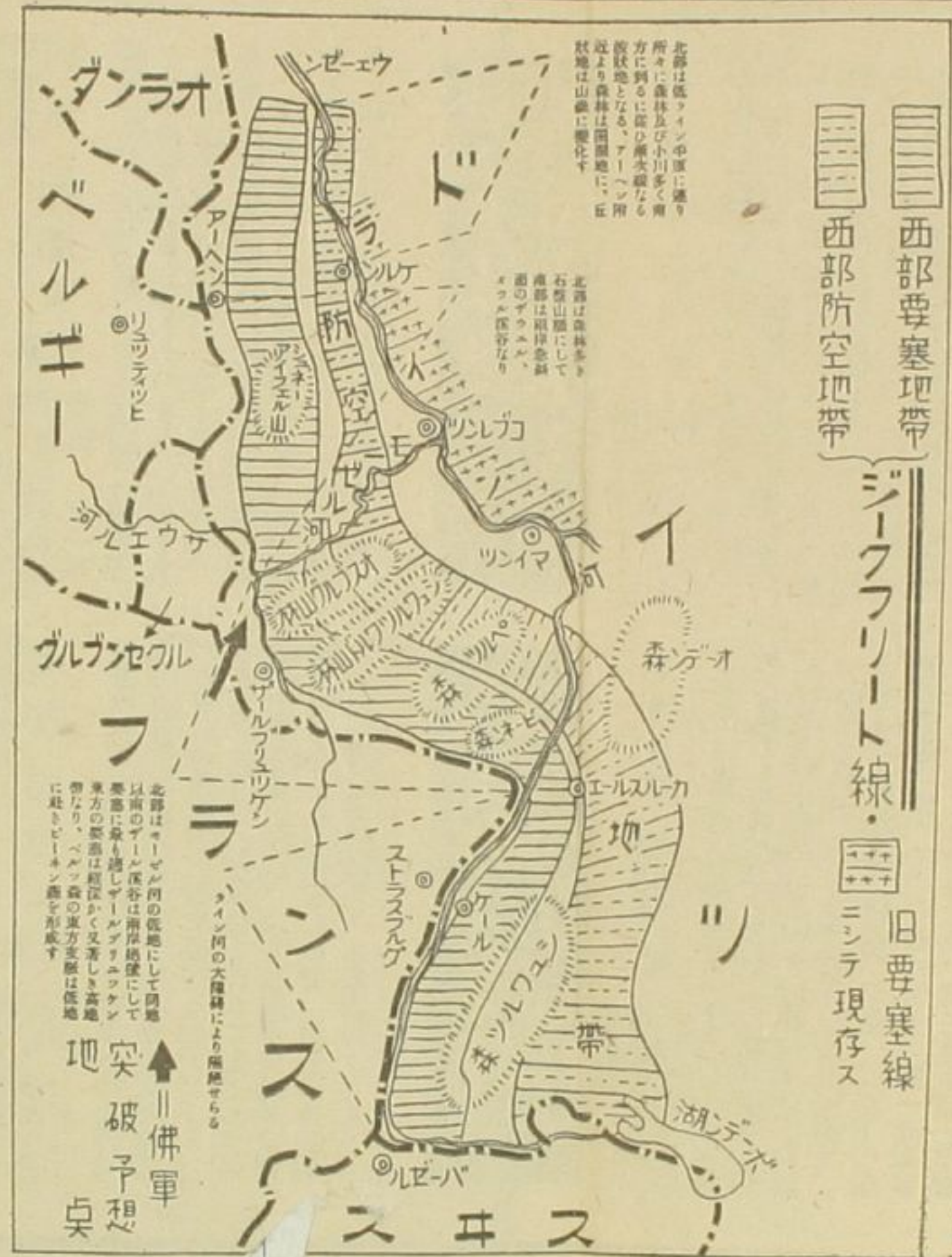
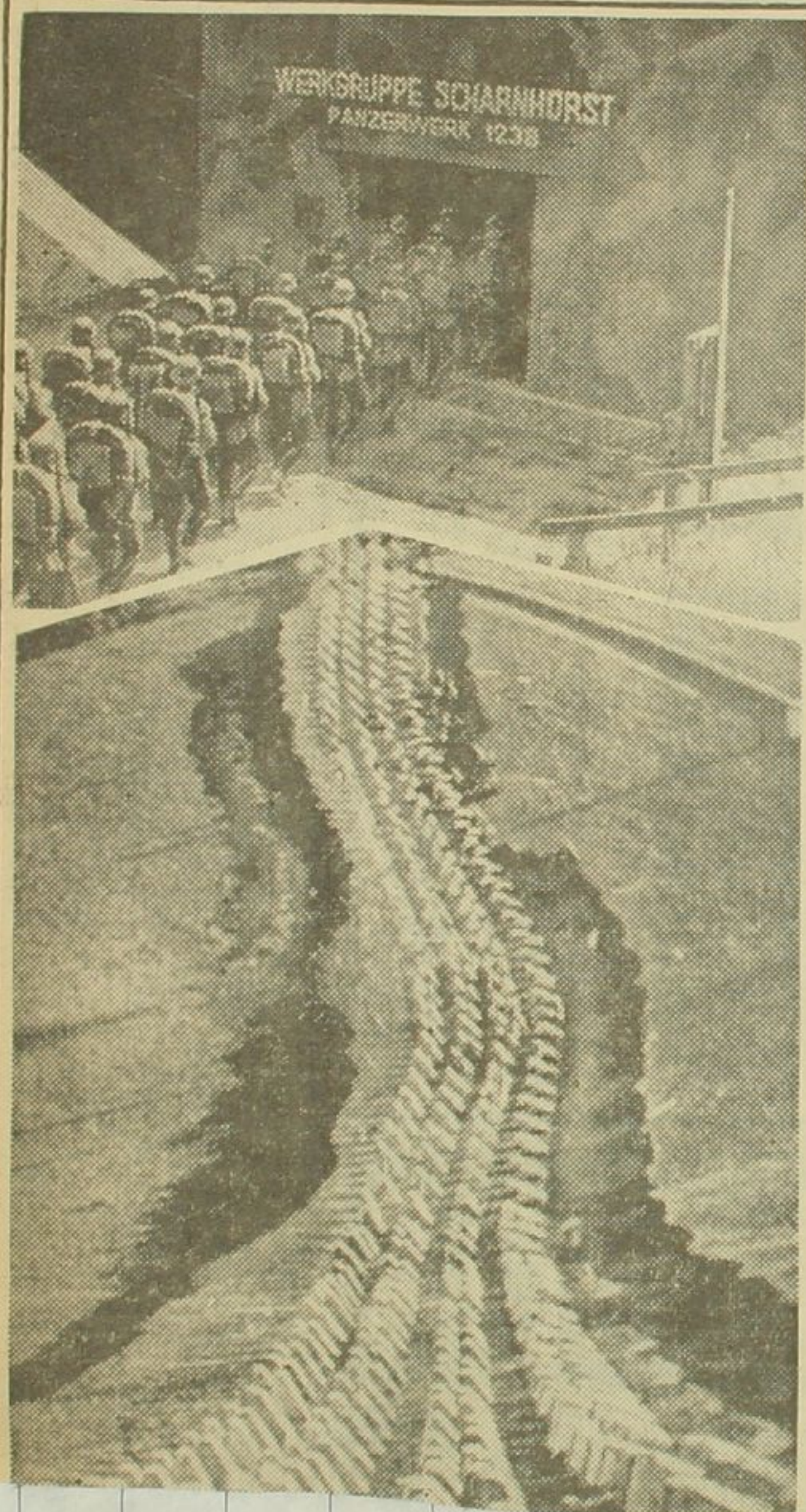
漢字

日七月九日新京東

(可認物便郵種三第)

號一十九百千九萬一第

圖



ジークフリート要  
塞圖(上)は(上)回要塞  
に入るドイツ軍(下)對戦車  
防壁施設

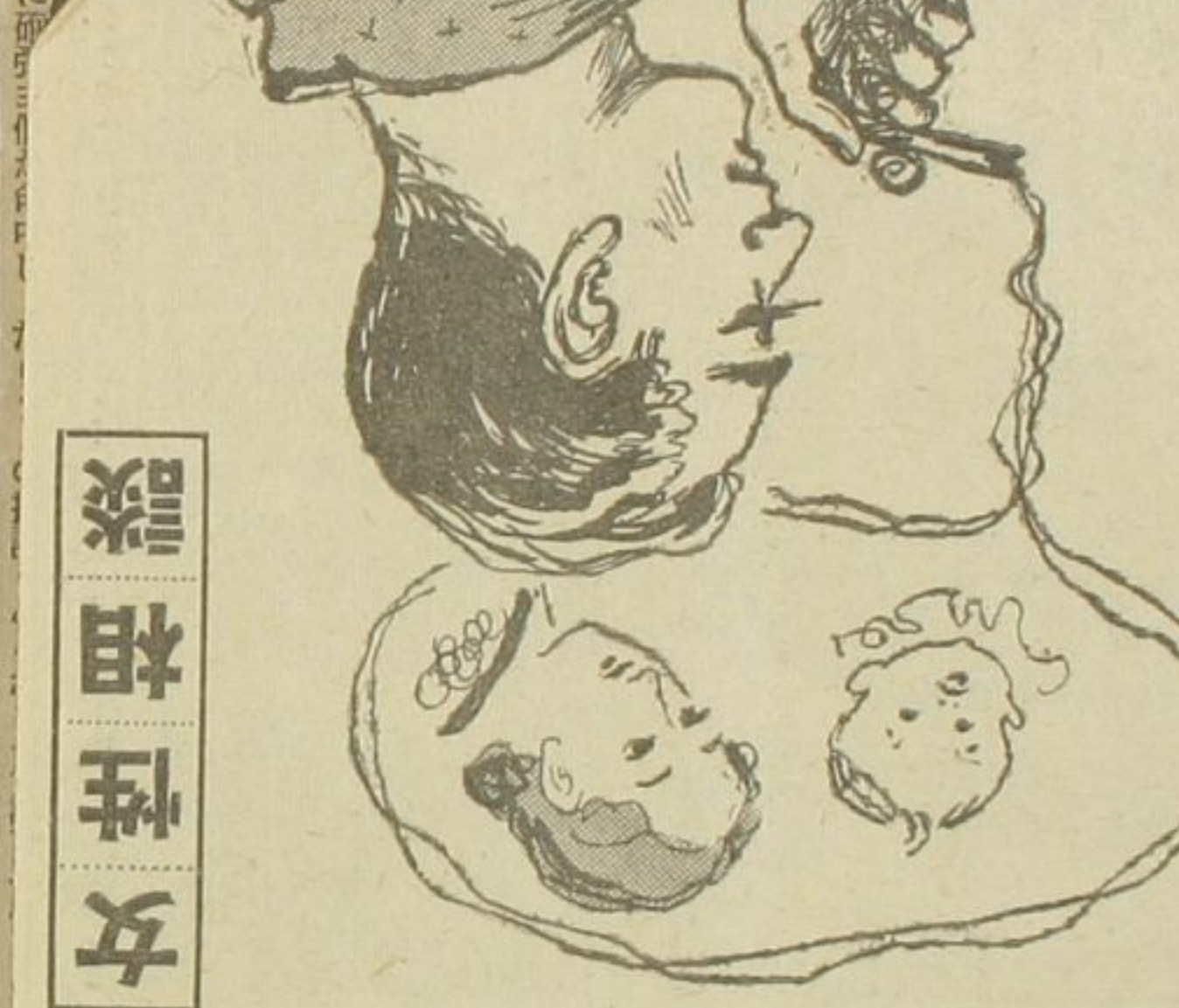
川合尾大々榮多倚士も毎々鞍山陽の術考を頼ま  
ん改に二十数回に及ぶその赤山陽と特産の物の運  
搬者、右の官一(一)也(九月七)

東京

# マジノ線

マジノ線は一九三〇年から工事に着手し一九三四年完成したもので、總工費廿九億フラン、陸軍百餘のベタン元帥、スプネー大將等の計畫によるもので、當時の大將相アンドレ・マジノ將軍に因んで命名された、構築の時期は最初から東南方ローレン州のヴォーグユ山脈に至るもの、次いでライン河に沿ひスイス國境に至るもの、更に東北部のベルギー國境に沿ひてリールの先きまで至るものと三段に分かれてゐた、この延長約三百五十キロ、主力を注いだのは何れも、ドイツの國境に直接面してゐる。

代つてお質ね  
病苦を歎く新妻



注意  
白  
三田島  
（163）

# 西部要塞戦では死闘 血と科學の爭覇戦

## 深刻！ 歐洲第二次大戰

英國のドイツに對する宣戰布告によつてヨーロッパは大戦終結後僅に廿一年にして再び全歐をあげての動亂の坩堝と化した、大戦以來の戰爭科學の驚くべき發達は航空機性能の著るしき進歩、機械化兵器の發明と躍進、これに伴ふ要塞構築術の一新を生み、大戦の勃發は曾て無き

**劇烈** なる戰爭を豫想せしめ、歐洲大戦とは全く様相を一變した深刻な激戦が展開されんとしてゐる、イタリアの態度は三日々現在では中立か参戦か、尙斷斷し得ざる、一種複雑なる姿勢にあるが、この春の獨伊軍事同盟の締結から推し、英佛參戰の今日においては、イタリアの参戰は、最早、時日の問題と見られる、若しイタ

リア把たば、と言ふ假定の下に獨伊對英佛の軍事的實力を比較する場合、三つの特性が明確に指摘される。

**第一** は獨伊の航空機が英佛のこれを斷然壓倒的に凌駕すること

**第二** 海軍力は、英佛が昔の傳統のまま、英軍とは逆に獨伊を遙かに壓倒してゐること

**第三** 獨佛國境の西部戰線においてフランスの強靱なマジノ要塞線の完成とこれに拮抗するナチ政權のジグフリード要塞線の完成によつて、地上戰線はここに歐洲大戦當時のヴェルダン要塞の戰線以上に深刻な要塞の攻防戦が展開されるであらうことである。

比較 すれば、ドイツの常設師團數は平時五十萬師、動員師團數九十萬師、最大動員能力は百二十萬師、至百三十萬師、ドイツ陸軍は一九三七年十月迄に豫備兵制を布いたため現在またその編成を完成せず、従つてドイツ陸軍の戦線は豫備兵の少數といふ一點である、イタリアの陸軍は平時師團數四十五萬師、最大動員能力百五十萬師であつて、ドイツに比しや、陸軍兵力は最少で約三分の二の兵力と言へる、然しこの獨伊聯合軍に比して英佛聯合軍の勢力はより劣勢と見られる、即ち英國は現在十九萬師、獨伊聯合軍は増加し得る末には約卅萬師に増加し得る計畫となつてゐた、歐洲大戦當時

イギリスが印度その他の植民地から派遣した軍隊は夥しき數に上つたが、獨伊の壓倒的航空勢力のため、ロンドンから地中海、スエズ運河を経て印度に至るインペリアル・ラインも果して歐洲

**大戦** 當時の安全性を今回もよく保ち得るかどうか疑問である、線となり得るかどうか疑問である、と言へよう、佛國の陸軍は、師團數は平時師團數二十萬師、植民地軍約五十萬師で、師團實力から言つてドイツと同等程度の實力、獨伊の比較は二對一、ドイツの優勢であるから、綜合して、獨伊聯合軍の方が若干優勢と云ひ得る、轉じて空軍勢力の比較となると、獨伊の優勢は最早疑ふべからざる程、壓倒的である、一方は遙に優

**空襲** は、大戦當時のツェッペリン空襲にも見られる如くそれは作戦として容易ではあらうが一方立埒を獲へて英國側からの守備となると戰術的にも極めて困難で先づオランダあたりに監視所を設置して見張る外なく、空襲下のロンドンの恐怖戰慄は恐らく空前であらう、一方また、英佛の如き大植民國家は食糧、武器を海外の植民地、アメリカその他に仰がねばならぬが、歐洲大戦當時、地中海その他で數隻の潜水艦に取つかはれればは合はされた英國としては、こゝに恐怖すべき空中封鎖を受けるとなる、然し、空軍は如何

# マジノとジグフリード

今度の歐洲大戦で英、佛、波三軍と獨逸の双方によつて作戦上二大敵といはる獨逸國境におけるフランス側のマジノ線とドイツ側のジグフリード線の南要塞線とはどんなものか

## 窪地に嘯く軍艦

### 一ヶ所三砲弾も平然

#### マジノ線

マジノ線は一九三〇年から工事に着手し一九三四年完成したもので總工費廿九億フラン陸軍省のベタン元帥、スプネー大將等の計畫によるもので當時の陸相アンドレ・マジノ將軍に因んで命名された、構築の時期は最初ルクセンブルグ國境のロンギオンから東南方ローレン州のヴォージュ山脈に至るもの、次いでライン河に沿ひスイス國境に至るもの、更に東部のベルギー國境に沿つてリールの先きまで至るものと三段に分かれてゐた、この延長約三百五十キロ、主力を注いだのは何といつてもドイツの國境に直接面

## 地球上最強陣

### ジグフリード線

ジグフリード線は一九三〇年から工事に着手し一九三四年完成したもので總工費廿九億フラン陸軍省のベタン元帥、スプネー大將等の計畫によるもので當時の陸相アンドレ・マジノ將軍に因んで命名された、構築の時期は最初ルクセンブルグ國境のロンギオンから東南方ローレン州のヴォージュ山脈に至るもの、次いでライン河に沿ひスイス國境に至るもの、更に東部のベルギー國境に沿つてリールの先きまで至るものと三段に分かれてゐた、この延長約三百五十キロ、主力を注いだのは何といつてもドイツの國境に直接面

の所在を測量し射手に命令を傳へるのである。すべて電話連絡で電話交換所は百五十ノットの地下にあり、同時にこの深部には地下倉庫が多数の武器、食糧を貯蔵してある、各要塞の間は装甲車道で隔られてゐるが、この厚さ加の中にも小室があつて内部には兵が銃を構へて屯してゐる、もし敵が要塞の一つを占領しても横切つて他の要塞へ攻め入ることを許さないものである。要塞に對する威力に對するフランス軍の信頼は、かつてのヴェルダン戰によつて培はれたもので、このマジノ線における一地の要塞による兵力は僅に五個師團の兵力に匹敵するといつてゐる。眞實はマジノラインの横断面

# 西部要塞戰では死闘

## 血と科學の爭覇戰

### 深刻！歐洲第二次大戦

英國のドイツに對する宣戰布告によつてヨーロッパは大戦終結後僅に廿一年にして再び全歐をあげての動亂の地と化した、大戦以來の戰爭科學の驚くべき進歩は航空

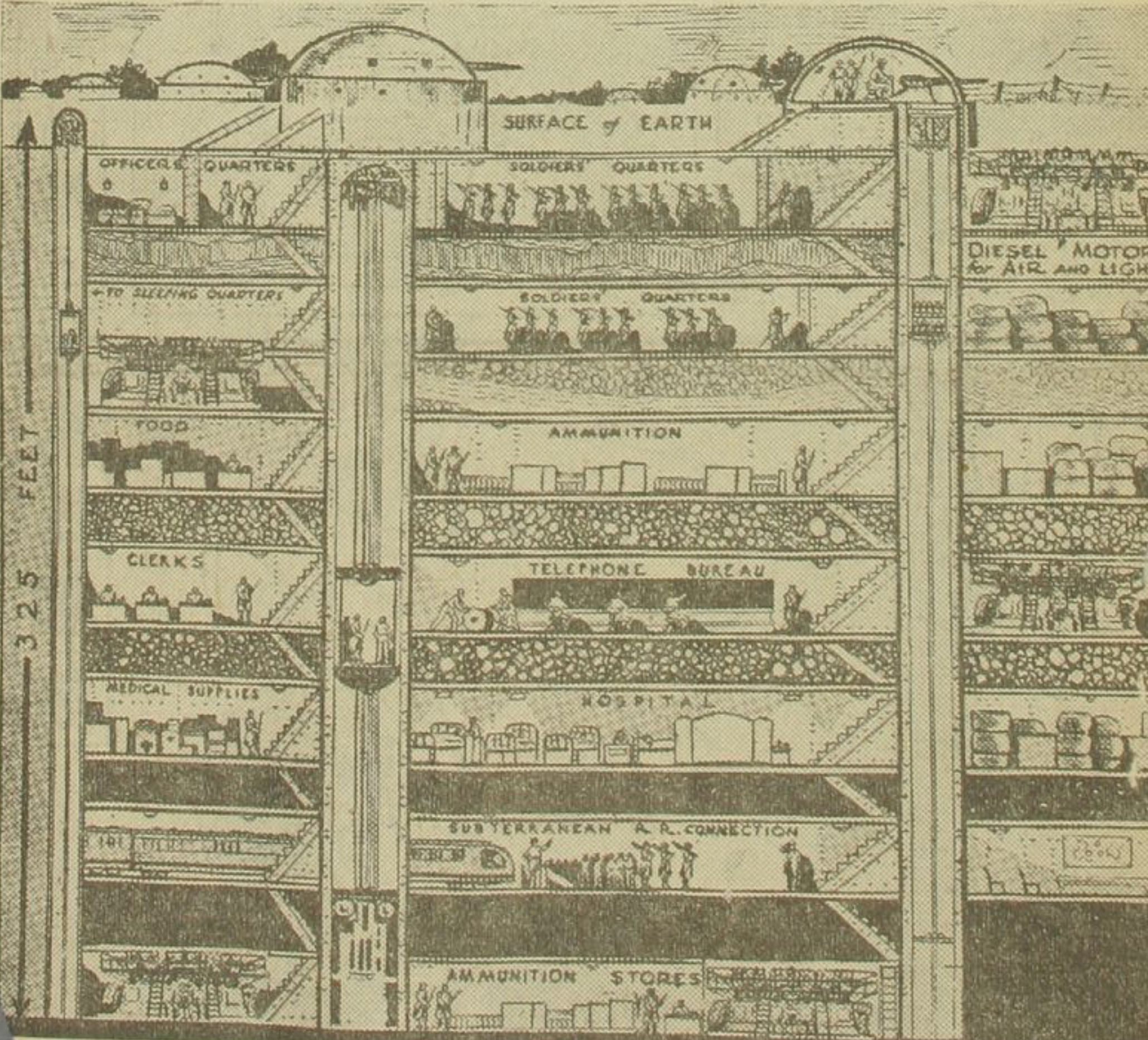
第一は獨逸の航空機が英佛の

比較すれば、ドイツの航空機は平時五十機、動員時九十機、大動員時二百機、ドイツ陸軍は一九三七年十月迄に豫備兵

イギリスが印度その他の植民地から派遣した軍隊は移しき數に上つたが、獨逸の戰術的軍勢力のため、ロンドンから地中海、スエズ運河を経て印度に至るインペリアル・ラインも果して歐洲

空襲は、大戦當時のツェッペリン空襲にも見られる如くそ

は作戦として容易ではあらうが



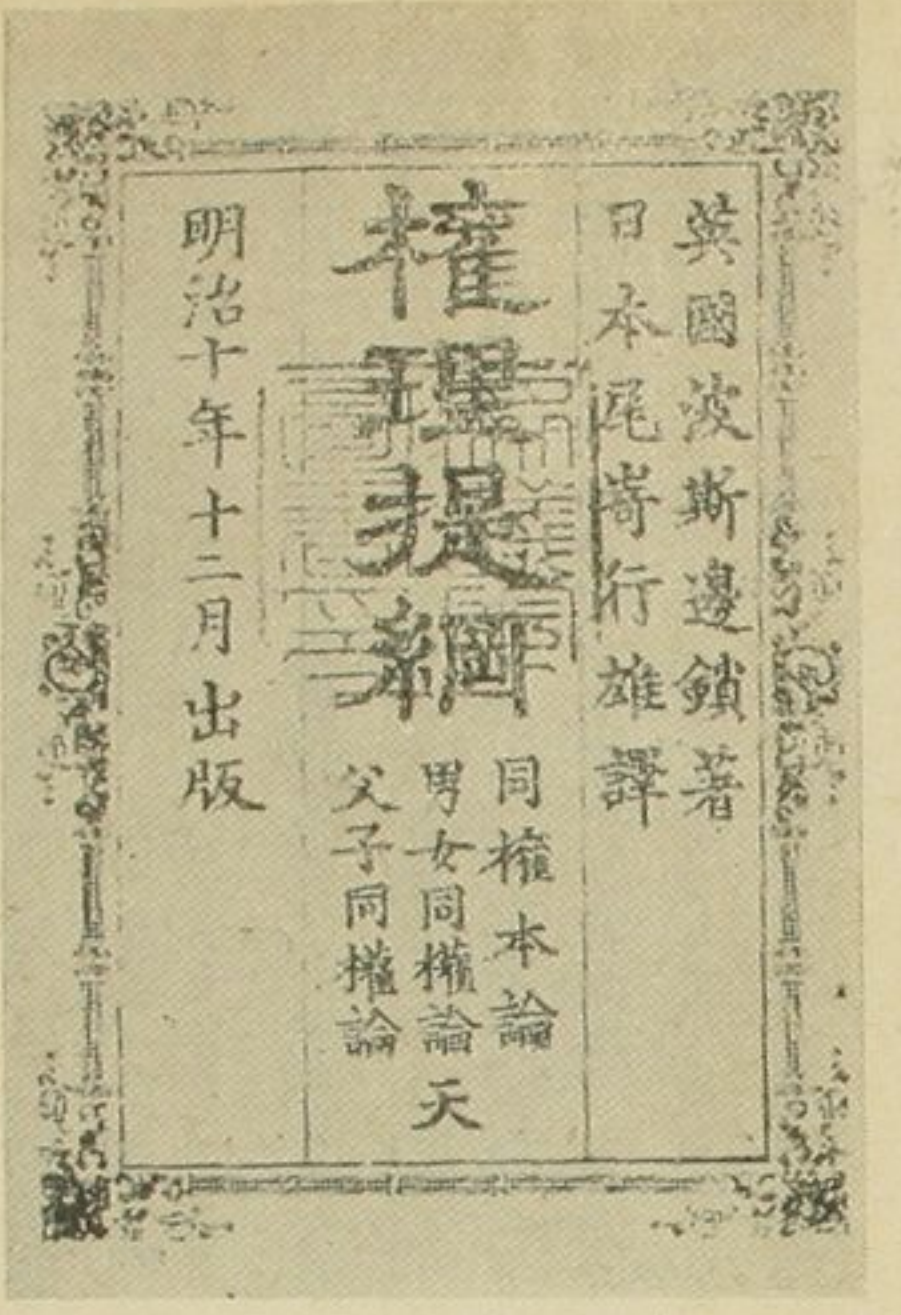


一、此書も、その著者、尾崎行雄  
 二、出た、その著者、尾崎行雄  
 三、その著者、尾崎行雄  
 四、その著者、尾崎行雄  
 五、その著者、尾崎行雄  
 六、その著者、尾崎行雄  
 七、その著者、尾崎行雄  
 八、その著者、尾崎行雄  
 九、その著者、尾崎行雄  
 十、その著者、尾崎行雄

今當時の文獻を手當り次第検索してみても、政治文獻として左の如きものが丸善から發賣されてゐる。  
 一、權利提綱 英國 波斯邊鎖著 日本 尾崎行雄譯 明治十年十二月 丸屋善七。  
 一、通俗民權論 福澤諭吉著 明治十一年 丸屋善七。  
 一、斯邊撒氏代議政體論 鈴木義宗譯 明治十一年十月 丸善商社書店。  
 一、普通民權論 福本巴著述 明治十二年十一月。丸屋善七發兌。  
 一、民權辯惑 外山正一著 明治十三年三月 丸善書店發兌。  
 一、權利提綱 改訂 英國斯邊鎖著 尾崎行雄譯完 明治十五年六月再版 丸善書房出版。  
 一、民權家必讀主權論纂 長束宗太郎編 明治十五年三月 金幸堂 丸家善七發兌。  
 一、主權論 傍木哲次郎輯 明治十五年 丸家善七出版。

標

應正しく議會政治の本質を理解し、その觀點より當時の中心問題たる國會開設論、自由民權論を論じたものであるが、相當理論的に選舉、三權分立、責任内閣等を論じてゐるのである。



絶頂期に、博士がその混亂、怒濤の渦中に溺ることなく、朝野何れの側にも偏らずに學者的立場より嚴正なる批判をなしたる文獻として知られてゐる。博士の立場は、スペンサーの學說に私淑し然もそれに囚はれず英國流の實證主義であつたとされてゐる。本書はその緒言に「主として

論ずる所は歐米諸洲に於て民權の伸暢し自由精神の發起せる顛末如何を審にし民權は果して如何なる時に於て伸暢するものなるか自由の精神は果して如何なる政府の下に於て發起するものなるかを明らかにし」と述べられてゐるが、自由民權についての比較的研究を試みたものであり、その學術的研究の結果よりして朝野何れの側にも現在の如く狂熱的に自己を主張し相抗争するの愚なることを警めたのである。當時民間よりは極めて熱烈な急進論が唱へられ、官邊よりはこれを國賊亂臣の妄動視する保守的所説か若くは民權そのものゝ存在を否定する固陋の見解か又は民權承認尙早論とも言ふべき所論の唱へられて相譲るところなかりし状態であつたから、本書の如き冷靜公平に批評せる文獻は、その點において獨自の意味を有してゐるのである。(因みに福本、外山の上述の著書は「明治文化全集」第五卷に復刻されてゐる。)

さて、とやかくと朝野双方の論議白熱化するうちに明治十三年も過ぎ十四年となるや、國會開設、憲法制定の國民的運動は愈々強化したが、所謂北海道開拓使官有物拂下事件の生ずるや、かゝる事件は必竟するに有司専制の餘弊なりとして民間全勢力は結束して政府を攻撃したから、廟堂

においても遂に拂下の許可を取消すと共に、二十三年を期して國會開設すべきにつき漸進穩健を以て自重すべき旨を宣明したのである。國會の開設は今や度々中外に公約されたが、こゝで生じた問題は、國會開設後一國の主権は何處に歸屬すべきや、何人の手に主権は握らるゝかの問題であり、これを中心として朝野双方から一大論争が捲き起されたのである。これ有名な主権論争である。而して長東宗太郎の「民権家必讀主権論纂」は、かゝる論争記録を編纂せるものである。

當時福地源一郎の東京日日新聞は徹頭徹尾主権在君論、即ち天皇主権論を唱へて、民間の主権論をルソーの民約説の亞流なりと攻撃した。これに對し、沼間守一、島田三郎、肥塚龍等の政論家の依れる東京横濱毎日新聞は、主権は君民の間にあり、即ち正理のうちにあるとして、東京日日の所説は専制主義なりと論駁して譲らなかつた。植木枝盛等最も急進的な論客の高知新聞は、主権は國家にありと主張し、最も主権在民の色彩の強き議論をして争つたのである。竹越與三郎氏の「新日本史」中巻に當時を敘して曰く。

「民権論者は之を駁して曰く、主権人民にあり。何となれば國家は人民の爲めに存するものなれば也と。然れども此の如き大膽無憚の言論を爲したるものは、二三の

地方新聞に止まり、東京にある民権新聞は、正經、中和の議論を爲せり。曰く主権とは一國統合政治大權也。其普遍ならざるべからざる、其統一ならざるべからざる、固より法權保守派の云ふ所の如し、唯だそれ然るが故に、天皇と人民と相集つて國會を組織し、皇權と民權との湊合一致する所の國會を以て、主権者となさざるべからず。」

當時の民間の議論の本流は、正に國會主権論であつたのだから感慨深いものがある。それはそれとして、長東宗太郎の前掲書は、これらの論争記録の主要なるものを集めたもので、當時地にも一、二同種の編纂物が出てゐるが、そのうちでも最も詳細なものとして「明治文化全集」第五卷には大體この長東本がテキストとして復刻されたほどである。たゞ唯一の缺點は、高知新聞の「國家主権論」が収録されてゐない點であるが、勿論他の類書とて此點は同じである。

傍木の「主権論」は此の時東京大學法學部學生たりし山田喜之助、岡山兼吉、文學部學生高田早苗、山田一郎、市島謙吉の五氏が此の問題を研究討論せるものを傍木氏が編纂せるもので、これらの大學生の主権學説が述べられてゐる。





の日人の支那の遊んで燕京の津に僅かに十日間の若壽山を  
 訪はるるも田の國の瘴煙を見たりと云ふことを今も古も  
 極と思ふのである北國の若壽山のすく北に位置してあり所  
 訪ふことハ容易なるものなり然るに方々あるからと云ふこと  
 此の千餘年の遺蹟にあり瘴煙と云ふことハ<sup>地理的</sup>趣味ハ  
 断絶と云ふことハ<sup>地理的</sup>趣味ハ断絶と云ふことハ  
 興味のあるものなるも昔も古も<sup>地理的</sup>趣味ハ断絶と云ふことハ  
 を履み憶ふべき故を馳せしものなるも、こゝハ古初傳へたる  
 の必らず支那帝室の禁苑を極め此踪ハ其の南の北断  
 断絶の推測も出来の所である。保く北國の記と云ふは  
 今の文と云ふは北國の大さきなり、東西約二千五百里、南北約  
 二千五百里、國ハ長春を都とす、其の北に山ハハ依れと云ふ

標原製

である秦皇の阿房宮も四倍大で禁苑も大なりといへ  
 るが、一帯を穿つて乾隆帝、帝以来の別業も、帝の多く  
 北國に住し、政務もこゝに見れたと云ふので、百官の公署もこゝに  
 集むるも、心てあり、禁苑ハ城ハ儀式を云へり行ふ事と云ふて  
 此れ觀かあるもの、乾隆以來此れを燒かへ、幾回も重修され  
 たりが、誰れもも知んでゐるが、阿房宮も英佛の甲子、蹂躪  
 されたりと云ふが、昔も威皇の法宮殿ハ焚かへ、曰次十二年  
 又或る程度再建せんれが、奉遜り乱す土民の掠奪も破壊も  
 せんれ、今ハ道路も広い處ハ殿址を徹すも、礎石すら取り  
 去んてあり、れは、大官の別荘をいかに焼きたる石柱ハ是  
 らも用いられた者なりある、今も北國の切んるの大湖名ハ石橋など  
 あり、と云ふ、其の善を徳にてある、當り、伊太利、即世家

の設計で書きたる洋館が設計したにかちう、とて支那に於ける  
 洋式宮殿の最初のものもあら、又大噴水の跡があるといふが  
 いろいろ噴水を造るゝ為の海堤等とて宮殿があらぬ  
 有る。こゝに又四庫の一事を文源閣と云ふにあり、内乱の爲め  
 去りて精舎にしてを造りて重修するに就てもちうくの歴史  
 史があら、同治年間と云ふ事か、の事外忌の折へて、同治の  
 始に始末を以りて重修を謀めたりと云ひ、龍き入らう、是て工  
 事を行つたことありとあり、英佛聯合軍の攻め入つた時、細工  
 が成りか、英軍の特派使節工ルギン伯の隨員バークリスが捕  
 虜となつて北國に幽閉せられたりともある。聯合軍は極分の津  
 浦を以つたが、せんりして林文海が著し、着千の物語に存するに、  
 是が一冊に存するやうに、銀燈籠の事、英佛の事も支那の事

標高製

の標高をよるとするに云ひらぬ。勿論、併軍の事や、津浦を  
 捕奪し、英軍後んがせん、同に入ると捕奪の事といひ、古敵を焚き  
 拂ふこと、朕念せをやりぬ、是れ、悲行の事、古史にほのこす相  
 違ふに、北國の事、斯の悲愴を歴史に有りてある。

の標本武揚が函館で決死の途あり、愛を、四庫の記の原書と云ふ  
 ことを、揚を、官軍の事、此の時の途を、北書と云ふ、情を、忍びず  
 と記し、此のを、日本の言、後、た、ま、る、工、ん、子、ん、サ、ウ、が、ん、を、  
 英、字、の、事、を、鳥、有、の、二、字、を、解、く、事、故、  
*out of request*

*that they should become the prefects of the*  
*Count.* 鳥の所居とて、  
 秋、合、ひ、あ、る、サ、ト、ー、の、如、き、日、本、通、り、た、二、字、ま、の、六、部、に、也、  
 〇白人集とて、白人集、其、等、の、人、の、作、か、ま、い、の、事、に、あ、る、事、に、也、

後々の性格が自らも現れてくる。

星の如く時得歌あるを夜に多小波

羅市の曲にほく子と胸のけり

美柳や爪環の人相に世月に

夏の間入るる似て夜更けに似て

夜に志の曲あるを吟る吟るあり

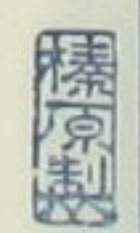
蜻蛉の今にこそよる目玉に

忍へとや風鈴吹つて止まぬ夜の

西君子の節と寄るとして柳のよ

世に愛の詩の歌は口より歌はるる

初汐や腋の言あるをい麻衣



~~~~~利いた山麓に話とまじり

根や枝渡くしき山の月

春木の袖と物柄を千穂花

四つに抱くがみまを顔の蛙の分

月も鏡す長堤十人衆のん

ゆりしとる夢山首のゆり

ふゆを寝しと市士の夢をけり

山間臥るるの異人丸

澄くし江の漲るを柳のふ

人ろくは山にせらるるを年外

初蚊張のちよいと氣にまじりて目丸

去くくとおひさまのあつさ  
 あの空に仙人ありや市晒し 蘭丸  
 四鳥う山河新なる春を  
 狼の遠き言や月の剣牙内  
 帷衣の白きに糸のちり羽織る  
 女郎女馬かゝる夜より法師丸  
 小庭の掃地ついでに靴ひとり  
 個代守宿るゝ丸に靴ひとり  
 小庭やあぢり木の傾ける  
 月ハ夜を糧吼えと峰尖る  
 屋根もも実とまゝ秋とまゝ  
 某の花やけり文の小判撒き



谷津で鮎游る花とみ晴し  
 鮎丸かゝる鮎丸 沼打り身の小庭  
 鶯鈴に軽き垢や紙礫  
 白路の首ハかゝる花とみ晴し  
 短檠に燐漏る風や鐘撞く  
 遠砧更けて出の言月の色  
 舟もせび是許の春  
 末の折れ七夫木の花とみ晴し  
 洗ひ米流のぬきしの氷うら  
 操七風此や海流の花を咲かせけり  
 紙魚やも七人の友の誰にぞ  
 玉鬘や其虫扇も紙魚の心





△人間に枕をくゞし睡んるゝ或ハ膝を枕として或ハ膝を枕して  
他ハ枕を睡時と楽しむ。枕ハ古等動ある特有物  
の道具也。人々の内々の枕席とくハ頭を枕する。是を勤むる  
枕ハ寝具の内最も古くあるもの。人間ハ頭を枕する。大抵の  
こと。ゆゑに、是を勤むる寝具ハ枕を尊敬する習俗が  
あつて、枕を足に踏んかすことを不敬として、枕を片づけ  
し時ハ特に重く扱ふ。如何と云へば、野ハ哲人の頭ハ  
百金工人の頭ハ枕より重く扱ふ。息を吐くのは、頭を  
床を敷きと扱ひて、大工の工夫を重くする。この枕は、古  
の語ハ「枕即野天」といふ。理想郷といふのであつて、  
野ハ楽境といふ。解する。狭い解釋ハ、冬ハ理想郷と解す  
ハ、卒らふ不当な哲人の枕して宇宙を包摂するの境とて、笑



唯立世ハ天下を席巻するの作圖を業し、高僧ハ塵世の無何  
有境を流び、清人の之をゆゑ拒敵し、百端の二巻をかゝる。ゆゑ  
奪元工の空を立つ。尚ハ枕ハ喜怒哀樂の伴伴ひあふ。太平を床  
に人ハ枕をちかむ。林あり、松間を穿つ。人ハ涙枕を流し、憂  
を人の智恵の源。作りの冬し人の喜怒哀樂の伴伴ひあふ。枕  
に心をくゞし、思ふと枕をくゞし、味の深重をくゞし、思ふ  
枕の二人ハ有る。くゞし、始末の枕ハ社会的の枕をくゞし、其者  
あつて、是れ笑ふ。人の頭を枕する。こんか又おせし。枕の  
花田の夢を枕や、始末の枕ハ、ゆゑの夢を枕する。情結の多般  
な、枕の事、枕ハ、事柄の更く自主心をくゞし、其ハ枕の事、枕  
は、柳比呂の語。



日支箱長秋何かしの郎刺と云ふ題に枕のこゝをいふく  
出いてあるのを讀んで、そこを漏れたいことのみを奉りてえり

枕と聞ても詩や歌ハ深山まゝハ是處に既ちあるもの

枕と聞ても詩や歌ハ深山まゝハ是處に既ちあるもの

枕と聞ても詩や歌ハ深山まゝハ是處に既ちあるもの

枕と聞ても詩や歌ハ深山まゝハ是處に既ちあるもの

枕と聞ても詩や歌ハ深山まゝハ是處に既ちあるもの

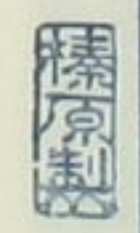
枕と聞ても詩や歌ハ深山まゝハ是處に既ちあるもの

枕と聞ても詩や歌ハ深山まゝハ是處に既ちあるもの

枕と聞ても詩や歌ハ深山まゝハ是處に既ちあるもの

枕と聞ても詩や歌ハ深山まゝハ是處に既ちあるもの

枕と聞ても詩や歌ハ深山まゝハ是處に既ちあるもの



俗の名の枕、並頭の枕、此翼の枕と云ふ枕である。

尚あり名を枕と國人にもいふる者、言わぬ枕本とよが

あるもの横屋の木の箱のさかきと枕と云ふは、かく付け

枕名である。

病室の枕さかきと云ふものあり枕と云ふ枕を二人の枕と

力を印すの枕と云ふものあり

支那人の方形の帆布の箱と云ふものを枕としてあるものあり

若くは枕の細くして字を歌をうけし枕と云ふものあり

若くは枕の細くして字を歌をうけし枕と云ふものあり

若くは枕の細くして字を歌をうけし枕と云ふものあり

若くは枕の細くして字を歌をうけし枕と云ふものあり

構造は異つては張りの木の枕である。

より古き枕と流し用としてあるが昔は折りのみの出来る枕が旅中も珍重された。

今も更木等の陶枕の血座を下ける作用があるからと云ふとき  
りに行かん出でるが陶枕は馬琴の頃からある馬琴がその  
一にの上座を防ぐ考と云ふて漫説。 此作つて贈つた人が

陶枕にも昔は漆や紙を貼るものもある。此の又古き無葉の  
作つた枕も古きものか、贈るのを所おとる。

昔は八寸のホツツの蔓を枕紙の下に潜りて用ひた。ホツツは  
睡枕に用ひた。昔は此用ひた。此のことが面白い  
様と云ふ。歎かす事もあると云ふ。信託がある。枕の陰は、  
の固がある。香枕と云ふ。此の固がある。



木の産と平くして左に頭か何れか傾けて枕が共に傾く

やうに云ふ。此を船産と云ふ。此は舟行へん。

昔はの尾根船。枕柄がある。昔はの尾根船。昔はの尾根船。

古くはの尾根船。枕柄がある。昔はの尾根船。昔はの尾根船。

此先づ古の枕の故。此先づ古の枕の故。此先づ古の枕の故。

山中の宿舎の枕。枕舎の枕も同じ。木はプロウリである。昔は

昔は多く昔は。民家の宿舎の時。丸太を枕に代用して。一本の

丸太を丸太の枕とする。夜寝る丸太の一端をカサウチに叩いて一

回を繰り返す。此は一無である。

一枕即ち別有天

春の枕流る。夢の流る。

第年高枕臥 枕木 枕上中書 枕流 枕江 枕山

酒と水(三)と御志(文庫書林)大月新

酒の味を私が覚へたのは灘五郷に住んでからで、もう二十数年にもなる。頼山陽が好物の「劍菱」...

あはれも杖はあや

あやあや

涙たえあやあはの

けしき

あきせゆく涙のきこ

あはれ

あやあやとや

人のあやめ

の麥酒は甚不味である。日本通の獨人博士は麥酒は獨逸が第一で...

支那では葡萄の美酒夜光の杯と稱し貴重品級にするが、葡萄酒は何と云つても佛國のがよい。...

にしたものを、幾十年の間穴倉に貯蔵してをる。客が最優良品を註文すると、給仕人は籠の上に瓶を横に載せたまま、恭々しく捧げ...

カクティルを食前に飲むは、食欲を増進する趣向だと云ふ。カクティルの起原は、英國の農村の或る農家で鶏小屋が火事を起し、...

を瓶詰めにし、ウキスキー用に輸出したら何うであらう。スコッチウキスキーの中では、オールドパーは最優品だ。...

服装談義

繪と文 矢 澤 弦 月 朝鮮美術展の用事で渡鮮すること三度、朝鮮各地を歩いて見て...

# 馬琴の隣附合

## 麻生磯次

偏屈で強情で交際嫌ひな馬琴の事であるから、隣近所との附合とても殆んどなかつた。神田同朋町の彼の住ひの門前には橋屋といふ菓子舗があつた。其普請が出来て、店開きの引札をくばつた記事が見えてゐるが(七月廿五日)、平生殆んど交渉はなかつたやうである。西隣は伊藤常貞の住ひであつた。馬琴が留守番をしてゐる所へ野菜賣が來たので、玄關へ出て白瓜の値段をつけてゐた所、隣家常貞の老妻が垣越に貌を出し、大根を買取り、其代八文を玄關前に投げ渡した、非禮傍若無人の致し方であると大いに奮慨した記事が見えてゐる(同八月十二日)。此伊藤方とは始終悶着をおこしてゐたらしい。常貞といふ人物は、彼の日記には可成り我利々々な老人として寫されてゐる。座敷の建増をしたが、其庇の垂木が五寸餘も垣を越え、雨垂が落ちる始末だつたが、先々我慢してゐた所(九月三日)、其後暫くして隣家から、瀧澤家の玄關脇垣際にある柳が邪魔だから枝を切

るやうにと云つて來た。そこで若し伊藤方で定法通り建増の家を一尺切つたら、此方の柳も抜き捨て申すべしと挨拶し、常貞を謝罪させた(同、十月八日)。其時はそれで納つたが、柳は其後も度々問題になつたと見え、辛卯日歴にも

隣家常貞(中)柳の枝伐せくれ候様申來る常貞自分勝手萬事言語同斷に候へ共いひ争ひも無益に付平生此方は何事も不言今日も承知候旨宗伯返答致すと云依之柳の枝伐透させ畢ぬ(七月廿一日)

「言語同斷」云ひ「寔に愚癡のたはけもの」などと、日誌で折々罵倒してゐる所から見ると餘程癪に觸つてゐたものと見える。

隣家伊藤常貞妻久しく病臥の處今曉八時死今日未刻の事葬送いたし候よしおみち右風聞を聞候よし候へ共常貞は此方へしらせに不及候間弔葬にも不及平日一向に交りなきによりて也(辛卯日歴、十一月十五日)

それも町住ひの常ではあらうが、兩家は長年隣合つて住んでゐたし、お互に一時さきの借家でもなかつた。常貞の我利と馬琴の意氣地とが噛合つて、結局妥協が出来なかつたものであらう。

北東隣は橋本喜八郎宅で、馬琴方より建仁寺垣を結び、橋本方では板扉を取付けて境にしてゐた(辛卯日歴、七月廿四日)。北三疊の縁頼から橋本方で軍書讀の講釋するのがよく聞える

といふ記事がある(同、八月五日)。此人は西丸御書院番でもあり元の地主でもあつた關係から一通りの交りはしてゐたらしい。

橋本喜八郎殿より赤飯壹重到來小女順痘酒湯祝儀のよし也(戊子日記、十一月廿八日)

などの記事が見え、尙馬琴の著書などを折々借用した事なども誌されてゐる。尤も辛卯日歴には、巡島記初輯五冊を返却し、尙あと借覽したき旨申して來たが、袋引破り、本に折をつけ粗末にして返して來たので、他へ借し手元にないと斷つた旨が誌されてゐる(九月廿六日)。素より深い交りでもなく、來往などは殆んどなかつたやうである。

比較的交際のあつたのは地主の杉浦清太郎(御勘定御方)であつた。松を植ゑかへるとして、此方垣際の李大枝を松にかけて折り、又垣外に出た李の枝を切るやうに申して來たといふ記事があつて(辛卯日歴、四月六日)、庭の植込の様子などから考へて、これは東隣になつてゐたらしい。此地主とは家庭的にも相當親しかつたやうで、杉浦老母が娘を折檻するのを見兼ねてお百が調停に行つたとか(戊子日記、九月九日)、杉浦弟

幾之介が御普請役仰付けられた祝に招待されたとか(辛卯二月十日)、宗伯が杉浦宅に行き加持を受けたとか(天保五年正月十九日)といふ記事で彼の日誌は相當賑つてゐる。

尤も潔癖な馬琴には、杉浦の處置にも色々不平であつたらしく、上述の李の一件では「彼人々のいたし方萬事かくのごとし嘆息々々」と云つてゐるし、清太郎には兎も角と

して、其繼母に對しては心よからず思つてゐた。其老母が馬琴方の表門脇へ犬小屋を造らせた一件では彼もすつかり奮慨し、「彼方手前勝手よろづかゝる事多かり」(辛卯日、六月)と云ひ、又「彼老婆地主風を吹せ傍若無人の計ひ多し實に嘆息に不堪也」(天保三年六月十五日)などと云つてゐる。其非道に堪へず一時は轉宅の計畫までもした。

今の地主の腹黒き人にて常に義理に遠ふこと少なからず斯くて巳丑の秋の頃、いと堪がたき事ありければ、轉宅せばやと思ひつゝ、根岸なる御神器方御用達林清三郎の地面の内二百坪を借地しつゝ、既に家作の事を急がして冬

十月上旬大工に作料の内金十兩を渡し遣はしつゝ、日を擇びて手斧始をさせんと欲せし程に、人ありて轉宅の事をとよめこれ彼れとなだめ扱ふ事の懇なりしに云々(後の爲の記)

それは文政十二年の秋の事であつたが、其後の日誌などにも、老婆に對する以上のやうな忿懣がもたらされてゐるのである。

馬琴は人と妥協の出来るやうな人物ではない。伴宗伯は半病んで人交ひを好まぬといふ風であり、妻のお百は癪持ちの稍氣紛れ者であつたらしい。そんな關係から瀧澤家は隣近所とも餘り親しくはしてゐなかつた。彼は結局それをよい事にして、自ら傲然とかまへ、著作に没頭してゐた事であらう。

(一) 百馬の圖

●山ほと小金が原にぞうろぞろ

―澤山の馬

一二五・二八ウ

(二) つゞれの錦○天保七年渡邊華山變名傍翠亭柴戸誰也良の戯作、一名傾城息子傳授、其中に引用せる川柳狂句の抜書、彼の雅量を窺ふに足る。

口切や汝を呼ぶは金のこと  
惚れ藥佐渡から出るがいつち利く  
色里はやはり黄色の事と見え  
暮の文三の切ほど哀なり  
來て見れば文の恨みの十分  
釣針のやうなかくて客を釣り  
金銀を取られた跡の歩あしらへ  
琴茶書畫並べた斗り知りいせん  
罷り越しさんと淺黄へ名をつける  
淺黄裏枕の紋をくどく聞き  
吉原で武道勝利を得ざる事  
世が變り客は廊下で舌を出し  
吉原が明るくなると内は闇  
孝行で賣られ不孝に請出され  
唐やうて賣家と書く三代目  
請出して見れば天窓も春の鹿  
これも又隣へ這入る上草履 誰也良  
これならば庭の花見て寝やうのに

しかのミならず丸藥をたど吞まれ

祐筆を雇つたやうなけちな晩

傾城に振られて歸る果報者

どの腔がほんの女夫に成らうやら

傾城も慾氣を去れば我が心

手近くに云へバ口舌も無心なり

懐かしくゆかしくそして金と書き

扱とやの所から伸びる暮の文

戀といふ正味の所ハ摘むほど

のたくつためゝずを餅で客を釣り

己惚を止めれば外に惚れ人なし

名を一字書かれて淺黄嬉しがり

人は武士なせ傾城にいやがられ

二三年定府國府のあくが抜け

青柳の撫でるも嬉し禿あたま

青柳の招けは動く心かな

孝不孝二つ列ぶる塗枕

印判のふくさで母は眼を拭ひ

傾城といふ字が直に異見なり

おまはんとわたいで内がおさまらず

けちな晩屏風の布袋還俗し

空寝入のつひきならぬ蚊に喰はれ

灰吹に狸の尻尾煙つて居

傾城に誠があつて運の盡き

誰也良

世界漫畫の鼻祖、Pierres 主作 (二三頁説明参照)



(圖るけつり賣を片阿に那支マッギン)

英國は支那に地獄告を興へた支那永久の仇怨で世界人類の共敵。  
英國は支那侵略の先驅者で支那の衰亡を企圖した阿片の毒者。

補遺



補遺

